市民文芸

令和元年度

函館市民文芸

第５９集

函館市中央図書館

指定管理者 TRC 函館グループ

函館市民文芸　第59集

目次

◇随筆（対馬　俊明　選）

【入選】

葬儀……佐藤　憲明　1

みどり……畠田　実里　3

Oh！相撲……髙橋　剛治　5

オガサワラ流……山野　みちこ　7

【佳作】

母の鼻歌……伊藤　曉　9

二人だけのワンマンショー……野口　裕子　11

再会……元木　いづみ　13

夢見た二十一世紀を生きる……佐藤　健　15

【選評】……17

◇小説（安東　璋二　選）

【入選】

鎮魂歌……畠田　実里　19

雛人形たちの記憶……日高　光　34

煌めきの『Zボーイズ』……髙橋　剛治　41

【佳作】

バザーの日……佐々木　文彦　57

マドンナ……縁　莚　勇二　65

◇文芸評論（安東　璋二　選）

【入選】

復元・『悲しき玩具』
～啄木の編集意図からの考察～……水関　清　71

【選評】……89

◇ノンフィクション（竹中　征機　選）
【入選】
土方歳三最期の足跡を訪ねて
（ある巡査の『書簡』から）　……木村裕俊　92
基坂の老医師……齊藤満　105
僕と勘太朗……菊地政義　117
【佳作】
ブログより……菱井亜紀　122
無題……宮川れほ　134
『紀元前十一世紀の倭人国』考　……髙橋剛治　135
【選評】……147

◇詩（鷲谷　峰雄　選）
【入選】
廃校、……武田友　150
【佳作】
電話ボックス……玉掛公恵　153
りんご……清水牧子　157
名もある花……梅村美保　159
【選評】……161

◇短歌（山縣　庸美　選）
【入選】石岡繁雄・清水法雄・水関清……163
【佳作】石嵜章枝・竹田光彦・柴田泰子・伊藤静子・
中崎裕美……163
【選評】……164
【選者詠】……165

◇俳句（熊澤　三太郎　選）
【入選】石嵜章枝・竹田光彦・水関清……166
【佳作】富樫進・清水法雄・住吉紀美子・齋藤ふじお・
佐藤理……166

【選評】…………………… 167
【選者吟】…………………… 169
◇川柳（中村　宵星　選）
【入選】白井靖孝・岩本真穂・水関清…… 170
【佳作】伊藤静子・水島悦子・加藤由美子・石岡繁雄・
大山利子……………… 170
【選評】…………………… 171
【選者吟】…………………… 173
◇審査員紹介・あとがき………… 174

随筆　入選

葬儀

佐藤　憲明

昭和二十八年四月、祖母が七十三歳で老衰で死んだ。五尺に足りない細身の背丈、栄養状態の悪かった当時としては、長生きだった。

父の職場の人たちが集まり、葬儀の段取りの相談がはじまった。

一間の玄関の間を帳場にした。その奥が台所だ。玄関の間の左手が床の間ひとはしりと、押し入れ付の八畳の居間だ。その奥に、ふたはしりの押し入れ付の六畳の座敷だ。普段、六畳の間に足を合わせて五人が寝る。八畳にはストーブがある。祖母と兄、私が寝ていた。

昼間は、座敷が母の病室兼、オマルを使うためのトイレ、寝たままで食事を食べさせる食堂、往診のときの診察室になる。

一番の問題は、肺病で寝たきりの母を、どこに寝かせるかだった。体を動かすだけで、多量の喀血をする。私は、母親と祖母の看病で学校を休んでいた。

私たち兄弟は、十九歳の兄から四年生になったばかりの、男だけの五人だ。

その当時の庶民は、みんな、自宅で葬儀をした。四軒長屋の一番端で、外に、弔いに来てくれる人の下足と、手伝いの人のためのテント小屋を造った。采配役は父と二十分ほど相談をして、寝ている母の枕元に座った。

「なー母（かあ）さん、縁側に寝床をつくるから、そこならどうだ」

と采配役が母を説得した。そのとき父は、

「トイレはどうする」

と訊いた。

「なに、男連中は外でいいべ。女衆は隣の家だ。家族のものは、母さんの傍を伝って使え。これでいいだろう」

トイレは縁側の奥にある。母を縁側に寝せると、布団の縁を践まなければならない。

兄と私は父に手伝い、母を寝たまま布団ごと半間幅の縁側に移し、障子を閉めた。

六畳と八畳の二部屋に祭壇とお参り客の会場を作る。葬儀屋が大道具・小道具を運んだ。

采配役は、若い手伝い人（と）に六畳と八畳を仕切っている襖を外させ、テント小屋に運ばせた。グッと広い空間ができた。八畳から見て、縦長の六畳の奥に祭壇を組んだ。障子を挟んだその裏に、母親が縁側で寝ている。

札幌、小樽から親戚一同が到着した。

持ちものは、すべて押し入れの中に仕舞い込み、部屋をふさがないようにした。縦長の六畳の一間分を祭壇がふさいだ。

葬儀がはじまる。お寺さんが祭壇前の中央に座り、衆目を背にし、儀式用の衣の入った風呂敷を解き、座ったまま左手、右手と着てきた衣を脱ぐと、白の長襦袢姿だ。儀式用の衣を着る。その間、膝と腰を僅かに動かすだけ、一度も立ち上がらないで見事に着替えた。

読経がはじまり、会葬者は静かに聞き入る。

はじまって十五分位した頃、祭壇の奥から微かに咳が聞こえたが、止まない。会葬者の多くは、祭壇の後ろに母が寝ていることを知らない。

私は慌てて会葬者をかき分け、母の元に行った。洗面器を抱え、たくさんの血を吐いていた。枕元も血が飛び散っている。背中をさすり、チリ紙で口をぬぐう。もういいよと、母が手で合図した。その目に、一杯の涙が月明かりで光っていた。私は涙をかみ殺した。一緒にいたい気持ちを残し、席に戻る。

読経とお寺さんの説教が終わると、お寺さんは祭壇に向き直り、またも座ったままで手早く衣を着替えた。

会葬者は、概ね我が家の事情は知っている。早々に引き上げてくれた。

親戚一同を、どうして寝かせるかに父が迷っている。母を、みんなのところへ寝かせようとしている。父の、母への思いが身に染みる。だが、どう考えてもこの狭さでは無理だ。兄は、押し入れに四人が寝られると提案した。兄は一八〇センチと背が高く、押し入れには寝られない。戸を外し、残り四人の兄弟が寝ることにした。私と次弟が下の段に寝た。

借家は束石建てだ。押し入れの床板の下は冷たい風が吹き抜ける。床板の合わせ目も隙間だらけ、北海道の四月はまだまだストーブが必要だ。たくさんの親戚縁者に、みんなが薄っぺらい煎餅布団一枚だ。

私は、母のオマルを取っていると、兄が角巻きを持って来た。二人でかけてやる。

押し入れの布団に横になったが、底冷えがジーンとして、なかなか寝付かれない。

母のことを思った。縁側のガラス戸は、ガタビシの隙間だらけの一枚戸だ。カーテンもなく、月明かりがまともだ。押し入れどころの寒さではない。

涙が出て、いつまでも止まらなかった。

葬儀が終わり、みんなが帰った。

「母さんの葬儀だと思ったよ。死んだら葬儀はいらないね」

と母は泣いているのか、笑っているのか、顔をくしゃくしゃにした。

寝たきりでもいい。生きていてくれるだけで、うれしかった。

随筆　入選

みどり

畠田　実里

病院のトイレに入った。
ドアを閉めたら、目の前に張り紙がしてあった。
「当院は院内はもとより、敷地内においても禁煙です。喫煙が発覚した方は、入院患者であっても、即時退院させていただきます。院長」

愛煙者には、気の毒な世の中になったものだ。吸わない人は、「禁煙したら」と、明快な答えを出す人が多い。タバコを止めれば、体にもいいし、無駄遣いも減る。そのうえ、他人の健康にも寄与出来、大げさだが強いては環境にも、役立つと言えるかも知れない。いいとこずくめである。
わたしは、もうすぐ八十歳になるが、タバコは吸わない。と言い切りたいところだが、そうは言えない、苦い思い出がある。
中学三年生の時だった。「みどり」と言うタバコがあった。吸うとハッカの味がする。当時の言い方だと「スースーする」というやつだ。

ところで、漁師の子どもは小学生くらいから、タバコを口にする。吸うのではない。大人のタバコに火をつけてやるのだ。口にくわえてマッチを擦るとき、吸わなくちゃ火が付きにくい。それに風が強い時は、強く吸わなくてはならない。それだけのことである。
大人が、自分でタバコに火をつけたらいいのに。そう思うだろうが、コンブ獲りではそうはいかない。獲る人は、ずぶ濡れ状態になるからだ。これではタバコもマッチも濡れてしまう。
幸いなことに、トモドリ（舟の後方・ともにいて、コンブが獲りやすいように、櫂で舟を動かす人）は、通常濡れない。だから、タバコに火を付けるのは、トモドリの子どもがやることになる。トモドリは小学校一年生くらいからやるのである。
そんなわけで、大人に「おいタバコ」と言われると、火をつけることになる。吸う吸わないに関係なく、タバコが子どもの身近なものとなる。
学校でも「子どもによる『タバコの火つけは禁止に』」と、話題になったりするが、生産優先で立ち消えになる。

話を「みどり」に戻すと、二学期が始まって間もないころだった。まだコンブ

獲りの最中である。昼休み、弁当を食べるのに友達数人で学校の裏山に登った。山と言っても小高い丘である。

ひとりが

「おい、このタバコ知ってるか」

と、ポケットから取り出したのが、「みどり」だった。

「ああ、知ってる。ハッカ入って、スースーするんだろ」

「おれ、吸ったことある」

知らなかった。勧められるままひと口吸ってみた。ほんとにスースーするのだ。父のタバコと違って口当たりがいい。三口、四口と腹まで吸ってみた。

やがて、気分が悪くなって、眩暈がしてきた。終いに動けなくなって友達におんぶされて、学校にもどった。

だれが先生の耳に入れたか判らないが、つぎの日の朝会で「みどり」仲間は、みんなの前に出され、長い説教の後、教頭先生に一発ずつビンタを喰らった。

忘れられない、遠くて苦い思い出である。

わたしの父はタバコを吸っていた。四十五才の若さで事故で死んだ。母は肺がんが脳に転移し、脳腫瘍も併発して死んだ。八十歳だった。

父の喫煙からの、受動喫煙によるものかどうかは定かではないが、全く影響はなかったとは言えないだろう。

喫煙をめぐる状況は、益々厳しくなるご時世である。愛煙家も肩身が狭いだろうが、自分の健康のため、家族のためにも禁煙したいものである。

随筆　入選

「Oh！相撲」

髙橋剛治

八月十六日函館アリーナでの大相撲函館場所を妻と観覧に出掛けたのは、これまで相撲のスの字にも関心の無かった妻が、急にそれに興味を示したからだった。理由は謎で本人にも分からない様なのだが、後述する通り、『よっぽど暇』だったのかなと思われた。

私的（わたしてき）には横綱稀勢の里引退で興味を削がれていた初場所だったが、妻は五日目辺りから放映を見始めたらしい。つられて九日目からは私も、一緒に十両からの中継を全て見ると言う事になったのだが、こんな長時間視聴の毎日は、妻は勿論、私も初めての事だった。

小学生の頃は幕内上位の取組を熱心に見ていた覚えがある。当時通っていた青柳小では年一回、学級対抗相撲団体戦があって、昼休み級友と相撲を取る等、人気があったのだ。

パソコンで『一九六九年の大相撲』と入力して調べると、横綱大鵬の晩期だった。あぁそうだった、と懐かしく思う記載が多い。これ以前の時期になるが大関豊山のファンだと周囲に公言し、理由が大成しない大器への複雑な熱情であったと思い出し、頭を抱える。それは今に至るまでの私の嗜好性癖だった。

しかし結果やハイライトは夜のテレビニュースや新聞で確認はしていたが、いつしか相撲は私の熱中の対象から外れて行った。当時で印象に残るのは初代貴ノ花と北の湖との優勝決定戦で、高校の研修旅行の宿泊先で同級生等と大勢で見ていた事もあり、結果が出た時の歓声、大盛り上がりだった記憶が蘇る。貴ノ花への判官贔屓で、恐らく日本中から悪役のレッテルを貼られ、若く、無敵であった横綱北の湖は悪の魔王のような扱いだった。

ここまで書いて、ふと資料を当たってみたら、やはり記憶が不確かで違っている所があった。この時の北の湖は横綱昇進間際で優勝回数も四度、敵役ではあったがまだ全盛期前だったのだ。この敗戦とライバルの横綱輪島の壁を乗り越えた先に『憎らしく強い横綱』と言われる時代が来るのであるが、その頃大学生であった私は他に熱中するものもあり、大相撲に関心を失っていた。優勝の力士が誰か位は新聞で目にしてはいたが、放送を見るのは稀で、人気のなかった同じ道産子の偉大な横綱に対し、申訳ない位無関心であった。

キャリア晩年になり北の湖は、足腰の

怪我に泣かされて、悪役イメージが薄れ、勝って拍手が贈られる状況になっていた。それは勝負の世界の不条理ではあったが、強い横綱には良い事ではなかった。社会人として藻掻いていた私も、そんな北の湖を応援していた。

北の湖引退後、千代の富士や若貴ブームもあったが、私的には忙しい時期で、結果をチェックしているだけで関心は高くなかった。

さて話を妻について戻すと、家のかたづけやら遣る事は山積していたが、函館移住で体調が優れず、悩みながらもボーッと暮らしていたので、暇は暇で、初場所五日目から相撲中継を見ていた。それで何故か玉鷲を応援していたのが、十日目までの白鵬の独走から、最後に玉鷲逆転優勝になり、嵌ったようだ。

以降三場所その状態は続いているが、応援する一番手力士が逸ノ城に代わっていた。何故か、どこが良いのかは?だが、本人曰く、クチャっとした猫顔が◎と言う事で、相撲内容とかではないらしい。妻は上位をモンゴル勢に占められている近年の大相撲事情を知らない。私などはやはり日本人力士に奮闘してほしいのだが、その辺は感覚がグローバルなのか、知っても気にしていない様だった。

又一番興味を持ったのが、力士が土俵下で控える時に座る座布団についてだった。あれは個人専用のようだが、誰がそこまで運ぶのか、と通路奥でそのでかい座布団を腹抱きしている付け人を見て、疑問を口にした。係員が付け人から受けとって置き、返す事を彼女自身で観察し、調べて分かったのだが、私はこれまでそれに関心すら抱いた事がなく、妻との興味対象の違いの方にひどく感動した。

まぁ、そんなこんなで、東京に居た時には本場所に行く事もなかったのが、定年退職で故郷に戻って一年後の今、三年振り函館に来る夏巡業に出掛けることにしたのだった。そういえば子供の頃、亡くなった父に連れられて大森町の慰霊堂での巡業へ行った事があった。父は佐田の山のファンだったが、それは遠い記憶で誰が出ていたのかも忘れている。

当日、二階椅子席前列から、妻は周りの声援に伍して、「逸ノ城」と叫びたそうだったが、さすがに気後れして出来なかった。しかし買ったお弁当セットについている記念座布団を満足そうに持ち帰り、それなりに満喫はしたようだ。妻の気まぐれがこの先どれ程続くかは何とも予見の仕様はないが、今の私には時間だけは結構できたので、妻の熱が醒めぬ限りは、中継観戦に付合うつもりでいる。

じっくり見る二〇一九年の大相撲は世代交代の時なのか、一寸面白いと感じる。

（了）

随筆　入選

オガサワラ流

山野　みちこ

趣味の仲間と食事にいったときのことだ、十年ほど前のことだが――。

それぞれの注文をしたあと、ひとりが「ちょっと失礼させていただきます」と言っておもむろにパンプスをぬぎ椅子のうえに正座した。すると「わたしも…」と彼女と同年代の仲間がすかさず同じようにした。そして「わたしたちってこの方がラクなの、落ち着くのよね」と晴れ晴れとうなずき合った。サークルの中では年長の、古稀をすぎている二人がとった行動を私は最初あっけにとられて眺め、身についている行儀作法のゆるぎなさに感嘆した。

私は正座が苦手だ。体重があるせいもあってか、すぐ足が痺れる。育った家は丸い卓袱台だったから、それなりの躾はされていたと思う。だが結婚してから〝安楽〟な椅子の生活を選択してきた。正座するのは、たとえば葬儀のときぐらい。不謹慎だが、故人を悼むより、めったに正座しないという緊張も加わって足の痺れに気をとられながらの参列だった。まわりの人は数珠を手に一心に哀悼をささげているのに。――今は、その場もほとんど椅子になった。私だけでなく日本人の暮らしは〝座る〟から〝腰掛ける〟が主流となったのだろう。

そして、このところ周辺で、胡坐に関しての話題が続いている。子（娘）世代に、胡坐が浸透しているというのだ。「食事に招いた娘の友人が胡坐をかいた」「息子の嫁が胡坐で食事する」等々、現代の若い女性は人前でも悪びれずに胡坐をかくそうだ。初めて聞いたとき、行儀に関しては何も言う資格がない私だが信じられなかった。ただ、いずれも座卓での食事だったからこその出来事。座卓を前にして、生まれたときから椅子の生活をしてきて正座する機会がなかっただろう彼女らは内心、どうしようか戸惑っていたのかもしれない。

若いとき、〝座りダコ〟に悩んでいる友人がいた。素足を見せながら、どうしてこんなものが出来るんだろうと嘆く。なめらかな肌のそこだけに、ふてぶてしい岩のような丘陵があった。彼女は、私と同じようにお茶もお花もしているわけではない。「きっと普段の行儀がとてもいいからよ」と言いながら、それらしきものが見当たらないじぶんの足の甲を、少し恥じ、少し優越感をいだいて撫でたものだ。

それが、高齢者の仲間入りしたあたり

私にも同様のものが現れた。あのときの友人のように立派ではなく無視していいぐらい控えめなものだったが、いまごろになって、どうして?と不思議な思いにつつまれた。

はじめのうち申し訳なさそうな様子だったその〝座りダコ〟は、時間を経るにつれ自信にあふれた貌となった。予想外の事態を受けいれ納得するため私は考えた。きっとこれは、いわゆる遺伝子の作用なのではないか。正座してきた日本人は〝座りダコ遺伝子〟をもっている。これまで休眠していたその遺伝子が今になって、理由は不明だが目覚めたのに違いない。

正座の歴史をインターネットで調べてみた。意外なことに、正座というすわりかたが日本人に定着したのは思っていたほど昔ではなかった。儀式など上下関係を顕在化させる場で採りいれられていたが、江戸時代から広がりはじめ(有名な小笠原流の礼法は武家社会のものだという)、明治政府が「日本人の正しい座り方」としたそうだ。生命の進化とともに遥かな永い時間を経て私の足の甲にあらわれたかもしれないと〝座りダコ〟を神秘的に空想していたのにガッカリ。

拍子抜けした私はさらに、胡坐についても思いがけないことを知ることとなった。日本では昔から男女とも胡坐や立膝のほうが一般的だった。平安時代、十二単に袴だった女性も、茶道の元祖・千利休も胡坐で茶をたてていたという。そうと分かると、今の若い世代の胡坐は日本本来に還っているといえる。

思いがけない事実に、ノートパソコンを開いたまま暫し頬杖をついてぼんやりしていたが気をとりなおし、夕飯の支度をしようと心身にスイッチを入れた。すると、椅子のうえに正座しているじぶんの姿を発見した。いつかの食事どきの先輩のように、広くもない椅子の座面にしっかり足を折って!

洗濯物をたたんだり新聞をひろげるとき自然と床にすわる。そんな毎日の微々たる積みかさねが正座は苦手な私にも〝座りダコ〟を形成させたのだろう、それだけの歳月生きてきたのだと感慨がわいた。

最近とみに椅子に正座するようになっている。だいたいは腰かけているのだが、文章でいう句読点のような役割とでもいうのだろうか、気分転換だったり、やっていることを変えるときその恰好をする。十秒にも満たない短い時間から足が痺れるほどの長さのときもある。だらけていた筋肉が活性し、いっせいに整列をはじめるようだ。正座だけが感じさせてくれる爽快感だと思う。我流の作法で、健やかな〝座りダコ〟とともに暮らしている。

随筆　佳作

母の鼻歌

伊藤　曉

引き揚げ船から降りて歌志内への汽車に乗るべく函館駅構内の線路を歩いていて転び、ガラスの破片で手を切った時の祖母が裂いた手ぬぐいの音。歌志内の狭い橋の上で前から来る自転車が恐ろしかったこと。身を寄せていた叔母の家のガラス戸の向こうに立っていた軍服姿の父等々。私の幼い頃の思い出はそれぞれが僅か数秒の映像フラッシュとして浮かぶだけだ。そして今まではそれが思い出というものだと思っていたが、この頃どうしてその映像が思い出として残ったのか考えるようになった。歳のせいだろうか。

その一つにこんな思い出がある。念願の家が建ち、その新しい台所で炊事しながら母が鼻歌を歌っている、という思い出映像である。

新居の嬉しさは、引っ越しの前日兄弟だけで蚊帳と二枚の布団で一晩を過ごした時の木の香として残っている。それなのになぜ母の鼻歌なんかが思い出になったのだろう。

母はいつも鼻歌を歌っていた。そして私は鼻歌を歌っているときの母が好きだった。鼻歌を歌うという母の心の状態が好きだったのだろう。母は穏やかな人で感情の起伏を表情にあらわすようなことはほとんどなかった。一度母の財布から十円をくすねたときも、しっかり叱られたが表情や言葉を怖いとは思わなかったくらいだ。鼻歌を歌う時に感じる母の機嫌の良さは末っ子の私には本能的に感じる安定感だったのかもしれない。

だから幼い頃に覚えた歌はほとんどが母の鼻歌を通してだった。唱歌や童謡はもちろん「笛吹童子」「鐘の鳴る丘」も母の鼻歌で覚えたし、母の女学校時代の愛唱歌だったと思われる「夏の想い出」や「ゴンドラの歌」、当時ＮＨＫラジオで流されたラジオ歌謡「森の水車」「高原列車は行く」「雪の降る街を」など母が好きで歌う歌は全部私も覚えた。歌詞の意味など知るよしもない。

私は男ばかりの四人目の末っ子として生まれた。母は私を産む時「今度は女の子であってほしい」と思っていたようだ。産着なども赤いものを用意していたと祖母から聞いたことがある。今考えると家族全体が「女の子だったらよかったのに」と思っていた節さえある。母は幼い私におはじきを教え、お手玉を教えた。小豆をいれたお手玉を作ってくれた。針

を持ったのも学校の家庭科での実習よりも早かった。私は得意になって母の相手をした。そのひとつが母の鼻歌を通しての歌だったのかもしれない。

しかししだいにそして当たり前のように私は外に遊びに出ると夕方まで帰ってこないどこにでもいる男の子になった。母も時々は歌っていたのだと思うが母親べったりの子でなくなった私は母の鼻歌が耳に入らなくなっていた。

そんな時の母の鼻歌映像なのである。鼻歌にしては大きな声だったのかもしれないがとにかくそのときは「あーっ、母さんの鼻歌だ」という感じがあった。昭和二十八年、家を建てその新居に引っ越したばかりの時である。

戦前私の一家は樺太、豊原に住んでいた。父は樺太庁に勤める公務員で、床の間に五月人形が飾られた写真を見た記憶もある。結婚し四人の男の子を生み育てていた母は幸せだったのだと思う。しかし戦局は悪化、父が出征しそして敗戦、進行してきたソ連兵によって留守番をしていて家を守ろうとした長男は硬いロシア兵の軍靴で蹴り殺された。どんな思いで兄を荼毘に付しただろう。しかし悲しみに沈むことも許されず残された三人の子どもを連れて父のいない中本土へ引き揚げなければならない。祖母はいてくれたが混乱した情報の中真岡、大泊、豊原と移動させられたりその間の衣食住を確保したり、並大抵の苦労でなかったに違いない。それでも着の身着のまま歌志内の父の兄弟達がいるところへ身を寄せる事ができた。叔父叔母は親切にしてくれたが食べ盛りの男の子を連れての居候は肩身の狭い思いだったろうと思う。やっとシベリア抑留から生還した父が函館に職を得て移住。折からの住宅難で用意された家は二世帯同居。子どものいない石井さん夫婦はとてもいい人でおばさんと母はとても仲が良く台所も風呂も便所も共用で住み分けていた。しかし汚すのは圧倒的に男の子三兄弟だったろうし、六人分の食事の支度の方が台所を占める時間も場所も大きかったに違いない。

そんな戦中戦後の苦労の十年間の末の新居だったし、「主婦である自分一人の台所」を得たという心のありようが鼻歌になって私に届いたに違いない。

もちろん母の戦後はそれで終わったわけではない。引き揚げの時ロシア兵に殺された長男の命日にはどうしてか自分の罪であるかのように一人で菩提寺に詣っていた。

歌が好きな母だから鼻歌は歌っていたと思うが、あの新居での鼻歌以後母の鼻歌の思い出映像は無い。

随筆　佳作

二人だけのワンマンショー

野口裕子

「裕子は歌手になったから忙しくてここに来れないんだよ。」と、父がホームの人達に言っていたと姉から聞いて、目頭が熱くなったあの日。

青森で一人暮らしをしていた元気な父も寄る年並みには勝てず、足腰が弱くなり、一人での生活が難しくなったので、青森の有料老人ホームに入所することになった。足腰は弱っていたけれど、後は元気だったので、他のご老人の面倒を見て、共同のトイレが汚れていたら、自分で掃除してあげたり、自分の部屋の掃除も、ヘルパーさんにお願いしていても「自分がやるからいい。」と言って、自分の出来る事は全部自分でやるような父だった。私が函館から父のところへ行くのを楽しみにしていて、行く事が分かると、病院の売店からあれこれお菓子をタップリと買っておいて、お土産に持たせてくれる父。「おめ（あなた）が来てくれれば最高嬉しいな～。あと、何もいらない。」と嬉しい言葉を言ってくれるから、私も会いに行くのを楽しみにしていた。私の結婚が決まった時も、実家から離れた函館にお嫁に行く事になり、それまで、父と私と二人暮らしが長く、私が結婚したら、父が一人になってしまうのに、反対する事なく、心から喜んでくれた。そんな父だった。

元気だった父も、年齢的な事もあって、徐々に認知症が進んで行き、時折変な事を言って姉を困らせたり、ヘルパーさんのお世話になる事も出てきた。そんな時、私が大病をして、長期治療が必要となり、父のところへ行けなくなった時期がしばらく続いた。父に病名を伝えたら、ショックできっとおかしくなってしまうだろう。絶対に父には伝えない事にしようと、姉と決めていた。そんな状態で、私が父に連絡も取っていない時に、父が、私の姉に言った言葉が冒頭の「裕子は歌手になって忙しくて来れないんだ。」という言葉だったのだ。普通なら、何で来れないんだ、と、文句のひとつでも言うと思うのに、何ひとつ、私に対する文句を言わずに良い方向に解釈してくれて。早く会いたいとか淋しいとか、そういう言葉を吐くこともなかったと言う。本当は待ちわびていたに違いないのに、いつでも娘の事を第一に考えてくれる父だったから、と思うと涙が溢れてきた。

それからしばらくして、私の夫が病気で亡くなり、父も認知症がかなりひどくなり。それでも私の事は最期まで覚えて

いてくれた。私を歌手になった、と言っていたのは、夫が歌を作っていて、夫の作った歌を歌ってCDに吹き込み、自費出版したCDを持っていって父に聞かせた事があるので、私が歌手になったと思ってしまってたらしいのだ。

それから父は、だんだんベッドから起き上がる事も出来なくなり、寝たきりの状態が続いた。もう、車椅子を押して散歩する事も出来なくなった。そんな状態になった父のところに行って、何が私に出来るだろう?そう思った時に、父のベッドのかたわらで、童謡を歌ってみようと思った。私は父の前では歌手でいようと!元々、私は歌う事が好きで、現在は地元の合唱団で日々歌っている。そうだ、私が出来る事は歌う事!そう思ったからだ。歌詞カードを準備して父に見せながら歌った。そうすると、目を細めて「上手だな〜!」ととにかく褒めてくれる。そして、一緒に口ずさんでくれた。しかも、父が歌詞の情景まで説明してくれたのには驚いた。さっき食べたご飯の事も忘れてしまうようになっていても、歌は覚えている。歌には不思議なチカラがあると思った。

以来、私は、父のところに行くと、「さあ、これから、ワンマンショーを始めます!」と言って、父の枕元で歌うようになった。父はニッコリと笑ってくれたり、一緒に歌ってくれたり。その時間が愛おしく感じていた。父が亡くなる少し前にも、「もしもしかめよかめさんよ。」と歌ったら、一緒に歌えて、とっても上手に歌えたので、「お父さん、上手!」って褒めたら、ドヤ顔してくれた。余りに素敵な顔だったので、動画に納めた。それが父と歌った最期になった。

父と二人だけのワンマンショー。私は、父の前では歌手でいられたのかもしれない。その時に思った事がある。歌のチカラについて。歌は不思議だなって。どんどん記憶がなくなっていってしまっても、歌はカラダのどこかで覚えているんだなあって。そして、歌は笑顔になる。歌っている方も楽しい気持ちになって笑顔になる。歌は目に見えないスゴイチカラを持っていると感じている。

父の一周忌も終えた今。私は新たな事をしようと考えている。歌でもらえる元気、笑顔。父だけでなく、他のたくさんの人達とも共有したい。私の歌仲間と共に、この冬、老人ホームの慰問をする事を決めた。そこで歌って一緒に笑顔になりたい。今度は本当にワンマンショーが実現出来そうですよ、お父さん。

随筆　佳作

再会

元木　いづみ

色白のぽっちゃりした女の子が駆けて来る。ああ、彼女だ。彼女は六才。転びはしないかと手を差し出そうとする母親の方は向かず、伏し目がちに「いいの！」とつぶやいた。

その場面は、これまでに幾度となく再現された。

昨年の十二月八日は真冬日だった。朝十時頃、自宅の電話が鳴った。携帯電話中心の通信になり、固定電話に知人がかけてくることは、ほとんどなくなっていた。それでも、何か気になりディスプレイされた番号を見た。心当たりはなかった。もしや、と思い携帯電話を覗くと同じ番号の着信があった。私が番号を教えた相手かも知れないと思い、すぐかけ直した。

誰だろう、と耳を澄ませた。二十年ほど前に担任していたAちゃんだった。懐かしさの余り声が上ずった。

彼女との出会いは、古い木造校舎も残されており、藤棚のある小学校に赴任して三年目の時だった。

「お久しぶりです。」と電話を通して聞こえる声は、やや低めながら滑舌よく母親似になっていた。「お会いしたいです。」と敬語が身につき飾らぬ口調に緊張感も解けた。

一週間後、私たちは、木調のテーブル・椅子、そして、いつものように一輪差しの置かれている喫茶店に向かい合い座っていた。

自家焙煎の珈琲の香りが漂い、土曜日にもかかわらず静かだった。

二十八才になったと言う彼女は、色白のふっくらとした面持ちは変わらず、眼差しは安定を示していた。ピーコックブルーのダウンを羽織り、部分カラーを施したアシンメトリーのヘアスタイルはよく似合っていた。

数時間の語らいを通して、仕事に就き、太極拳の師と仰げる方との出会いの喜びも経験したという近況も知ることができた。

話は、次第に核心に近づいていった。中学時代の不登校・過食症の体験は初めて聞く話だったが、冷静に深い分析のもとにこぼれる内容に相づちを打つのも忘れた。私の瞳に彼女が映り、彼女の瞳に私が映っているように思われた。

私たちは、意識する、しないにかかわ

らず二十年前の出来ごとで結びついていた。
担任から外れ、しばらくして元担任の誼(よし)みから、彼女の母親から相談を受けた。学校での人間関係のいくつかの行き違いから、登校の不安が増し困っていた。
いたいけな十才に満たない子の感性に鋭くくい込む触手をどのように柔らかい手で外していくかを考えた。解決策は多くないにしても、寄り添い、後押しする息づかいは届くと信じていた。
御両親はじめ組織的な働きかけにより、少しずつ不安が解消されていった。第一の試練の場だったのだろう。そして、彼女自身、多くの学習を積んでいった。

現在の彼女を前にして、私は言った。
「カウンセラーみたいだね。カウンセラーになれるよ。」
「うん、よくそう言われる。」
と答えた。
「先生、皆とこういう話しますか？」
「ううん、こういう話は誰とでもできる話じゃないから…。」
再会は、ゆっくり静かにその機会を待っていたのだろうか。

先月、電話台の下の棚を片づけていたら、奥の方に押し込まれたファックスの送・受信用紙が出てきた。その中に彼女の母親とやり取りの文書もあった。劣化し消えかかった文字から忘れかけていた当時のことが甦った。

『これから、また別の悩みも出てくるかも知れませんが、それは再生へのプロセスと考え、いとおしさをもって対応してください。
変に落ち込まず、自分を責めず、頼りすぎず、ひとりで抱えこみすぎず、苦しくなったら、迷ったら、ご相談ください。』
これが、私が最後に彼女の母親に送信した言葉だった。
その言葉に、私は一点の曇りを見い出す。
けれども、『再会』は、そこに木もれ日を当ててくれた。過去の行為を自分で見つめよ、と。

色白のぽっちゃりした女の子は、太陽を背に、ほほえみながら駆けて行った。

随筆　佳作

夢見た二十一世紀を生きる

佐藤　健

元号が平成から令和に変わった。昭和から平成に変わった三〇年前、転勤で全国を回っていた私は函館にいた。その時、妻と結婚した縁で定年退職した現在、終の棲家と決めた函館で令和を迎えた。再就職で市内の造船所でお世話になっているが、あの時代と比べて街が少し色あせて見えるのは歳を取ったことだけが理由ではないように想う。

一九七〇年、私は小学校四年生だった。夏休みが終わった最初の登校日に担任の先生から大阪万博のお土産をいただいた。国や企業のパビリオンの写真が印刷されたB5判のカードだった。私のカードは、日本専売公社の『虹の塔』だった。一枚ずつ配りながら先生が言った言葉がずっと心に残った。

「君たちは、二十一世紀を生きるんだぞ」

しかし、山間の小さな町に生まれ、周囲の山々の稜線の内側だけが世界の全てだった私たちには、『虹の塔』を白黒テレビで視るのに似て、あまり実感のないものだった。

万博会場の様子は連日テレビ中継され、その中で『虹の塔』が写る度に自分のカードと見比べたものである。展示物には、アメリカのアポロ宇宙船が持ち帰った月の石があり連日長蛇の列ができた。私にはテレビ電話の印象が強かったが、当時の我が家には黒い固定電話さえ無かった時代であった。インターネットで検索してみると、その他にも今では普通にあるものが展示されて話題になったようだ。温水洗浄便座、動く歩道、電波時計などである。缶コーヒーの登場も万博が初めてらしい。また、リニアモーターカーや電気自動車の構想もすでにあった。中には人間洗濯機なるものもあったようだ。当時は便利さを求めた発想かも知れないが、現代においては介護用として実用性があるかも知れない。

話を本筋に戻すが、先生には四年生から六年生までの三年間を担任していただいた。先生が話したとおり、二十一世紀に向けて周囲の環境が大きく変わって行った時代だった。二階建ての木造校舎が鉄筋三階建てに建て替えられ、プールも造られた。バスやトラックが土埃を巻き上げながら走った通学路の砂利道が舗装され街灯も付き、信号機も設置された。めったに車など通らない交差点で歩行者用信号はなく、渡ろうとする方向の車用の信号が青になるのを見て横断した。川幅が広げられて立派な橋も架け

られた。それらの光景を見て初めて想像する未来の景色に鮮やかな色が付いたのだった。高校を卒業して就職で故郷を離れ、帰省する度に見る景色は大きな変化がないまま月日が過ぎた。

二十一世紀になって間もなく、役所から本籍地変更の通知が届いた。故郷の町を含めた六つの町や村が近くの市と合併したことによるものだった。市になったのだから住所も新しくなるかと思ったが、〇〇郡が〇〇市に変わっただけで、字（あざ）がそのまま残っていたのには少しだけがっかりさせられた。

この頃から再び故郷が変わり始めた。一つだけあった信号機はまだあるが、気付けば私が通った小学校は無くなっていた。近隣の小学校が統廃合されて別の場所に新しい小学校が建てられていた。廃校になった小学校に行ってみると校舎はそのまま残っており、正門近くの二宮金次郎の銅像も残っていた。卒業記念で作成した粘土板に自画像を彫って素焼きしたものを貼り付けた円柱状のモニュメントが校庭の隅にそのままあった。何枚かが剥げ落ちており、自分の顔はついに見つけることが出来なかった。

実家の前の景色にも休耕田が増えた。帰省する度に、どこどこの誰々さんが亡くなったと言うような話も増えた。そして、父親も何回かの脳梗塞の再発による九年間の寝たきり生活を経て令和を待たずに二月に八十五歳で旅立った。市になって大きく変わったものがある。実家の二階の窓から見下ろす川べりに白壁の土蔵を模した黒い瓦屋根の建築物が見える。下水処理場である。父親が脳梗塞の後遺症でうまく歩けなくなった頃で、トイレの水洗化、洋式化はとても助かり有難かったことを自宅介護の母親がよく話していた。

五〇年前、速さと便利さを求めて二十一世紀の未来を夢見た私たちの目に、今何が見えているだろう。新幹線が走り、みんなで携帯電話を持つ早くて便利な時代になった。しかし、これが夢見た世界だったろうか。社会に蔓延する疲弊感は否めない。今の子供たちは五〇年後の未来にどんな夢を見るのだろうか。

二十一世紀はまだまだ始まったばかりだ。人生一〇〇年の時代に六〇歳で諦めるわけには行かない。令和の時代は、人間が人や自然に、自然が人に優しい時代であって欲しい。

私は自分に出来る何かをしようと、朗読講座を受講して視覚障害者を支援するボランティア団体に加入した。市の広報誌や本の内容を音声に変換する活動である。それを『音訳』と言うことを初めて知ったのだった。

選評

対馬　俊明

今年の応募作は十八篇。昨年の応募数二十三篇より少し減っている。応募者のメンバーを見ると、かつての常連からの投稿が減って、新たに参加して、その後応募を続けている人の作品が増えるなど、新旧の交代も見られるようだ。随筆は、短い文章の中にいかに筆者の経験と思索を盛り込み、読者の感覚と感情に訴える「作品」世界を作り上げていくかが課題で、今回はその完成度が高いものを四編入選とし、それに次ぐ作品四編を佳作とした。選評については、入選・佳作作品についてだけ次に記す。

入選「葬儀」　佐藤　憲明

昭和二十八年四月、長屋の一軒に住む八人家族の内のひとり、祖母が亡くなって、その葬儀を自宅で行う。読経の間、縁側に寝せられていた肺病の母は大量の喀血をする。弔問に訪れた親族と父母、男五人の子供たちがどこでどうやって寝るか。当時の子だくさんの大家族での生活、食糧難と住宅事情。その中での家族愛を、これ以上ない簡潔な文章で描いた作品。寒さの中で寝せられた母の「私の葬式かと思った」の言葉が重い。

入選「みどり」　畠田　実里

小学生の時、はっかタバコの「みどり」を吸って気分を悪くし、教頭先生にビンタを喰らった話である。背景として、コンブ漁の期間、小学校一年くらいの子供も船のトモドリを勤めて、両手が離せない父に火のついたタバコを渡す役目をすることが描かれる。豊穣な海を仕事場とするコンブ漁が、過酷な一家総出の労働に支えられたものであることを描くキレのある文章に感動。

入選「Ｏｈ！相撲」　髙橋　剛治

定年退職で、東京から夫の郷里である函館に移住してきた夫婦が、函館アリーナで開催された大相撲函館場所を観覧する話である。夫は、小学校時代からの人気力士の盛衰を記憶の中にたどりながら、妻がにわかに大相撲ファンになったことに興味と関心を抱く。少なくともそこには、東京から函館に移住してきたことの妻の戸惑いや不満が内在しているのかもしれないのだが、夫は、妻の熱が醒めぬ限りは「つきあうつもりでいる」小説になりそうな、夫婦の心理劇を読むようでおもしろい。

入選「オガサワラ流」　山野　みちこ

畳の上に正座するから椅子に腰掛けるが主流になった日本人の生活文化が、意外にも「椅子に正座する」「胡坐をかく」などの亜流を生み、さらに自分の足に座りだこが出現したことから、「座りだこ遺伝子」の考察が始まり、生活様式の変化に柔軟に対応してきた日本人に行き当たるという、上等な家庭科の講義を聞くような気分で読んでしまった作品。

佳作「母の鼻歌」　伊藤　暁

新築した家の台所で鼻歌を歌っている母の姿。その映像が思い出として浮かんでくるという。樺太で終戦を迎え、侵攻してきたロシア兵に長男を殺される

という悲劇に出合いながら北海道に帰り着き、その後やっと家を新築して「主婦である自分一人の台所」に立った母の姿。それがいかに末っ子の私を安心させるものであったか。樺太からの引き揚げ家族の苦難とその再生を描いた心に響く作品である。

佳作「二人だけのワンマンショー」

野口　裕子

青森の老人ホームに入っている父の枕元で歌を歌って聞かせた話である。褒め上手の父の津軽弁がなんとも慈愛に満ちた人柄を伝えてくる。父の言葉が娘に自信を与え、歌仲間と一緒の老人ホームの慰問につながったという後日談もいい。

佳作「再会」

元木　いづみ

二十年ほど前に担任したAちゃんとの再会。過敏で不登校になりかねなかった少女が、二十八歳の女性となって現れ、仕事を持ち男性との出会いも報告した。それがいかに大変なことだったか。プライバシーに配慮してか、過去の人間関係のもつれや、それに対する少女の過敏な反応について、具体的な表現は避けていて、分かりにくいところもあるが、元小学校の担任として、成長した彼女に再会した喜びは十分に伝わってくる。

佳作「夢見た二十一世紀を生きる」

佐藤　健

一九七〇年小学校四年生の時、先生にかけられた「君たちは、二十一世紀を生きるんだぞ」の言葉を基に、高校卒業までの間に見てきた故郷の町の変化の姿を展望し、さらに二十一世紀に入って、早さと便利さを求めて走り続ける日本社会について、その「疲弊感」を挙げ、一人一人が「人や自然に優しい時代」の実現のための一歩を踏み出すことを勧めている。後半は、具体性に欠ける憾みがあり、時事評論的な面もあるが、日本社会の変動を体感的に捉えようとする視点を評価したい。

小説　入選

鎮魂歌

畠田　実里

「どうしても行くのなら、もう帰ってこなくていい！」
玄関の戸に手をかけた父に、母が怒鳴った。出稼ぎ先を決めてきたのは、一週間前だった。その日からのやり取りの末の言葉だった。それも出稼ぎ先より、安浦さんと一緒に行くのが不満のようだった。
なぜなのか。この集落で父の一番親しい人だと思っていたのに、不思議だった。行かせたくないという母の、強い意志を感じさせる。

父が帰って来るなり言った。
「出稼ぎに行くとこ、今年は稚内のカニ獲り船に乗ることに決めてきたから」
「だれと？」
「安浦と……」
「またあの人と？それなら、絶対反対だからね」
遊びに行こうと靴を履いたものの、動けなくなってしまった。
こうなると、母の怒りはおさまらない。こっそり奥の部屋に入って、成り行きに耳を澄ました。
ここ二、三年ニシン場も不漁で、帰ってくるのに旅費を、送ってやらなければならない年が続いている。それで今度は、カニ獲り漁船にのるという。
いつものように父は、炉端に座ってうつむいているのだろう。
「そんな大事なこと、どうしてひと言も相談なしに決めてくるのさ」
「そう言ったって、もう決めたんだから……」
父の低い声が障子を通して聞こえる。
「いま、すぐ行って断ってきて」
「そんなこと言ったって……。彼が船頭で、おれが機関士ということで、船主も了解したと言うんだから、今さら断るわけにいかない」
「あの人と組んでやったことで、うまくいったためし、一度だって無いべさ。そのたんびに借金こさえて、どれだけ苦労してきたか。あんたが行けないなら、わしが行って断ってくる」

声の勢いは、いまにも立ち上がって行きそうだ。
「おれが決めてきたことに、おまえ、そこまでやるのが。それじゃ、おれの立場はどうなる……」
父の声は小さい。なぜなのか？　父は遊びに行くわけではない。なのに、母に遠慮しているみたいだ。
声が途切れた。時々、ガツンガツンという音がする。炉縁をキセルで叩く音だ。
安浦さんのことで、知っていることと言ったら、わたしが五年生か六年生の頃だった。やっぱり安浦さんが船頭で、父が機関士で、それと安浦さんの友達三人と組んで、漁船をチャーターし、キンキン漁をしたことがあった。
その年は、あいにく時化続きで、漁に出られない日が多かったから、満足のいく漁もなく、借金だけが残った。個人名義で漁協から金を借りたから、借金の額は少なかったようだが、それでも返済に母が苦労してたことを覚えている。
母の言い方だと、安浦さんとの仕事は、何度もあったようだ。

「母さんに電話、急用だって！」
朝、ご飯を食べている時だった。近所の店のおばさんがとび込んできた。慌てて母が出て行った。
戻ってきたときの顔は、血の気がなかった。へなへなと上がりかけに膝をついた。

「死んだんだって、とう……」
突然だった。
父が出て行く時の、あの激しい言葉が甦ってきた。
「どうしても行くのなら、もう帰ってこなくていい！」
なんだか、その通りになってしまったような気がした。
「まだ、見つかっていないんだと……」
力なく呟いた。それから、這うようにして仏壇の前に進むと、ローソク明かりを灯している。
なにを、どうしていいのか。気持ちがうろうろするばかりだった。
「船が流されて、もしかしたらカムチャッカの方で助けられて、生きているかもしれない」
母はこう言って望みを繋いでいるけど、二月のオホーツクの海では、その可能性は皆無だろう。
ところが、数時間後に入ってきた二報目は、母の針の穴ほどの望みも、打ち砕いてしまった。
実は、船は漁に出ていたのではなかった。港の中に停泊していて、強風に煽られ、大時化の海に流されたというのだ。
なんということだ。普通では考えられない。港の中では、個々の漁船が岸壁に繋がれているのではない。隣の船からの貰い綱で、間接的に岸壁につながれている。だから、一番岸壁に近い船の綱が切れたら、それに連なる船は、みな流されてしまう。

五人の乗組員全員が亡くなった。大嵐がくるという予報で、その夜乗組員全員、船に泊まっていたそうだ。恐らく酒を飲んで酔いつぶれて、眠っていたのではないか、とも言われた。

そうでなければ、大時化でも港の中である、繋がれている綱を解くことも、切ることだって出来ただろう。機関士である父は、エンジンをかけて、港から出されるのを他の人と力を合わせ、阻止することだって出来たのではないか。それもできなかった。

母は仏壇の前に座っていることが多くなった。一週間もすると、目も窪んで周りは黒ずんできている。食べ物も喉を通らないようだった。

「なにか食べなかったら弱ってしまうから、座っててていいから、少しでもご飯食べて」

妹が泣きながら懇願した。

祖母が来ると、怒った。

「おまえが倒れたら、子たちはどうなるんだ。こんな時こそ、しっかりせい！」

父の遺体は、遭難から丁度一カ月目で見つかった。渚の砂から足が出ていたのを、海岸近くの人に発見されたと言う。漁に出ていなかったのが幸いだった。四十五歳。母は四十一歳だった。

父のことを、なにも知らなかったとわかったのは、死んでからだった。

無口な人だった。父の両親のこと、生い立ちや郷里のことなど、一度も聞いたことがなかった。親がない、子供時代がない人などいない。我が子に話したいことは、なかったのだろうか。

出稼ぎに出ていた頃、一年のうち半年は留守だった。戦後間もない頃で、どこの家も似たようなものだった。

年が明けると、暖房や煮炊きをする薪を切りに一週間ほど、雪山に通い続ける。薪は雪が解けてリヤカーが入れる山道まで、橇で運び終えてから、ニシン場に行った。草木の葉が出揃ってから、家まで運びストーブに入る長さに鋸で切り斧で割るのは、母や子供の仕事だった。

父はコンブ獲りが始まる、七月の初めころ帰ってくる。ニシンは春の漁だから、漁が終わると、また違うところで働いたらしい。

思い起こすと、あまりいい思い出はない。

まだ小学校に入る前のことだった。近所の子どもや大人たちが、集まってなにか言い合い笑っていた。父の言い方を真似ているのだった。幼心にも、父はこの土地で生まれ、ここで育ったのではないと直感した。

また、父にせがんで舟を作ってもらったことがあった。紐をつけて浜に引いて行ったらみんなに笑われた。

父の作り方は、一枚の板を削って、舟底を作り、そこに板を張り付ける。不格好なものだった。水に浮かべるとすき間から、すぐ水が入って傾いた。みんなに石をぶつけられ割れてしまった。

「そんなもの投げてしまえ」

囃された。捨てられず、壊れた舟を抱きかかえ、泣きながら帰って、物置に隠した。父には言えなかった。

それ以来、父に頼みごとはしなくなった。家に大工道具があったので、出稼ぎで留守の間、自由に使った。手を切ったり、足にノミを刺したりで、いつも生傷が絶えなかった。

小学校に入った。大半の子の苗字が「内海」なのにわたしは「吉井」だった。集落でたった一つしかない苗字だった。苗字が同じものの仲間意識は強かった。わたしも「内海」ならよかったと……。

母はおしゃべりな方ではなかった。悪口を言ったり、噂話をしたりするときつく叱られた。

コンブやイカ、畑仕事が暇になると、いつも隣の部屋で縫物をしていた。頼まれた和服の仕立もしていた。その仕事が多くなると、いつ寝ているのかと思うほどだった。

静かに針仕事をしていると突然、激しい言葉で父を罵り始める。なにか前置きというか、理由がわかればいいのだが、その成り行きが心配で、身動きができなくなってしまった。

父はそんな母に刃向かいもせず、炉端に座って、じっとうつむいているだけだった。母の怒る理由が、父にはわかっているような気がした。母は反応しないことで、かえって怒りが増すような気がした。

ある日、突然また始まった。父は相変わらずだ。

「もう出て行く！」

こう叫ぶと、大きな風呂敷を引き出しから取り出し、畳の上に広げるとタンスから衣類を出して包み始めた。

この時は、慌てたのか、

「早く行って、ばっちゃんば呼んで来い！」

と、叫んだ。わたしは、家を飛び出して、泣きながら浜に下り、渚を走った。泣いて道路を走ったら、よその人に気付かれてしまう。

ようやく祖父母の家に着くと、ありったけの声で叫ぶ。

「母さん、どっかに行ってしまう。父さん、ばっちゃん、呼んで来いって」

「まだ、やってるのが！」

祖母の手を引いて、早く早くとせかす。急がないと、どっかに行っちゃう……。

母の姿見てほっとする。

「子ども、なん人もいるいうのに、なにやってる！」

祖母は怒る。父はきまり悪そうに、炉端に座っている。

理由がわからない。謎のような出来事だ。こんなことが度々起きた。たまに、集落に旅回りの芝居や、巡回映画が来るこ

とがあった。
お盆と正月には、青年団の演芸会もあった。どれも夜だった。
観ていても落ち着かない。帰ったら母がいないのではないかと……。こう思ったら、じっとしていられない。
暗い夜道を走る。怖いがそんなことは、言ってられない。走り出すと、早く早くと焦った。玄関の戸を開ける。
「あれ、どうしたの?まだ終わる時間じゃないのに」
ほっとする。
「おら、眠くて眠くて我慢できなくて……」
こう言って誤魔化す。
ふだんは、父母とも穏やかなのに。何故なのか。不思議でならない。
父が出稼ぎで、家にいないときは安心だった。父が嫌いというのではなかった。
母が突然、激昂するのは小学校三、四年の頃まで続いたようだ。妹や弟もいたが、平気だったのだろうか。わたしが丁度感じやすい年頃だったのかも知れない。妹や弟達に聞くのは、怖かった。
「父親が病気で会いたがっている」
役場から連絡があった。わたしが小学校一年生だったような気がする。
父は慌てる様子はなかった。父と母のひそひそ話が続いた。
母は大きなお腹をしていた。出産日も近くて、長旅は無理ということだった。父は小学校六年生の姉・芳江を連れて行った。
数日で帰ってきた。なん十年ぶりに郷里に帰ったのに、病気の父親のこと、家のこと、郷里のことは、その時も聞いた覚えはない。
その晩、布団に入ってから姉は、見てきたことを話してくれた。
父さんの生まれたという家は、広い田んぼの中のこんもりした林の中にあった。大きな門を入ると、家まで細い砂利道が十五メートルくらいも続いて、両側には低い木が植えてあった。
茅葺の屋根の大きな構えの家で、玄関の入り口の上には、父さんの名前の「吉井勇一」と書いた表札がかかっていてびっくりした。隣に「中村竹一」という表札が並んでいた。
玄関を入ると正面の薄暗いずっと奥に、金色の大きな仏壇が光って見えた。
お爺さんは布団に横になっていた。だいぶ弱っているようだった。目は窪んでいて開いてないように見えた。頭は前から後ろまで禿げていて、耳のあたりから、後ろまで白髪が少し残っている。

父さんは枕元で、爺さんの耳に顔を近づけるようにして話していた。しばらくして、近所の同い年くらいの女の子が来て、隣の部屋で紙に絵を描いて遊んだ。一時間くらいして帰った。部屋に戻ると、父さんは爺さんの布団の上に広げた、何枚もの書類にハンコを押していた。きっと大事なものだと思った。

ひと晩だけ泊まった。帰りの汽車で、「中村竹一」って、だれなのと聞いたら、不機嫌な顔をして「寝てた人。父さんの父親。おまえの爺さんだ」と言った。苗字が違うと思ったけど、あの家でなにか嫌なことでもあったような気がした。

姉の話が途切れた。その後、独り言のように言った。

父さん、あんな立派な家に生まれたのに、どうして、ここで漁師なんかしてるのだろう……。

わたしは、姉の言うことがよくわからなかった。

父が出稼ぎから帰って来ると、一年中で一番忙しい時期であった。夜はイカつけ、昼はコンブ獲り。昼も夜も働き、その上イカを割き、干す。コンブ干しの作業が終わると、ご飯を食べて、寝た。

だから、話をする余裕はなかったといっていい。

母はわたしが小学校三年生の頃、詠歌を習いに近くの寺に行っていた。まだ四十歳になっていなかったと思う。

父が亡くなる前から、母は仏壇の前に座っていることがあった。まだ母側の祖父母もいたので不思議だった。

それから、しばらくすると、近所の婆さん達にご詠歌を教えるようになった。

「まだ年寄りでもないのに、ババ仲間に入ってしまって」

なんて、若い人達に笑われた。

家でご詠歌の集まりがあるたびに、「今晩、おら家でご詠歌やるど」と、伝え歩くのがわたしの役目だった。

集まりのある夜は、早々と布団に入った。婆さんたちのご詠歌と、歌に合わせて打つ鐘の音が子守歌だった。また、部屋で針仕事をしている時は、いつもなにか口ずさんでいた。ご詠歌だった。若いのだから、歌謡曲でも歌えばいいのに。

「山の木や畑だったところ。今のうちに、おまえに登記しておけ。親が死んでしまったら、ややこしくなるって聞いてるぞ」

母は肺がんで入院中、こんなことを何度も言った。死期を感じていたのだろうが、医者から「もっても三カ月」と言われていた時期だったので、それどころではなかった。

母はそれから六カ月後に亡くなった。八十歳だった。父が生きた倍近くの歳であった。

母の三回忌も終え、生前母が言っていた、土地の登記をしようと、司法・行政書士事務所にお願いした。

姉妹、弟達の了解で、難しいこともなく登記は完了した。
しばらくして、用済みになった戸籍謄本が法律事務所から送られてきた。それを見て驚いた。

父は石川県生まれで、両親は父が生まれた、ほぼ一年後に離婚している。父親は婿で、離婚した後は旧姓の「中村」という姓にもどっている。離婚後、母親は親元に住所を戻しているが、まだ幼い子を父親に残して、出ていかなくてはならない事情とは、いったい何だろう。

一歳の子は「両親の離婚によって、吉井勇一は吉井家の戸主とする」と謄本に記されている。『吉井勇一』とは、わたしの父である。そして、旧姓に戻った父親「中村竹一」と一緒に暮らしている。

父が小学校に入る頃、父親は再婚している。女には男の連れ子がいて、父より二歳年下だった。

父が死んだ時、遺影を探すため、家にあったアルバムを見たが、あるのは父の写真だけで、両親の写真は見当たらなかった。いま、父が生きていたとしても、一歳という年齢では、離婚の理由はもとより、母親の記憶がないだろう。

また、母親の所在がわかっていたら、父は母親を探したのではないか。でも、わたしが物心のついた頃からは、母親を探したという話は、聞いた覚えはない。

推測だが、父は生まれ育った郷里のことや、両親のことを話さなかったとしても無理がない。辛いことであるが、話さなかったというより、むしろ両親や故郷のことを思い出したくなかったのではないか。

まだ腑に落ちないことがある。それは、母と結婚しても、すぐに届を出していないことである。だから結婚した年月はわからないが、初めの子は昭和八年に郷里で生まれている。

結婚届は、昭和十三年に出ている。最初の子が生まれて後、約六年近くの間に三人の子が生まれ、どの子も父親のいない「母・山本ミツの子」として届けられているのだ。

四人とも女で、長女は郷里で生まれて間もなく死亡。次女は生存。三女は約一年後に死亡している。

驚いたことに、次女と三女の出生地は、「樺太」となっている。

住所は「樺太留多加郡能取村字〇〇大字〇〇番外地」となっている。

ここはどういう所なのだろうか。「番外地」とは、常識的には人が住んでいないようなところだろう。なぜ、そんなところまで行って……。しかもここで二人の子を産んでいる。

父母の口から、「樺太」など、全く聞いた覚えはない。また、旧樺太の地図を調べても、住所やその周辺の土地の名前すら、耳にしたことはないのである。戸籍によると、父母は昭和十三年に母の郷里に戻って、四女が生まれている。ここで初めて戸籍がつくられ、四女は父の子として届けている。また、

次女も父の子として認知されている。父母が亡くなっている今、なぜ樺太まで行って、しかも「番外地」で暮らさなくてはならなかったのか、謎が深まるばかりだ。

わたしは、昭和十五年生まれだが、それ以前に生まれた四人の子どものうち、三人は死んでいる。それも、生まれて一年以内と言っていいようなものである。

母は自分の子供時代のこと、両親や兄弟、妹のことはよく話してくれたが、父のこととなると、知っていたのか、知らないのか、母の口からも聞かされたこともない。

母の三回忌の後で叔父に話してみた。

「謄本を見たけど、謎みたいなことが多くてわかってることがあったら教えて」と。

後日、郷里の叔父を訪ねた。叔父は母のすぐ下の弟で、いまは母が亡くなった年と同じ八十歳になる。

「ああ、三回忌の時言ってたことか。いまさら聞いてどうする……」

困惑しているようだった。

しばらく、遠くを見るような目をしていたが、ゆっくりと、

「まぁ、そういう親がいて、おまえ達がいるんだから、知っておくのもいいか。なんかの時、姉妹や弟達に話してやればいい……」

こう言ってひと息してから、話し出した。

「いろいろなことがあり過ぎて……。なにから話したらいいか。そうだな」

こう前置きして話し始めた。

彼が親父に連れられてきたのは、確かコンブ獲りとイカつけの真っ盛りで、忙しい時だった。

上の隣村と繋がる海岸道路が開通して、山越えしなくても函館に行けるようになった頃だった。あの時は、ここから下の方（恵山方面）への道路工事の最中だった。

親父は漁具を買いに、函館に行ってたんだ。帰ってきた時、見たこともない若者を連れてきた。

「この人、家で手伝ってもらうことにしたから」

と言ったけど、突然のことでみんなびっくりした。

「身元もわからね人、突然連れてきても」

母は困惑していた。

「まぁ、おらの話聞いてからにして……。で朝飯食ってたら、部屋の隅っこで、宿の主人とこの人と、話してるのを聞いてしまったんだ。この若者、大きなりしてるのに、小さくなってペコペコ頭下げてるもんだから、気になって聞き耳立てた。どうやら宿代溜めてしまって、払えないらしい。それで主人は、働くどこ見つけてやると言っている。そこはトンネル工事で、前借りできるから、宿代はそれで払えばいいってな。現場はこの海岸を東に十里ほど行ったとこにあると言う。お

れはその時ピンときた。『タコ部屋』だって。これは、放っておけないって……」
　若者は、主人に返事を急かされて、困っている。
「選り好みしてる場合じゃないだろ。宿代払ってもらわないと困る。それが出来ないなら、警察に突き出すことになるけど、いいな」
　主人はだんだん威圧的になっている。若者は、頭を垂れたままだ。
「工事現場、決めてもいいな！」
　高飛車な言い方で、念押ししてる。若者は仕方なさそうに小さく頷いた。
「そしたら」
　主人は腰を上げた。若者は、ようやくご飯を口に入れた。一緒の宿屋に泊まったのも、何かの縁だと思って、宿の主人が食堂から出て行ってから、若者に話しかけた。
「悪いと思ったけど、今の話聞いた、と言うより、聞こえてしまった。工事現場、どんなところかわかって決めたのか。ここから、東の方の海岸で、道路工事やってると言ったら、おらの住んでるところしかない。そこは『タコ部屋』と言って、入ったら一生出られないとこだぞ、それでもいいのか」
　若者は箸の手を止めた。宿代を聞いたら、十日分だと言うし。たいした額ではない。
「よかったら、おらのところに来ないか。コンブ獲りやイカつけで、いまは忙しい盛りなんだ。手伝ってくれたら、ここの宿代を立て替えてやってもいい。飯と寝るとこ付きで、三カ月も手伝ってくれたら、どこに行こうと、あんたの自由だ。どうする？前借りしてからでは、どうにもならないぞ」
「よろしく頼みます」
　若者は囁くような声で言って、立ち上がって深々と頭を下げた。すぐ、宿の主人のところに二人で行って話した。
「こっちは、宿代さえ払ってくれれば、それでいい」
　さも不愉快だという顔をしたけど、宿代払ってやって、さっさと連れて来た。
　と、言うのである。
　宿の主人は彼を紹介して、斡旋料をたんまり受け取る積りだったんだべ。
　彼がここに来た頃は、世の中も不景気で、新聞にも、失業者が国中に溢れているという記事が出ていた。
　漁師は不景気でも、海に出れれば何とか食っていける。当時は主食はジャガイモだった。米は滅多に手に入らなかった。少し前までは、上（かみ）の方（函館方面）に行くには、山越えしなくては、米のとれる大野とか七飯にも行けなかった。それに、行くとしても物々交換だったから、魚の干物とか着物とか、背負って行かなくちゃなんねえから、ジャガイモや魚、海草食って腹を膨らますよりなかった。
　ここはトンネル工事で、飯場もあったけど、集落の人達は、

そこでは働かなかった。どこからか人が連れられてきた。聞くところによると囚人とか、借金で首が回らなくなった人か、朝鮮人や中国人だと言う人もいたけど、土工夫と話をしたことはないからわからない。

飯場は「タコ部屋」と言われて、集落の外れにあった。と言っても集落は小さいので、土工夫がどんな扱いをされてるか見て知っている。

「タコ」は一日十四時間から十六時間も働かされていたようだ。病気になって、力仕事ができなくなった人は、飯場の前に座って、わら縄でモッコを作っていた。死ねば、山に捨てたり、よくても穴を掘って埋めるだけだから、腹を空かした野良犬どもが、死人の腕や足を銜えて走り回り、夜通し吠えたり唸ったりして、取り合いをしていた。

もっとひどいのは「人柱」と言って、人間を生きたまま土砂やコンクリートに入れて、埋めてしまうと言った話さえあった。

生き埋めは大昔あったような、神の怒りを鎮めるのが、本当の意味らしいけど、ここでは工事をしても、大波で石垣や橋がたびたび壊れる所に「人柱」を入れると、頑丈になるという話を聞いたことがあった。

だから、厳しい労働や折檻に耐えられなくなって、脱走する者も出てくる。その度に大きな犬を、何匹も駆り出して捜索する。捕まれば手足を縛られ、棒で殴る蹴るの折檻が待っている。悲鳴が夜中じゅう聞こえることだってあった。

彼はここに来て、「タコ」の扱われ方を見聞きして、親父に連れられてきたことに、恩義を感じていたようだった。

農家の出で、初めてやる漁師の仕事なのに、よくやっていた。

親父は、ふた月もすると言った。

「もう十分働いてくれたから、いいところがあったら、いつでも出て行ってもいい」

でも、彼は出て行きそうな気配がない。あまりものを言わない人だったから、それが気になったことは確かだ。生まれも育ちも、今までどんな仕事をしてきたのか、まるでわからない人だった。それだけになにか、わけ有りのような気がしてた。

「所詮、よそ者だ。いつ、いなくなるかわからない」

おふくろは、きつい見方をしている。

それが、ここに来てから二年ほどたった頃だった。あの無口な彼が、親父に姉を嫁にもらいたいと言い出した。みんなびっくりした。

彼は、ひとりの男として見れば、よく働くし、頑丈そうな体をしているし、大人しい、いい男だと思うけど、どうもよくわからない。

親父は、

「あいつは、ここが気に入ってるようだし……」

と言ってるけど、おふくろはやっぱり反対だった。
ところが、親父がなにかの時、彼の気持ちを話したらしく、姉は「嫌だ」とは言わなかったと言う。
それで、親父とおふくろとおれの三人で彼に確かめたんだ。
「ここで漁師する決心があるなら、娘を嫁にやってもいい」
親父は、念押しをした。おふくろは反対なのか、しばらくものも言わなかった。

その後が大変だった。姉と一緒になっても、いつまでも結婚届を出してない。親父が訊いた。
「どうしたんだ。まだ届も出していないそうだな」
「しばらく待ってほしい」
彼は言うのだ。おかしなことだ。
「届も出せないのに、嫁にくれなんてとんでもない」
この時は、親父も怒ってしまった。おふくろは、そら見ろと言わんばかり。
「なに、考えてるんだ。この話はなかったことにする、取り消しだ！」
親父はかんかんだ。怒るのも当然だ。
あとで、親父とおふくろと話しているのを耳にした。
「もしかしてあの男、結婚してて、どこかに妻も子もいるのを、隠しているのではないか」
おふくろは怒った。
「おらも、そんな気がする。それしか考えられねべ」
ようやく、親父とおふくろの考えが一致した。
おれは、なんだか姉が気の毒になってきた。
だけど、彼に限って、そんなこと……。なんか、他人に言えないことがありそうな気がする。
また二、三日して親父は、彼を呼んだ。よくよく聞いてみた。
彼は覚悟を決めたらしく、話し出した。

彼は農家の一人っ子で、跡取り息子らしい。五歳のとき、父親が再婚することになった。それまで、母親だとばかり思って甘えていたのが、実は使用人だったと知らされて、びっくりした。
再婚した人には、彼より二歳年下の男の子どもがいた。義母になじめず反発して、いつも怒られていた。その分義弟に、意地悪したので、可愛くない憎らしい子と言われて育った。
つぎの年、小学校一年生に入学した。父親も義母も義弟も「中村」なのに、自分だけがどうして「吉井」なのか不思議だった。これも気にくわなくて、反発ばかりしていたせいか、父親まで冷たくなった。
自分は、この家の跡取りだからと言われていたので、子供ながら我慢していた。
でも、父親は見た目にもわかるほど、義弟を可愛がるよう

になっていくし、義母は気に障るようなことばかりするので、だんだん父親も信用できなくなった。

我慢できなくなって、とうとう十八歳の時家を飛び出した。

その後、京都の紡績会社で働いた。

そのうち、労働運動が起こって、彼の会社でも労働組合をつくろうと、会社に申し出ても、会社は労働組合の結成には、「ここは温情的な労働管理をしている」ことを理由に、同意しない。

ところが、世の中の不景気を理由に、会社が一方的に二割も賃金を減らしてきた。

そうしているうちに、同列の会社の大阪の工場でストライキが起きた。

それで、彼の会社の労働組合もストライキに立ち上がった。

会社では、ストライキを阻止するために暴力団まで雇ったり、郷里の親に連絡をとって、ストに参加することを止めさせようとした。なかには会社が頼んで、親の方から「チチ（ハハ）キトク……」などと、ニセの電報まで打たせ、慌てて郷里に帰った女工もいたという。

そんな画策をされても、ストライキは決行された。会社は女工の郷里に連絡して、父母まで呼んだ。女工達の中には、警察によってスト集会の中から、ごぼう抜きされ、馳せ参じた親に引き渡された女工もいたという。

その結果、組合の役員は、警察に連れて行かれたり、会社をクビにされたりした。

彼もストに参加したので、寮の周りも刑事や、暴力団らしい人が、うろつくようになった。彼が、直ぐに捕まらなかったのは、役員でも下っ端の方だったからだろう。近日中には、彼にも手が回ると言われていた。

警察や会社は、親元にも手を回しているらしいが、会社に入るときの親元の住所は、嘘を書いていた。たとえ郷里に逃げ帰ったとしても、家出をする時二、三カ月生活するだけの金を、くすねていたので、親が匿ってくれそうもない。思いあまって、北海道に逃げてきたというのだ。

こんな事情もあって、結婚届を出すと、所在が親にも、警察にも知れてしまう。そこで、届はしばらく待ってくれというのだ。

やっぱり、なにか事情があると思っていたら、そういうことかと納得した。親父は治安維持法という法律は、怖いということを知っていたから、届はしばらく待つことにした。

でも、親父の心配は、彼が労働運動の考え方に、かぶれていないかということだった。

しばらく様子を見ていたが、知らない人と連絡を取ってる様子もない。また、特別な考えを他人に言うようなこともないので、彼を信用したんだ。

そうしているうちに、子供ができた。そこでまた、困って

しまった。
子どもの出生届を、役場に出さなくてはならない。父親は彼である。届けるには戸籍を作らなくてはならない。彼の事情を知ってしまっては、それもできない。
そこで親父は、おふくろとおれを呼んで、相談したんだ。
いろいろ考えた挙句、子供は姉「山本ミツの子」として届けを出した。また、また。おふくろは怒り出した。
「だから、言ったこっちゃない。身元もはっきりしてない人と、一緒にさせるからこんなことになる」
そうは言っても、子供ができてしまってはどうにもならない。
それで、しばらく過ごしたものの、この狭い集落のことだ。「結婚届も出してないのに、子供ができた」と噂が立ち、たちまち集落中に広がった。
生まれた子は、一週間ほどで亡くなった。噂はいったん火がついてしまっては、消えそうもない。それで仕方なく、姉の体調が回復するのを待って、しばらく樺太の方に働きに行かせることにした。たしか、昭和八年のことだった。
「樺太」と言っても、住んだところは人も住んでいない所で、空いていたバラック建ての漁師小屋みたいなところだったそうだ。そこで魚を獲って暮らしたらしいが、詳しいことはわからない。
今になって思えば、人も住んでいないような辺鄙なところが、彼にとっては身を隠すには、絶好の場所だっただろうが、姉は考えられないような苦労をすることになった。
樺太で、次女が生まれ、その二年後に三女が生まれた。この子たちも姉の子供として届けた。三女は生まれて、一年もたたないうちに亡くなったという。
彼も姉も郷里に帰ったのは、昭和十三年の秋だった。ようやく戸籍を作り、次女も父の子として認知された。間もなく、四女が生まれた。この子は、勿論彼の子供として届けたが、生まれて一週間ほどで死んだ。
まだ警察が追いかけて来る、と心配してたようだが、来年は次女の久子が、小学校に入学することもあって、父なし子として、学校にやることを避けたいと考えたのだろう。
親父もおふくろも、彼もこれでやっと父親らしくなったと、安堵したようであった。

ところが、届を出して半年もたたないうちに、待ってたように、警察どころか、徴兵検査の通知が来てしまった。結婚届を出した時、こんなこともあるだろうと、覚悟してたのだろう。また、逃げ隠れするのに疲れていたのかも知れない。
ところが、幸か不幸か徴兵検査は、不合格になった。彼は病気でもなく、頑丈そうな体をしてるのにと、みんな不思議がったが、偏平足で行軍に適さない、というのが理由だった。
その時、近所の安浦さんも一緒に徴兵検査を受けた。あの

人はまだ結核が完治していないということで、不合格になった。
男が兵隊にも行けないとなったら、当時としては役立たずということになるし、家族も肩身の狭い思いをした。
安浦さんは土地の人だったが、病気と言うこともあって、それまで面識もなかったようだが、共に不合格だったことや、家も近くだったこともあって、急に親しくなっていった。
彼はここでは「よそ者」で、親しい友人もなかったから、安浦さんが彼の初めての友人だったと思う。
それから、いろいろ仕事を一緒にやってみたけど、いつも失敗して借金だけが残って、姉は苦労していた。
だから姉は、彼が安浦さんと何かしようとすると、いつも機嫌が悪かったのを覚えている。
死んだ時だって、彼が安浦さんと一緒に稚内に行くのを、姉が随分反対していたようだ。
「どうしても行くのなら、もう帰ってこなくていい！」
父が出て行くとき、母の言い放った言葉である。
飛沫も凍って、漁船が転覆するとまで言われた厳寒の海で、これから働くという父に対する、最後の言葉としては、なんと心ないものになってしまった。
なぜ、あんな言葉を。
あれ以来、ずっと心に引っかかってきた。母にしてみれば、父が出稼ぎに発った日からも、死んでからも、悔やまれる日々だったはずだ。
しかし、いまはこの冷淡な言葉が、わたしが父母の人となりに、近づく道案内をしてくれたような気がしている。
稚内行きを、母が強引に断りに行ってたら、父は死ななくてすんだかも知れない。こんな思いもまた浮かんでくる。行ったら、死ぬことを予感していたようにも思われる。
樺太まで行って、二人の子を産み、そして一人を死なせている。それも、生まれた子は四人のうち三人は、母の子として届を出している。
結局、わたしが生まれる前の子は四人。そのうち三人が死んでいるのである。恐らく、十分な治療も受けられずに死んだのであろう。
親や警察からも、行方を晦ませなくてはならないのなら、結婚しなければよかったのだ。結婚によって、母もまた辛い人生を送らねばならなかった。父は、あまりにも身勝手な生き方をしたとも言える。しかし、そんな父を支えたのも、母だったのではないか。
父は、それがよくわかっていたからこそ、激昂する母の言葉にも、じっとしていたのではないか。
父の生き方を否定すれば、わたしや姉妹、弟達の存在の拠り所まで消えてしまう。思いは複雑である。
ここまで来て、ようやく父母のことがわかりかけてきた。

母は若い頃からご詠歌を覚え、それを口ずさんでいたのは、死んでいった幼かった子供達や、父への鎮魂歌だったのだろう。

「どうしても行くのなら、もう帰ってこなくていい！」

このきつい言葉は、子守歌代わりに聞いたご詠歌とひとつになって、わたしの心を和らげている。

終わり

小説　入選

雛人形たちの記憶

日高　光

可愛いね。

冴子が赤ちゃんを抱っこしてあやしている。生まれて四カ月。冬の寒さで大風邪にかかり、高熱を出して入院までした悦子だったが、もうすっかり元気になって屈託なく笑っている。笑顔がなにより可愛い愛想のよい女の子だ。

冴子にとって悦子は待望の赤ちゃんだ。結婚して五年、なかなか出来なくて周囲をやきもきさせていた。子供が出来ないと周りがうるさい。まだ出来んのかと、舅や姑が要らないプレッシャーをかけてくる。麻呂はその現場を何回も目撃していた。

明らかに冴子は困惑していた。一生懸命努力しているのだ。でも出来ないのはしょうがない。これは天からの授かりもので、簡単にぽろっと生まれる人もいるし、なかなか出来ない人もいるのだ。

「冴子さん、あのね、満月の夜にするとできるらしいわよ。いい？来月十五日だから。ちゃんと覚えておきなさいよ。電話してあげるわ、その晩」

どんだけプライバシーの侵害なんだ。我が平安時代だってそんなこと許しませんえ。何考えてんだか。

麻呂は呆れて物が言えんかった。隣の姫も眉をしかめ、綺麗な顔が歪んでいるのを冴子の姑清美は気がつかない。人間中年ばばあになると面の皮が何寸にもなるようだ。だいたい赤ちゃんが出来ていないのに、雛人形の段飾りを飾ること自体、物凄いパワハラじゃないのか。

三十歳で結婚、出来たのは三十五歳だ。最初は二人でいろんなところに遊び回って新婚生活を謳歌していたのだが、二年も経つとあれ、出来ないなという疑問符が付いてきた。何でだろ、普通に新婚しているのに。三年目からは焦り出したのだ。頑張っても出来ない。やばい、どっちかが悪いのだろうかと病院まで行って検査までしたが異常はなかった。やはり運を天に任せるしかない。二人はそんな気持ちで毎日を暮らしていた。

ここに、今、赤ちゃんがいる。本当にほっとしている表情だ。流産することもなく、無事出産。夜泣きばっかりする手強い赤ん坊だったが、なんとかここまで育ててきた。冴子の夫、恭平は、高校の教師。別に強くもなんともないのだが、

野球部の監督をしているので、練習時間はやたら長いし、土日も練習があるし、まったくあてにならない夫だった。
悦子がわんわん夜泣きすると、明日仕事だからと布団を引きずって違うところに脱出しようとする。狭いアパートなので行くところもないのだが、悦子の泣き声の音量が少しでも小さくなるところ、台所でも洗面所でもいいから逃げていくのだった。そういう状態だから子育てはほとんど一人でやっているようなものだった。当然疲れが目に見えて現れてくる。
「ご飯は？・・・」
「温めて、勝手に食べて。私もほとんど寝てないんだから」
機嫌の悪い妻冴子と夫恭平の会話はぎすぎすしたものになっていった。
麻呂は見ていた。
このうちでは二月に入るとこの雛人形セットを飾るのだが、三月三日までのほぼ一か月間、夫恭平は一度も簡単な家事さえ手伝っていなかった。
おいおい、平安貴族並やなあ。
そうねえ、あれじゃ冴子さんも可哀そう。普段なにもしない姫も偉そうに文句を言い出す。すると下に座る三人官女がぺちゃくちゃお喋りし出す。
「だいたいあの旦那、部活部活って弱いくせに一丁前なのよね」
「そうそう。あれじゃ、奥さん浮気しそうね。私だったら、切れて不倫に走っちゃうわね」
「もう走ってるじゃない。みんな知ってるのよ」
「・・・。まじ。お内裏様がちょっと話があるって言うから、付いていっただけなんだから。私は特に好きとかなんとか思ったことないから」
「だからあんたは尻軽だって言われるんだわ。まったく旦那がいるくせに。そういうのをダブル不倫って現代では言うのよね」
「あんたはブスだから関係ないかもしれないけど、私は綺麗だから声掛かっちゃうの！」
「ふざけんなよ！」
おいおい、人間様がよそ見している隙に乱闘しそうな気配だ。
思わず下の段の五人囃子が、笛太鼓で音楽を奏でて場を癒そうとする。人間様には決して聞こえないメロディだが、雛人形たちには快い音曲だ。
「これこれ」
その下の段の左大臣が顔をしかめ、女官を戒めようとするが、右大臣は良いじゃないかと逆に諌める。右大臣は白い顎鬚をたくわえた老人で、いかにも人生のベテランだ。
「道真殿、はしたない女どもは注意していただかないと」
「まあまあ。いいではないですか。あれで女どもがぺちゃくちゃしてないと宮中はつまらぬ、つまらぬ。のう、お内裏様」

左大臣藤原時平は、天下の藤原氏の嫡流。若いがトップの貴族で、やけに気性が荒い。右大臣菅原道真はベテランだがただの学者の出なので位は左大臣の下だ。この二人はつねに衝突し、そのライバル関係はすさまじいものがあった。

冴子が近づいてくると、みんなまた、必死に固まった。向って左の女官は紫式部。頬がいかにも平安美人のように膨らんでいるが、実はこっそりとあられに手を付けていた。その状態で必死にこらえる。真ん中の女官は清少納言。旦那が居るのに宮中に入り、持ち前の美貌で男のあいだを蝶のように飛び回る。私は綺麗だから声が掛かると臆面もなく言葉にした図々しい女だ。が、頭の回転は抜群だ。その清少納言がすましている。

春はあけぼの。ようよう白くなりゆく山際すこしあかりて、紫立ちたる雲の細くたなびきたる。

紫式部があんた何言うてん。ぺらぺら喋ってばっかりいうてと、心の底から嫌ってる。

この女はひたすら地味にこっそりと夜小説らしきものを書いてストレスを解消している。女は漢字を使うべからずと思っていて、人前では一の字さえも遠慮して書かない。

その地味な紫式部をせせら笑う和泉式部が清少納言の左に位置し、口をしっかりと閉じていた。彼女が一番不良と言えば言えるのだ。結婚したが破綻してここに座っている。そして夜な夜な浮名を流し、男たちの間ではその白い肌を知らない者はいないとも言われている。

冴子が抱っこする悦子は本当に屈託なく、そんな雛人形界の複雑な事情など知らないでけらけら笑っている。思わず人形たちもほっこりして表情が変わりそうになるのを堪えている。

翌年、悦子は成長していた。一歳と四カ月の子供は本当に無垢でやんちゃで、人形たちにとっては恐ろしい存在だ。段飾りの下段の方の人形はいつも蹴散らされていた。

「お内裏様。悦ちゃん凶暴ね。女の子とはとても思えないわ」

姫が呆れる。最上段だから蹴散らされる気はしないが、雛壇そのものを壊されて全員落下の憂き目にあう可能性も無いわけではないのだ。

「でも冴子さん、幸せそう。可愛い盛りだもんね。私も欲しいな、赤ちゃん。ねえ、お内裏様」

ごほん。ごほん。

咳払いで誤魔化すお内裏様。下の官女たちがやいや、やいやと冷やかす。

「お内裏様。また誘ってくださいまし。いつでもお相手いたしますよ」

官女の真ん中に位置する既婚者の清少納言は、図々しくも上に首を回して色目を使う。それを見て横の紫式部は呆れかえった顔で眉間にしわを寄せる。

慌てて五人囃子が音楽を奏で始めた。彼らはこの演奏のために毎日稽古に稽古を重ねているのだが、なにしろ給料は安い。果たしてこの仕事で家族を養えることが出来るのか、音に微妙にその心配が顔を覗かせている。

おいおい、音外すなよ。リーダーの太鼓もちが眉をひそめている。真剣にやれと怒っている。

その下の左大臣と右大臣の抗争は去年より余計激化していた。二人はいわば政治を司る立場だが、ことごとく対立している。

「税を上げようと思います。儀式に使うお金が全然足りない」

「時平殿、私は反対じゃ。だからあなたは庶民のことを全然解っておらないと言われるんじゃ。今人民は飢えちょる。この期におよんで税を上げたら、反乱が起きまするぞ」

「反乱が起きたら鎮圧すればいい。そのために仕丁が控えておるではないのか」

すると仕丁の三人はそっぽを向いてしまい、お盆に靴をもっていた『怒り上戸』は言う。

「この給料じゃ、命を賭けられないすよ、どっこい」

傘をもっていた『笑い上戸』が後を継ぐ。

「あはは。ほんまや、ほんま。やってられへん。わてすぐ逃げるわ」

熊手を持っていた『泣き上戸』も続く。

「早く国にかえりたい。母ちゃんに会いてえなあ」

もう、泣きそうだ。

その様子は最上段にはまったく伝わらない。上には雲がかかっているようで、下々の苦しみはまったくお内裏様とお姫様には知られていないのだった。

悦子が攻めてきた。

まるでゴジラの来襲だ。雛人形たちの欠点は、逃げることができないことだ。やられっぱなししかない。悦子は仕丁の泣き上戸を咥えて四つん這いで吠えまくる。まるで男の子だ。

「これこれ、悦ちゃん、お人形を戻しなさい」

冴子が怒るが、あまり効き目がない。何しろ一人娘だけに何をしても可愛いのだった。その年の三月は毎日が吹雪く遅い春の年だった。

悦子は五歳になっていた。そして部屋の風景も変わっていた。この一家は一戸建ての家を購入したのだ。ちょっと郊外で土地が安いところ、家はそれほど大きくはないが、アパートよりはずっと空間がある。雛人形たちは驚いた。あれあれ、こんな立派な家に移ったんだ。

金あんのかいな？やるんでしょ、旦那さん。

驚きの雛祭り月間が始まった。新品の木の匂いがする。どこを見てもピカピカだ。もっとも彼らは動くことは出来ないので、首を巡らせる範囲においてだが。

悦子怪獣が暴れている。相変わらずやんちゃなようだ。

「悦ちゃん、早くご飯食べなさい」
冴子がまた手を焼いているようだ。悦子は五歳で、幼稚園の年長さんになっている。相変わらずご飯はちゃんと食べないし、片付けはしないし、言うことを聞かない子だ。
「この子はしつけがなってないわね」
お姫さまがつっけんどんに言う。
「ふん。石女が。お前、産んでからそういう偉そうな事言うてみ」
お姫様の眼から滂沱と涙があふれてきた。痛いところを突かれたからだ。この女性は子供ができない。
「お内裏様。泣ーかした。泣かした。ほんとにだからデリカシーが無いって言われるんですよ。平安時代の男は」
和泉式部が騒ぐ。紫式部は相変わらず無口だし、清少納言はちゃらちゃら落ち着かない。下の段の音楽隊の男にも声を掛けて、明日お暇と聞く始末。
「道真殿。遣唐使で中国に行かれい。あなたのお力が必要じゃ」
「いや、行くなら、左大臣のソナタの方ではないか」
「いやいや、あなたほどの学識のある方こそ遣唐大使にふさわしい」
このせめぎ合いは見苦しい。遣唐使で唐に渡れと言われたが、この時代、誰も行きたくないのだった。何しろ五百人も四隻の遣唐使船に分乗して出発するが、大体半分は帰って来ない。いわば自殺の旅になっていた。遣唐使になって箔をつけては帰ってくるという希望は無いわけではないが、やはり命の方が大事である。時平は道真が邪魔でなんとか遠くに追いやりたかった。
「私は寒家の出。とてもとても大使は務まりません。私などが行っては大中国皇帝陛下に失礼だと思われます」
「いやいやソナタは百年にひとりの大秀才と謳われた御仁。何をおっしゃる。私はソナタを心から大使として推薦いたしまする」
視線は宙で激しくぶつかり合っていた。できればここで格闘して相手を潰してしまいたいのだが、お互い人形でそうはいかない。しかしその言葉の中に激しい憎悪を覗かせていた。
その上に鎮座するかしましい女官三人は沈黙していた。なにしろ清少納言の親分である藤原道隆が急逝したのだ。関白として権力を誇っていたのだが、太陽は突然地平線の下に潜ってしまった。その子伊周は叔父道長との権力争いに敗れ、中宮定子も一条天皇の寵愛から外れてしまっていた。勢い、沈黙せざるを得ない。
真ん中で指揮者のように全方位に話しかけていた清少納言が静かになると、この集団も火が消えたようになっていた。楽団さえも仕事がない。喧嘩の声を消し去るために優雅に奏でていたのだが、その喧嘩がない。まったく肩透かしの状態に陥っていた。仕丁もまったく暇そうだ。
悦子だけが元気がいい。この子は誰かに貰ったスヌーピー

を抱っこしながら走り回っている。ママ、ママと母親のお尻を追いかけながら。

あれから一〇年経っていた。

雛人形一座が飾られて気の付いたことは、あの新しい家の景色はもう見えなかったと言うことだった。

引っ越ししたんだ。

狭いアパートだった。そしてここの主の恭平が見当たらない。どこに行ったのか、思わず声を出して冴子に聞きたかったが、見当たらない。何日たっても恭平の姿を見ることは出来なかった。そして悦子。キンキンに金色の髪にして悦子は吠えていた。冴子と激しいバトル。

「ばばあ、金くれ」

「出てけ。早くどっか行っちまえ」

およそ親子の間の会話とは思えないほどの酷い内容だ。高校一年生になるはずの悦子は、どうも学校に行っていないようだ。いつも昼まで寝ていて、午後からぶらっとどこかに行き、そして夜帰ってくる。いかにも荒んだ生活が垣間見える。そして母冴子は疲れ果て、綺麗な顔がやつれて夜叉のようになっていた。

何回か取っ組み合いも見た。女同士の激しい戦い。髪を掴み合い、罵り合い、蹴とばし合う。母と娘が骨肉の争いをしている。それを見せつけられた一座は、呆れて物が言えない。いや、最初から人形は喋らないのだが。

「お内裏様。ほんと悲しいですね」

「ああ。人間ってどうしてこうなのかねえ」

「まあ、こっちも人のこと決して言えないですけどね」

よく見ると三人官女の真ん中には清少納言の姿はなかったし、右大臣菅原道真の姿も消えていた。激しい男女の権力争いが、あったようだ。

悦子は母冴子を殴り倒して外に出て行った。

しばらくして起き上がった冴子の眼は赤くはれ、唇からは血が流れていた。冴子が雛人形を見て言った。

「ごめんね、醜態見せて。うちは一年の間にこんなになっちゃったんだよ。私が悪かったんだ。旦那があんまり構ってくれないから、つい魔が差しちゃった。恥ずかしいけど離婚されちゃった。ここに引っ越してきたけど、お金はないし悦子も荒れだしてこんなもんよ。もうほんと生きてる甲斐もないし」

冴子は立ち上がって食器棚の引き出しを開けて、あるものを取り出した。それは注射器だった。注射器に水を入れ、白い粉を注ぎ、それを足の指の血管に刺した。

顔つきが変わっていく。安堵の表情だ。すべてを忘れたように、天国の蓮の池でゆったりと空を眺めているように。それが終わると彼女に気が入った。

タバコを取り出してライターで火を点けた。ふーっと大き

く吐き出す。そしてそのライターの火をもう一度点けると、雛人形の七段飾りの緋毛氈の下に付けた。火がその布に移る。
おいおい。
まさか、何すんの。
雛人形たちが声を上げる。人間には決して聞こえることのない声で必死に騒ぎ出す。
ぎゃー、火がついてるよ。
助けてくれー。
冴子は雛人形たちが必死になっていることは気がつかず、その大きくなっていく火をただ見つめていた。薄ら笑いを浮かべながら。

そのアパートが焼け、五〇代の女性の焼死体が発見された時、同居していた娘悦子は男の部屋にいた。そして警察に踏み込まれた。
『母親を殺した殺人罪で逮捕する』
すべてを虚しく感じた悦子はやがて刑務所に服役していった。そしてそこには、何の抗弁もなかった。

了

小説　入選

煌（きら）めきの『Zボーイズ』

髙橋　剛治

☆☆☆　（パソコンの起動～文書の入力）

1　●1977−5

「サモラ、KO負けかぁ」

大事に抱えて来た本日発売のボクシング雑誌を開くと、僕は呻くように嘆息した。

その日、授業が終わると通学自転車に飛乗り、脇目もふらず、自宅近くの書店を目指した。北国の五月は爽やかな風の中にあり、涼やかな気候だったが、全力でペダルを漕ぐ額には汗が浮んでいる。店内に駆込み目的の月刊誌を購入すると、僕は立ち漕ぎで、自転車を自宅に急行させた。

自分の部屋に駆込み、ラジオのスイッチを入れ、誌面を開く。そこにはパンチを応酬する二人のボクサーの、モノクロの写真が掲載されていて、ページの見出しには、

『バンタム級王者対決　無情のKO劇

Zボーイズ　サモラ対サラテ』

と、あり、続くその下に試合の記事が掲載されていた。それは熱烈なボクシングファンであった僕が、函館の高校三年生だった時で、記事はほぼ一ヶ月前の一九七七年四月二三日、アメリカ合衆国ロサンゼルスフォーラムの会場において、二人の世界王者が雌雄を決した事を伝える内容だった。

この頃、世界のプロ・ボクシング界は統括する王座に絡む利権から、WBAとWBCの二団体に分裂し、本来一階級に一人であるべき世界王者を、多くの階級で並立させていた。そして団体の縛りが、王座にある両者の対戦を困難にしていた。統一戦の希望は黙殺され、ファンは両者の強弱を対戦相手や実績から比較する他なかった。

が、両陣営の思惑が噛合い、仲介する強力なプロモーターが現れた時、稀にこれが実現した。この時戦った二人は共にメキシコ人で、共に負けなしで世界に駆け上がってきた若者だった。一人はミュンヘン五輪の銀メダリストで二二歳のアルフォンソ・サモラ、二八戦全KO勝と言う完全な戦績だが、対する二五歳のカルロス・サラテの戦績も四七戦全勝四六KOと言う、恐るべき数字だった。頭文字のサがスペイン語でZを使う事から、彼らは『Zボーイズ』の愛称で呼ばれ、ここ三年程の世界のボクシングシーンで躍

動し、人気を集めていた。
けれど世界が注目する戦いではあったのだが、日本では関係者やファン以外の認知度は低かった。日本選手が絡む試合でない為テレビ放映が無く、関心が高まらなかった。その頃五十前の父も古くからの拳闘ファンで、ボクシングのバンタム級が五十四キロ位の階級である事も知っており、テレビ放映される試合の大体は見ていたが、
「バンタム級の無敗の世界チャンピオン同士で、メキシコのサモラとサラテが戦う」
そう僕が話題を振っても、関心は薄く、
「メキシコのバンタム級にはなぁ、昔、ジョー・メデルって、凄いのがいた」
と、返した。父は僕がまだボクシングに関心の薄かった幼い頃から、かつて日本で行われた関光徳やファイティング原田との試合における、メデルの凄さを繰り返し熱く語って来た。父は『ロープ際の魔術師』と呼ばれた名選手メデルのファンだった。
「父さん、分かった。メデルの話は、何回も聞いたし、良く知っている」
ハードなボクシングマニアになっていた僕は、メデルの事は周知していた。その必殺カウンターにより、有望な日本人選手を倒した試合の内容も、何回も聞かされ、又雑誌でも読んでいるので、拳闘昔話に脱線してゆきそうな父の話を遮った。
父が拳闘に熱中していた一九六〇年代前半、テレビボクシング全盛の頃は定期放送で一週間に三、四日は放映され、日本ランカーや有望新人同士の試合でも高い視聴率を上げていた、と言う。更にその十年位前の一九五二年に行われた日本初の世界戦、フライ級のダド・マリノ対白井義男の試合は後楽園球場に四万超もの観客を集め、テレビ視聴率は『九十六％！』だったのだ。
父はボクシングを拳闘としか呼ばなかったが、それは競技呼称の違いではなく、何か本質的な違いの様な事を感じさせた。僕の熱中していたその頃も、それなりに人気は有り、日本人の絡む世界戦はテレビ放映され、具志堅用高や輪島功一等、人気の世界王者がいた。又モハメド・アリの活躍していたヘビー級は日本人がいなくてもテレビ放映があり、一般的注目も高かった。ただ定期番組は既に無く、昔には信じられない程の空前のブームがあったと言えた。
それにしても、と僕は思った。『Zボーイズ』の日本でのテレビ放映が無い為、結果を知る方法が田舎の高校生である自分には無いのだ。翌日のスポーツ新聞に結果位は掲載されたのかもしれなかったが、自宅では一般紙しか購読がなく、スポーツ新聞の存在を僕は知らなかった。結局結果を知る為には、愛読しているボクシング雑誌に掲載されるのを待つしかなく、それが試合の一ヶ月後、五月末発売の

六月号だった。
記事によれば、試合は4ラウンドにサラテがサモラを二度倒し、サモラのセコンドからのタオル投入で決着した。1ラウンドではサモラの左フックで、サラテの膝が揺れる場面もあったが、2ラウンド目からはサラテが攻勢に出て、3ラウンドにはダウンを奪い優勢に進めて行った、とあった。試合戦評では、ディフェンス力とパンチの正確さの優劣、と書かれていた。
後にこの試合のビデオを見る機会があり、身長、リーチの差が明暗を分けた、と僕は思った。サラテの方が五センチ背が高い。
ただその時は、KO負けの結果を知った僕は、虚脱したようにベッドに倒れこんでいた。僕はサモラを応援していたのだ。
「サモラ駄目かぁ、サラテ、最強かなぁ」
僕はそう呟き、次にはもうサラテとエデル・ジョフレのどちらが史上最強なのか、と考え始めていた。ジョフレは父がファンだったあのメデルが、唯一勝てなかったブラジル人で、一九六〇年代の統一バンタム級の絶対王者だった。八度のKO防衛を誇り、キャリアの後期、ファイティング原田に僅差の判定で敗れ王座を失い、再戦も敗れたが、生涯の敗戦はその二つだけで、後に一階級上のフェザー級王座も獲得した。全盛期を比較する評論家ランキングでは、歴代バンタム級王者最強に挙げる者が多く、『黄金のバンタム』と尊称されていた。
そのまま寝てしまったらしく、点けたままのラジオから歌が流れていた。ピンクレディの新曲『渚のシンドバッド』で、あぁ夏か、と思うが、函館の夏はまだ先で、晩春のタベ、溢れる思いが、僕の心の中で煌めいていた。★★★
（シャットダウン）

2　〇2018-12

目覚めると、家は薄い雪で覆われていた。久しぶりの故郷の冬は、ここが北国なのだと実感させた。妻の蒼衣（あおい）は起きている様だが、
「函館は、寒い、寒い」
と、しきりにボヤキ、布団から出ない。同じ様に喜一（きいち）も、世間は師走で忙しいのだろうなぁ等と思いながら、やはり布団から出られない。それでも小用が堪えきれず、起き出してトイレに行き、居間の暖房を点けた。古い実家のリフォーム時に暖房器も新しくしたのだが、既存の仕組みを活用した為に着火予約機能を備えられず、毎朝手動でボタンを押さねばならなかった。同時にテレビを点けると朝ドラのオープニング曲であるドリ・カムの『あなたとトゥラッタッタ』が流れて来た。
暖房が作動し、朝ドラが終わって部屋が少し暖かくなった

頃、
「シャ、シャ、シャア、シャア、勝った」
と、蒼衣が変な奇声を発しながら起きて来た。朝の点火の六割は蒼衣がやっていたが、今朝は我慢勝ちだと言いたいらしい。
「さて、今日は何して遊ぶ。雪合戦か」
積もる雪を窓から確認して喜一が言うと、蒼衣がまた同じ奇声を発した。これは拒絶の表現らしい。そして、寒いから、家におるじゃ、と続ける。半年前に定年退職で東京から故郷の函館に戻った。無職の喜一と蒼衣の一日は散歩と時々カラオケボックスが共通の日課になっていたが、カラオケ飽きたと言う蒼衣は、冬になってからは寒い外歩きが嫌なのもあって、家でテレビを見ている事が多かった。その為か函館へ転居してからの蒼衣の体重は十キロも増え、脂肪を蓄えた冬眠前の熊かアザラシのように、体が丸くなっていた。
四十年振りに戻った函館での半年は、地震による道内全域の電力ブラックアウトを経験し、家のリフォームと喜一の腱鞘炎による右手の手術等、多少の事件はあったが、平成三十年後半の日々はほぼ平凡に流れていた。
大きく違ったのは仕事が無い事での人との交流が減った事かな、と喜一は思った。端的に言うと週末の呑み会が無い。毎週二度程あった付合いや接待がないので、夜の街へ飲みに出る事が無くなった。函館にも親戚や友人はいるのだが、此方が収入の無い身なのを気遣ってくれているのか、あるいは皆、仕事をしていて単純に忙しいのか、年齢的に外で飲むのを好まなくなったのか、此方から誘えば付合ってもくれるが、どうも此方は此方で仕事をしている忙しそうな相手に遠慮が出てしまう。又外へ出歩く事の嫌いな蒼衣を、知らない土地に連れて来て、生活費を得る仕事でなら仕方がないが、家に一人残して飲み歩く事には気が咎める感じが喜一にはあった。白状してしまうと結婚してからの日々で如何に仕事を口実に飲み歩いていたのか、との思いが強いのだった。そんなこんなで夜の外出は激減し、たまに飲みに行きたいかなぁ、と心が疼くが、『慎ましく暮らす老後生活』にはこの方が合致しているのだと喜一は思った。
因みに日々の家事分担については蒼衣と合議、喜一は食事作りを請け負う事になった。掃除、洗濯と洗い物は蒼衣がやる。それらは雑過ぎる喜一には任せられない、と部屋は丸く掃くのだが洗い物には変に潔癖な蒼衣が、そう主張するので、必然的に調理担当が割当てられたのだ。食材の買物は食事作りに関連するので喜一の役目だが、スーパーへは大体は二人で行く。車は処分していたので、買物は歩きだったが、蒼衣の引きこもり気味な生活が発散するように、更に運動不足の解消の為、散歩を兼ねて連れ出すようにしていた。
「私は、ワンコじゃないわい」
と言いながらも、蒼衣は渋々ついてきた。

「さあ、朝御飯作ろうかな。何が食べたい」
喜一が聞くが、何でも良いといつものように蒼衣は答える。元々食に関心が薄く、本当は作る事も嫌いなのだが、それでも結婚してから二十五年余りは専業主婦で、料理も担当してきた。やはり食に関心の薄い喜一が思い返すに、献立はカレーとシチュー、麻婆豆腐のローテーションだったような気がする。
「う～ん、張合いのない。リクエストない」
そう喜一が言うが、ゴミ分別をしながら、
「あまり凝ったものは要りませんからね」
と蒼衣が答える。喜一的には冷蔵庫にある食材を適当に調理するだけで、そんな気はないのだが、時々パソコンで検索した料理を妙にアレンジして変な物を作っている。料理は特に好きでも興味があるのでもなかったが、遣りだすと苦には感じなかった。調理上で喜一に少し問題なのは右手指の不調だけで、
「手がさぁ、相変らず渋いンだよね」
起きてからずっとタオルを右手で握り、指をほぐしながら言う。夏に函館の病院で、部分麻酔で掌の上辺を切り刻む恐怖の腱鞘炎手術をしたのだが、四か月経過しても起抜けはまだ痛く、指は相変わらず渋い感じだった。それでも腱部の引掛りは無くなり、リハビリと時間経過で良くなると医者に言われている。

喜一が腱鞘炎に悩まされ始めたのは三十五を過ぎてからで、右手中指と人差し指が引っ掛かったようにカクカク曲がる症状だった。俗に『バネ指』と言うと、後で知ったが原因は分からなかった。軽作業の手伝いも指を酷使するわけでもなく、パソコンのせいかなとも思われたが、仕事で使ってこそいるがハードとは言えず。更にパソコンオペレーターの腱鞘炎は主に手首に発生するらしいと聞いて尚、原因は分からなかった。当初はシップや棒の様な物を右手で握る動作を繰り返すとほぐれていたが、四十五歳位から三ヶ月に一度は整形外科で、指の付け根の掌にステロイド注射をしてもらうようになった。痛い注射で嫌だったが、注射後の三ヶ月位は指の調子は良かった。それで十五年を過ごして来たのだが、函館に戻ってからその注射が全く効かなくなり手術する事になったのだ。確かに注射も最初は半年に一度位だったのが、東京の最後の頃は二ヶ月に一度位の頻度だった。ステロイドは常用すると効かなくはなるらしい。
結局原因を詰めるとボクシングに起因する腱鞘炎らしいとなった。症状が出だしたのがボクシングを止めてから十年後の事だったので、迂闊にも長い間気づかなかったのだ。
五年間、喜一はアマチュア・ボクシングをやっていた。函館の高校生の頃から憧れていたが、身近にボクシングジムがなく、進学した大学で始めたのだ。結局その間はそれが生活の全てになり、碌な勉強もせず資格も取らず、両親にはただ

申し訳ないとは思いつつ、更に一年も余分にそこで過ごした。けれどボクシングをやっていなければ、読書とアルバイトでの怠惰な生活を送り、多分大学も中途で辞めていたのではないかと喜一は考えている。何より欲も得もなく、ましてや憎悪等なく、ただ全力で他者と殴り合う事に全てを燃やした。あの時間は幸福で楽しかった。

☆☆☆　3　●1977-6

高三の六月、僕は理数系の学業で落ちこぼれ、日々が芳しくないと悩んでいた。二年末の追試五教科と言う試練の末、やっと進級させてもらったのだが、閉塞感が毎日を支配し、学業に無関係な書物の乱読に逃避していたのだ。早く卒業してボクシングをやりたいと思い、文系教科だけの受験で私大文学部に進む目論見だったが、英語の点もあまり良くなく、受験が駄目だった時は、ともかく東京へ行き、プロボクサーになれないものか、と本気で夢想していた。

「喜一、無断で部活サボるなよな」

昼休みにグラウンドのベンチで、そんな事を考えていたら、白岩に声を掛けられた。

「あれ、昨日は休むって伝えてなかった」

昨日はボクシング誌の発売で気持ちがいっぱいで、そう言ったつもりだったが、伝わっていなかった様だ。白岩は六月の相撲大会の為に急遽集められた部員の一人だったが、野性的な外見と違い、マメに主務的な事もしてくれていた。昨日は顧問の井出先生が参加し、随分とシゴカレタと言う。井出先生はR校の十年先輩で母校に戻り教鞭をとっていた。髭を蓄えているので、老けて見えたが、若い。現役時の全道相撲個人戦で三位だったと聞いた。そう、この時僕は何故か相撲部員だったのだ。ブラブラしていた一年前の放課後、グラウンド脇の土俵で、村駒と言う別のクラスの生徒が、一人で黙々と力強い四股を踏むのを見て、

「なんで、相撲なんてやっているの」

と、声を掛け、村駒の柔和な笑顔に釣られ、勧誘されてしまったのだ。その前年、つまり僕が一年の時に、岡島さんと言う先輩が全国大会個人戦で入賞し、井出先生の活躍した時代に続き、全道高校相撲界にR校旋風を巻き起こしたらしいのだが、相撲部自体は人気が無く、井出先生と岡島さんが活躍していた時以外は部員も集まらず、活動が休眠になる事が多かったらしい。岡島さんの代が引退した後もそんな状態だったのだが、井出先生のクラスにいた村駒が大会だけの約束で駆り出されていたのだ。村駒は身長百八十で、体重も七十キロはありそうだった。大会の団体戦は五人制で二年の僕と村駒、三年生から井出先生が引っ張ってきた助っ人三名で戦う事になった。三年生が合流したのは大会二週間前だったが、三人とも村駒と同じ位の大きな体だった。僕は身長が百六十三しかなかったが、体重

は六十三キロ位あり、平均より太ってはいた。ボクシングをやるには十キロ減量と秘かに考えていたのだが、相撲の為に、逆に増量する感じになっていた。

その道内地区予選では、参加五校総当たり団体戦で全敗だったが、全然駄目だったのではなく、四戦全て二対三で落としていた。村駒が三勝一敗、僕が二勝二敗で三年生三人も各々一勝はしていた。星の巡り合わせとも見えたが、三つ勝ち切れないのはやはりチーム力の差、と感じさせられた。

団体戦後に個人戦が行われ、僕は予選ブロックのトーナメントで二勝して決勝に進み、そこで優勝候補の農業高校の三年に勝ってしまった。離れて突いてくる相手に、体を開いた肩透かしの様な技が決まったのだ。相手に油断もあったが、それで予選を勝抜き決勝リーグの五人に残った。ブロックには各々シード選手が割当てられていたので、番狂わせのあった僕の組以外は順当に強いとされる選手が勝ち上がっていた。

「お疲れ、惜しかった、頑張ったけどな」

帰りのバスで村駒が言う。村駒は個人戦の予選で、優勝した選手に敗れていた。

「いやいや、まぐれ勝ちの決勝リーグさ」

決勝での僕は舞い上がっていて、地に足がついていなかった。簡単に三連敗した後の最後だけは優勝した選手と熱戦を繰り広げ、投げの打合いから同体取直しになったが、再戦では引付けられ、あっさり寄切られた。全敗だったが、五位入賞となった。

「喜一は、強い奴に、強いよな」

「まぁ、自分の形になれれば、少しはね」

僕は右の上手か、下手を取って半身になるのを型にしていた。そこから出し投げや内掛け等の小技を使うのだが、将来性のある選手の本格スタイルではない。その場をしのぐ為の変則スタイルだった。

「しかし、変にかき回すと、迷惑だよな」

一発勝負の怖さで、変則に嵌って負けてしまった優勝候補の顔が浮かんだ。帰りの洗面所で顔を合わせた時に、何故か僕はバツが悪く、固まってしまったが、相手は、

「俺に勝ったンだから、優勝しろよな」

と、笑いかけ、僕はただ恐縮していた。気をつかってもらったよ、と村駒にその事を言うと、良い人だな、と言ったが、

「でも勝負なンだから、気にする必要ないよ。農業高校は団体戦で優勝しているから全道大会に進めるし。彼にも良い教訓さ」

と、続けた。団体も個人戦もここでの優勝と準優勝が全道大会に進む。これで今期の相撲部の活動は終わったが、来年の大会も出てもいいな、と僕は思い始め、

「村駒、来年はあと一人、星を拾えるのがいれば、団体戦狙えるよな」
と、言うと、村駒は、来年はやらない、勉強しないとさ、と優し気な顔で答えた。村駒は正攻法な突き押相撲で来年は個人優勝も、と考えられたが、医学部志望だったら、そうなるよな、と僕は頷いていた。
「喜一は、来年もやるのか」
村駒が聞くが、一人か、どうしようか、相撲は嫌いではないが百キロもある猛者もいて、体格的にこれ以上は無理だし、本当はボクシングだよ、と思った。
けれど結局、翌年の今、僕は一ヶ月半前から練習を始めていた。白岩ら新しく七人の三年生が順次参加してきた。村駒にも一応、声は掛けたが、やはり戻らなかった。
「これ、やばいよ。本番は直だろう」
最初にマワシを付ける事から始めるのだが、全員がカッコ悪い、食い込んで気色悪い、と嫌がった。それでとりあえず最初は直でなく、トレパンの上から締めさせた。
「土俵上はすり足、脇を締めて」
仮主将である僕が、腰を落としその動きをして見せた。それから蹲踞、四股、鉄砲と基本動作を繰り返す。四日目からぶつかり稽古や実践的な申し合いを始めた。子供の頃に皆が遊びで相撲は取っているので、二週間で恰好はついたが、皆、実践になるとすり足がおざなりになり、脇が甘く腰高でバタバタ動き、派手に転がっていた。
「相撲部って市内に幾つあるン」
皆がトレパンにマワシをつけている中、堂々と直にマワシを締め、華麗な四股を踏む、地黒が精悍な藤嵐が聞く。五つだと高校名を言うと、つまらなそうな顔で、
「やっぱ、共学の普通高校は無いじゃン」
と、言う。僕達の高校は男子校だった。
「女子のいるところじゃ、褌は厳しいな」
厳つい顔の白岩がそう言い、笑った。白岩は背が一七五センチはあったが、少し細身で、体重は僕と変わらなかった。左上手投げにこだわり、俺の『黄金の左』、と当時の横綱輪島をパロっていた。★★★

4　〇2018-12

「今年ってさ、去年に比べれば雪は少ないそうだよ。去年が多すぎたようだけどね」
と喜一が言う。知合いによると去年は、除ける場所を確保するのが大変な程の大雪だったらしい。でも、今年の方が寒いでしょ、と蒼衣が答える。どうなのだろう、以前に帰省していた時や、高校時代に暮らしていた時より寒い気はするが、東京暮らしが長くなったせいで、良く分からないのが正直なところだった。蒼衣は、半分は冗談なのだろうが、
「騙された、騙された。北海道では冬でもアイスが食べレル、

と言った」
　と言い募っている。確かに北海道の家は関東とは違い、ストーブ等の部屋暖房が完備しているから、冬のアイス需要が高いと言ったし、実家にいた四十年前には、そんな生活をしていたはずだったが、付替えた石油暖房機の火力が弱いのか、古くなった家に隙間があるのか、部屋は思う程暖かくはなかった。
　二年前に亡くなった父も、母が死んでからの一年半、本人が施設への入居を望まなかった為、ここで一人暮らしだった。食事や掃除は日中に二回、派遣のヘルパーさんに来てもらっていたが、ここに一人でいる寒い夜、寂しい思いをさせたのだろうなと喜一は思う。そして子供のいない自分達二人も、いつかはそんな時を迎えるのだろうと覚悟していた。
「絶対に、貴方は先に死んではいけません」
　と言うのが蒼衣の口癖なのだが、十歳の年齢差と男女の平均寿命差から、喜一が蒼衣より長く生きる事は可能か、どうだろう。
「頑張るよ。蒼衣より十一歳長く生きる」
　そうしてやりたいとは思うが、内心ではこの間の地震のような事もあり、運命に委ねるしかないよなとは思ってしまう。
　地震については関東の方が危険だと、東京に住んでいる間中思っていた。『東日本大震災』の時も、おっ、来た、と思ったが、住んでいる地域の被害は大きくなかった。その後の『計画停電』で二日に一度の二時間停電が順番で来るのが、冷凍保管と作業管理での仕事上不便は感じたが、何とか遣り繰りでき、休日や帰宅後の夜にそれが割当てられた時には、蒼衣と二人暗闇で仮眠するか、車でエリア外のファストフード店へ出かけて過した。
　函館に戻って来る前に、北海道エリアの活断層が話題になっていて、結局どこにいても運命には逆らえないのだと感じた。『胆振東部地震』は函館に関して言えば、揺れより、その後のブラックアウトによる停電の方がレアな体験だった。全国的に報道され、東京の元の職場や取引先の人達、友人から幾つか心配メールが届いていたが、個人的には子供の頃の『十勝沖地震』の印象の方が大きい。
「近所のネ、神社の鳥居が倒れ、大学の校舎の二階が潰れて、崩壊したりしたンだ」
　蒼衣に、だから今回は大した事ない、と続けたのだが、ブラックアウトの夜はいつ通常に戻るのか分からず、結果二日間だけだったが、暗闇に懐中電灯の夜は貴重体験だった。
「冬じゃなくて良かったし、透析するような病人がいて、電気を使う所は無事なのかな」
　蒼衣がそう言い、自分たちは大事は無かったが、そう言う人達や老人の一人暮らしの所は大丈夫なのだろうか、亡くなった父親が一人の時なら大変だったろうと喜一も思った。
　そんなこんなで帰省してからの家のかたづけは、家屋リ

フォームで中断してからそのままになっていた。最低限の生活空間が出来ているので、力の抜けた二人はそこで丸まって暮らしている。二人とも活動的でないのだ。

それでも思い返したように部屋の収納箱を開けたりすると、喜一の小中高時代の遺物が出て来る。残していった多くの雑誌や本はあまりの量に、どこかの時点で両親が処分してしまったので、例えば『あしたのジョー』や『がんばれ元気』等、愛読したボクシングの名作漫画や当時のボクシング雑誌等、今になって読返したいと思う物は無くなっている。

箱の一つから薄いパンフレットが出てきたが、十五ページで表紙には『第三十一回北海道高等学校相撲選手権大会』とあり、場所は水産高校常設土俵とある。例年は函館地区の予選会を道南エリアの五校で争い、二チームが全道大会に進むのだが、この年は函館地区での全道大会開催であったので、道南の五校はいきなりの全道大会出場になったようだ。

実はこれを見るまで、喜一はその大会の事をほぼ忘れていた。前年の道南予選個人戦で五位に入り、三ヶ月後に相撲道初段の賞状を貰った事は覚えていたが、この年の大会がいきなりの全道大会だった事は記憶に無く、内容も良いとこなく負けていた気がしていた。

パンフレットによると出場は十六校、三試合を戦い二勝すれば決勝に進めた。印刷された上に鉛筆で結果が記されているのを見て、自分で記載したのだろうなと喜一は思った。喜一は団体戦で三勝していたが、チームは三試合とも二勝三敗で負けていた。やはり駒が一枚足りなかった。村駒がいればな、と思ったかどうかは覚えていない。個人戦のトーナメントは喜一と白岩が二回勝ち、三回戦で敗れていた。他の六名も二人は一勝していた。それを見て思い出したのは藤嵐が団体戦三敗し、個人戦も初戦負けの全敗で終わり、あの華麗な四股は何、と全員が不思議に思い、苦笑いした事だ。本当にあれは何だったのだろう、足は高く上がり、真直ぐ伸びていた。腰を完璧に割った美しい四股は、形採点なら優勝だと思うが、実戦では生かされなかった。

翌年進学した大学のボクシング部時代も、似た選手がいた事を思い出す。宮本源（げん）と言う同期だったが、シャドウボクシングと言う動態イメージトレーニングで、形を反復するのだが、華麗なフットワークの動きと連打するパンチのコンビネーションで、それを美しく見せていたが、実戦は今一つだった。同期で一番遠慮のない物言いをする中島が、源のシャドウはダンスだよなぁ、と言い、あの手打ちの猫パンチじゃ利かない、と辛らつに言い放つ。猫パンチとは腰を入れず、腕だけで打つパンチの事で、当たっても打撃が軽いので与えるダメージ効果は薄かった。源は付属高校からの進学で、喜一とは入学初期に随分一緒に行動したので、色々と懐かしく思えた。

「紅白始まるよ、米津玄師、見るのでしょ」

二〇一八年大晦日、蒼衣が階下から呼んでいた。『Ｌｅｍｏｎ』を歌う米津玄師を見る事を、蒼衣は楽しみにしていた。

☆☆☆　５　●１９７８−４

「喜一のアパート、遊びに行っていいか」

宮本源がそう言った。Ｇ大学のボクシング部へ入って一週間目の土曜練習の時だ。

「いいけど、何もないし、ボロで、汚いところだぜ。新宿駅から少し歩くよ」

「かまわないよ、俺は自宅だから一人暮らしの部屋って見たことないし、興味ある」

源は付属の高校からエスカレーター方式で内部進学したので、受験時期は暇だったとかで、三ヵ月を自宅のある下北沢のボクシングジムに通い練習して来た、のだと言う。それで体育館の隅でジャブとストレート等、初歩訓練をしていた他の新入部員と別に、上級生達に混じって練習していた。

東京のその私大に僕が潜り込めたのはツキが大半だった。絶対に無謀な早慶他十以上の私大文学部を受け、結果二勝九敗一棄権だった。棄権は本命の一つだったが、慣れない電車を乗り間違えて中央線特急で山梨まで行ってしまった。受験数が多く一々下見もせず、それでも数打てば当たるで、英語の試験のヤマが二つ当たり、何とか行先が確保出来たのだった。キャンディーズ解散が社会現象になっていたその時、バタバタと入学手続きをし、間借先を決めた。

東京で印象的だったのは、四月の風の寒さと新宿の高層ビルだった。頂きが見えない遥かなビルの高みに僕は衝撃を受けた。それは予測できない未来への、漠然とした感動のような物だと思ったが、良くは分からない。後に幾人かに聞いたが、誰もそれ程高層ビルに感慨は抱かなかったと言う。

「大学、付属からの内部進学者多いよね」

Ｇ大学は渋谷にあった。土曜日は部活の練習が平日より二時間程早かったので、終了後の午後四時頃、二十分の道のりを渋谷駅の方へ二人で歩きながら僕が言った。

新入部員も十名中七人が付属出身だった。

「あぁ、内部進学の方が外部試験で入るより楽だからね。だから皆、付属へ行くのだけどね、喜一は何で部に入ったの」

山手線の切符を買いながら、源が言う。

「元々ボクシングファンだからね」

ラッシュ時の前なのに人は多かった。

「ああ、そうだった。喜一、結構詳しいよネ、ボクシング。他の奴らは全然だよな」

確かに他の新入部員は、あまりボクシングの雑学を知らなかった。十人中、志願して入って来たのは僕と源と中島

の三人で、他の七人は入学初日、二日にあった強引な運動部の勧誘で入れられたのだった。それも三人は応援団に、二人は少林寺拳法部の仮入部から逃れたものだった。五人は学ラン着用の上、厳しい上下関係が見えるそれらの部よりは、同じように甘い言葉で勧誘してはいたが、私服自由で上下関係もあまり厳しくないようなボクシング部の方がまだましだと、二重入部の末に入ってきた。他部とのその辺の決着交渉は四年生が部の政治力で何とかしていた。そんな理由で彼らはボクシングに詳しくなかったが、上級生もそんな具合で入って来ていたのか、最近の事はともかく過去の事には疎かった。比べれば、源は事前にジムに通っていた位だからボクシングの雑学知識はあった。

「あいつらスピンクスも知らないンだぜ、アリは知っているようだけど、タイトル奪われた事も、五人は知らないようだし」

源は他の八人の同期の事を言った。ヘビー級の人気王者アリは、この二月に、モントリオール五輪の金メダリストで新鋭のレオン・スピンクスに判定で敗れ、タイトルを失っていた。番狂わせだった。

「先輩も、アリの昔の名前がカシアス・クレイだって知っていたのは四年の高見さんと二年の吉山さん、森さんだけだったぜ」

源は山手線の中で、横に立つ喜一にあきれたぜ、と続けた。アリはマルコムXの思想に共鳴しブラック・ムスリムに改宗、一九六四年に名前を変えていたが、日本ではブランクから復帰した一九七二年位から表記を改めたので、喜一の父などは逆に、ずっとアリの事をクレイと呼んでいた。

山手線を降り、西口から新宿中央公園を通る。僕はその先の西新宿に値段の安さだけで決めた六畳一間を借りていた。歩きながら源とはボクシングの話をしていたが、源は上級生の全員と話をしているらしい。僕はまだ数人としか、言葉を交していなかった。上級生は二年が九名、三年が四名、四年が二名いた。各学年とも最初はその倍はいたが残るのは五割なのだ、と上級生から聞いたと源が言う。だから今年の一年も五人残れば、と言う事らしい。二年が多いのは去年映画で『ロッキー』が大ヒットしたせいらしい。部始まって以来の二十名が入り、結果半分が残った、と言う事だ。

途中の自販機でコーラを買って僕の部屋に来た。トイレ、炊事場共同の六畳一間。布団と衣類は押し入れで、机とテレビはあったが他には本以外何もない。ラックに魔法瓶とカップ位はあったが、自炊もしていないので冷蔵庫や食器もなかった。

源が興味深そうに部屋を見ながら、積んであるボクシング雑誌を手に、サモラ、駄目だね、と言う。サモラはサラテに敗れた後、格下相手にも敗れ精彩を欠いていた。

「無敗ボクサーって、一度躓くと駄目だ」
と、源が続けた。街では矢沢永吉の『時間よ止まれ』が流行っていた。喜一は源を新宿駅に送りながら、どこかの店舗から新宿の街路に流れているその歌を繰り返し耳にした。大人と子供の間、少し後なら何処かへ飲みに行くとかあったのだろうが、部屋でコーラを飲んで別れた。ひと月後に原宿でのボクシングビデオ映写会に二人で行ったりした。そんな付合いで、秋のデビュー戦までは一緒に練習していたのだが、直後に源は部を辞めた。飽きた、と最後に言い残した。源の性格は最後まで良く分からなかったが、東京人にしては純朴で、御調子者で人懐っこい様でいてそうでもなく、僕とは仲が良かったが、同期内では常に少し浮いている存在と言う感じだった。結局僕とも最後まで踏込んだ交友はなかった。僕はその頃は地方からの下宿組の中島、伊藤とつるんでいる事が多く、部の練習以外は、雀荘か当時爆発的に流行っていたインベーダーゲームをやる目的で喫茶店に入浸り、後はアルバイトが主の生活だった。
夏までの練習は特に厳しいという事はなかった。日々ロードワークとパンチの打ち方やフットワーク等基礎的なジムワークを繰り返していたが、一年は付属から来た四人が既に辞めていた。春のリーグ戦は始まっていたが、一年が試合に出る事はなく、応援や荷物運びの雑用を手伝っていた。
G大は関東ボクシング連盟の三部に属していた。一～三部までは各六大学で四部は八、五部が十幾つかの所属だった。一～三部は団体リーグ戦、四、五部はトーナメントで、各段上位下位の入替戦が最後にあった。G大はその年四位で三部に残留した。
「上出来、上出来。今、二部に上がってもな、全然付いて行けないよ。勝負は来年」
後楽園ホールでの最終戦の後、新主将になる三年の宇垣さんが言った。二部以上の大学は団体戦も七階級九人制で、全員が高校で実績があり、その推薦で入学したセレクションの選手で占められていた。三部も大学によっては幾人かセレクションの選手がいたが、G大は全員が大学からの選手だった。五階級五名対抗の三部だったから選手層が薄くても何とかなっていた。★★★

6　○2019-1

パソコンに『Zボーイズ』と入力すると、そのウィキペディアが現れ、概要が閲覧できる。又ユーチューブにはその試合や昔ビデオ映写会等で見た色々な名勝負がアップされている。夢のような時代だと喜一は思う。
ここ何年か、大晦日は蒼衣と年越しそばを食べながら紅白を見ていたが、八年位前までは関心は薄く、見てもいなかった。それでも年度の代表曲は知っていたが、たまたまその年

の流行歌を紅白で初めて知る事があった。植村花菜の『トイレの神様』で、年度の流行歌の漏れは、知りたがりの喜一には少しショックだった。今は世代を統合する様な国民的流行歌が存在しない。楽曲を取捨するのも大変だろうなと思うが、最近は選出された歌手に、或る種のステータスが強く付与される気がする。その為、その歌手選考には常に異論はあったが興味を魅かされた。

蒼衣は実は、米津以外関心はないのだが、喜一に付き合って、去年より話題作多いかもね、等と言う。確かにそう、米津玄師、あいみょん、純烈、ダ・パンプの曲等、豊作だ。

逆にプロ・ボクシングへの興味の落込みは酷い。大学を卒業した後も関心を持っていたが、いつしか熱心なファンではなくなっていた。四団体が乱立し、世界王座が一階級に四つも出来てしまい、尚且つ一つの団体内で暫定王者やスーパー王者等と世界王者を二つ三つ乱造し、いったい一階級に、今どれだけの世界王者がいるのかと言う酷い状態になっていたからだった。原因は世界のプロ・ボクシングが、興行の上で世界の冠の無い試合が注目されにくく、紛い物でもタイトルを争う事が全てになってしまったからだ。更にそこに利権がからむ。煌めきの中にあったものが、遠くへ行ってしまったと喜一は感じる。ボクサーは同じく懸命に戦っているのだが、王座が分散している分、期待する対戦は容易に組まれず、王座の密度が薄いので、そこに価値を見つけ、情熱を注ぎにくかった。だいぶ前に月刊誌の購入も止め、今はたまにテレビ中継を見る位だった。考えると寂しいが、ＷＢＳＳのように階級の№１を決めるトーナメントが企画される等、少しの希望はあった。

ボクシングをやっていたあの頃、何故あんなにも熱中していたのか、今は不思議な気もする。確かに競技自体の魅力は大きく、思い込んだら命がけ的な気分で、大学の授業にはあまり出ないのに、午後四時からの部の練習には生真面目に参加していた。月刊誌も購読し、後楽園ホールで行われるプロの試合も、無料立見券が手に入れば一人でも行った。大学にリングがなかったので、土曜は隔週で池袋にあるジムで練習させてもらっていて、そこの主催の四回戦や六回戦だけの試合の、二階自由席の招待チケットは割と貰えたのだ。

最初宮本源と行ったボクシングビデオの月一映写会も、七百円位の料金だったが、その後も一人で行っていた。映写は日本のテレビでは放映されない海外の過去の試合が多かった。三回目に行った時にあの『Ｚボーイス』の試合を見た。四十名位の会場で大半は男だったが、女性が五、六人位は入っていた。

「見るからにサラテの方が強そうよね」

二人連れの若い女性の一人が、映写の間の休憩時間に連れの方に、そう言った。連れの方は少し苦笑いし、だって先輩、結果を知って見ていたら、そう思いますよ、身長やリーチ差

があるし、と答えていた。そうかなぁ、菊絵はサモラのファンだったからね、と先輩と呼ばれた方が返していた。その後二人はヘビー級のアリとフレイジャーの第一戦や、アリとファマン戦の見た目と、結果の違いを短く会話していた。何者だろう、詳しいが変な視点だなと喜一は思い、後ろの席を横目で見た。二人とも結構美人かなと思ったが、菊絵と呼ばれた方は目の間隔がやや開いているのが個性的で、喜一はちょっと魅かれる気がして、その後居れば意識していた。この四、五回後、偶然横に座った時に喜一は『あしたのジョー』の登場人物について二人が会話途中で、疑問を口にした件で横から答えを出し、二人と口を聞くようになった。女子大の漫画研究会所属の先輩後輩で、ボクシング漫画を構想中で、その為に来ているのだと言った。

ボクシング漫画『あしたのジョー』は熱中して読んでいたが、喜一的には古い時代のボクシングに感じられた。ドヤ街、少年院等、血と汗のアウトロー的拳闘世界で、父親が語る拳闘の世界に近いように思われた。一方、当時人気だった『がんばれ元気』は、今から見れば古い所はあるが、その頃の喜一はリアルで愛読していた。発表の年次を調べると両書には十年弱の開きがあり、ジョーは一九六五年頃の小中学の時で、元気は一九七五年頃から始まり、大学のその時に連載中だった。この十年の間に世界のボクシング界は二つの世界王座に分裂していた。結末で矢吹ジョーはただ一つの輝くバンタム級王座に挑み、敗れる。堀口元気はこの時から三年後の結末で、一つの王座を獲得した後、もう一方の王者との宿命の戦いに勝利し、世界フェザー級の王座を統一した。元気の非アウトロー的性格を含め、時代が作品の背景に映されていた。

除夜の鐘が聞こえた。寝息が聞こえ、隣室では既に蒼衣は眠っている。二〇一九年が始まり、五月には年号も変わると言う。多くの時の中でもがく自分がいた。喜一はそんな時間を整理しつつ振り返ろうとしていたが、果たしてそれに意味があるのか、人生を再構築する虚栄、と思わなくもない。それでも喜一は「あの夏の希望と憧れ、溢れる思い」と最後の章の入力を始める。

☆☆☆　７　●１９７７−８

八月の夏合宿は千葉の九十九里浜で一週間行われる。一年での参加は六人だった。二年の先輩が車を出し、部員全員が分乗していた。高速代とガソリン代を頭割りで支払ったが、正規に電車で行くよりは安い。二年生の十人中九人は付属の出身者だったので、都内の自宅から通っていて車の所有者も多かった。彼らは一時代前の湘南ボーイのように都会的でスマートだったが、微妙にずれた古風さを醸していた。高速を走る車のカセットから当時ヒットしていたサーカスの『アメリカン・フィーリング』が流れていた。僕は首都高を車で走るのは初めてで、後部座席から、走り

過ぎる東京の景色を見て、ただ感嘆するだけだった。
「一年生、合宿、暑くて、きついからな」
同乗している二年の吉山さんが言う、
「だけど、ここでたっぷり走りこんで、スタミナつければ、秋の新人戦は大丈夫だ」
と、続けた。一年生は秋にデビュー戦が予定されていた。一週間民宿に宿泊し、早朝の砂浜ロードワーク五キロ、昼の腕立、腹筋、短距離ダッシュ等の基礎体力訓練、夕方のジムワークがメニューだった。当時のアマチュア・ボクシングはヘッド・ギア無しでの試合だったが、ジムワークではそれを付け、十四オンスグラブでスパーリングが行われた。十四は重く、実際の試合で使う八オンスグラブで打合うより疲れた。
一年の六人は高校ボクシングを遣ってきたものはいなかったが、伊藤と中島はサッカー部だったので基礎体力は高かった。毎朝の五キロ走でも、高校陸上部出身の二年の先輩を含めた三人でトップ3を争っていた。走りはその三人以外は上級生を入れても同じ位だった。三年の二人と二年の二人と源がいつもラスト集団で、走るのは得意ではなかった僕は、それでも入学以来のロードワークで体も絞れていて、その五人よりは前の中程にはいた。体重は特に減量したわけではなかったが六十を切っていた。身長から考えればフライ級が望ましかったが、残り九キロの減量は足腰が太い日本人体形の僕には厳しかった。一つ上のバンタムでもあと五キロの減量は必要だった。
「向うの選手って、高身長で上半身が筋骨隆々で逞しいのに、手が長く、足細いから体重軽いな、これと同階級だと厳しいな」
夜の休憩時間にボクシング雑誌を見ながら、同期の野川が感嘆したように言うが、野川は足が細く日本人体形ではない。何もスポーツはやってなかったと言うが、素質的には一年の中でも有望だった。ただ喫煙していたので、スタミナ切れで注意されていた。最も僕と源以外の一年は全員喫煙者だったが、合宿でのハードワークで二人は禁煙を始めた。中島と野川は継続して喫煙していたが、それを続けながら朝のランニングでトップを走る中島には驚かされた。先輩達も半分位は喫煙者がいたが、合宿中と試合一ヶ月前は禁煙するのだと言う。
海水浴シーズンからはやや外れた八月下旬の海辺に、人影はまばらだったが、まだ蒸し暑く、潮のにおいが満ちていた。過剰な力で精神を鼓動させ、激しく肉体を苛んでいた若い僕らは、ただ砂と汗にまみれ、晩夏の煌めきの中にいた。★★★（了）

小説　佳作

バザーの日

佐々木　文彦

その日は、ＮＰＯ法人の、年に一度のバザーの日で、天候は曇り、夏の終わりのことで、不安定な天気がつづいていたが、きょう一日は、なんとか持ちそう、という様子だった。北村は、そのＮＰＯ法人のメンバーのひとりで、医学的に言えば、〝精神障害者〟に分類されるのだった。

前の晩は寝付けぬ夜を過ごした北村は、ベッドで気がついたときには９時をまわっていた。バザーの準備のための集合時間は９時半で、北村のアパートから自転車で３０分はかかるのだった。北村は慌しく着替えを済ませ、出かける準備をした。

自転車での道行きにはなにごともなく、北村はカフェパレットの前に着いた。既に、ケースワーカーなどの職員たちが、店の前に机や品物を並べはじめていた。お客が押し寄せるのを防ぐため、販売スペースには縄が張ってある。北村は、カフェパレットを統括している、まかないのおばちゃんに挨拶に行った。

〝まだＫさんが来ないんだよ〟

カフェパレットのメンバーたちの数名が来ていて、売り物をあちらへやったりこちらへやったり、飲み物の準備をしたりしていた。まかないのおばちゃんは、厨房でカレーを煮込んでいた。バザーの物品のほかに、飲み物やソフトクリーム、カレーライスなどを提供するのだった。

おもての端のほうでは、共同作業をする、ヘルパーステーション〝こころ〟のメンバーたちが、焼き鳥の準備をしていた。縄を張ったまわりに、既にお客さんが何人かまつわりついている。ケースワーカーが、

〝時間まで、ご遠慮ください〟

とお客たちを牽制した。

北村は、ケースワーカーたちと一緒に、品物を並べるための机を運んだり、バザーの物品を並べたりして準備を手伝った。まだ若い、女性のケースワーカーが現れて、〝これを〟と、首からさげるネームプレートを手渡した。カフェパレッ

トの前は路面電車が走っていて、５分おきに車両が音をたてて通り過ぎる。建物のまわりは、樹々が豊かに取り囲んでいて、時折鳥の声が混じる。ここは内陸のほうなのに、ウミネコが空を横切るのが見えた。

北村は、ケースワーカーの主任から、若い女性を紹介された。どうやら、看護学生の研修生で、手伝いに来たらしい。

〝こちら、カフェパレットの北村さん〟

北村は挨拶をした。

化粧品や、型落ちのラジカセや古着、ぬいぐるみや、使われていない化粧品など、こまごましたがらくたに近いものを次々と並べる作業がつづいた。冷蔵庫やベッドなどの大物もあった。値札は、職員たちが前日のうちにつけてあった。

Ｋさんが到着し、北村は挨拶した。

〝おつかれさまです〟

Ｋさんは、小太りの、３０くらいの男性で、いぜん、地元のスーパーの鮮魚係を勤めていたが、病気のため、リタイアしたひとだ。内気で、他人と話をするのが得意ではないが、仕事はしっかりとこなす。まかないのおばちゃんからは、信頼され、カフェパレットの主任と目されていた。カフェパレットのなかでは、北村とは親しいほうだった。カフェパレットのメンバーは、ほかに、いずれも３０代の女性が数名、２０代の女性が二名、やはり３０代の男性が数名、といった構成だった。いつの間にか来なくなってしまうメンバーもいれば、問題を起こして辞めさせられてしまうメンバーもいた。こういった病気は、どんな時代であろうと、人口にほぼ一定の割合を占めるのだ、と北村は聞いたことがある。

バザーがはじまるのは１０時３０分、まだ時間があるので、北村は一服しに喫煙室へ行った。

先客がいた。Ｔさん、３０代後半で、中国の古典を読んでいるという、読書家だ。気の毒なことに、いつも、眼を伏せたような面差しをしている。

〝おつかれさまです〟

〝どうですか、調子は〟

〝ちょっと落ち気味です〟

Ｔさんは、病状が重いようで、喫茶店での仕事の最中に、具合が悪くなり、常に持っているとんぷくを服用することがあった。北村は、それほど重くはなく、気分が高揚するよう

なこともないが、激しく落ち込むようなこともなく、とんぷくを服む必要はなかった。

それから二人はひとしきり世間話をした。タバコを吸い終わり、北村は言った。

〝じゃあ、そろそろ行きましょうか〟

北村はTさんと、バザーの会場へ出ていった。まもなく開場で、待ち切れない様子のお客たちが、それは中年の女性が多かったが、張ってある縄にへばりつくように並んでいた。

ケースワーカーの主任が、関係者たちを集めて、きょうの作業の概要を説明し、指示を出した。それぞれが、持ち場へと散っていった。Tさんを含めた、カフェパレットのメンバーたちのほとんどは、店内での作業になるようだった。

北村は、若い看護学生と組んで、商品の売り子をすることになった。

目の前を、ケースワーカーの若い女性が通りすぎた。北村は、この女性に対して、怒りにちかいような感情を持っていた。社会復帰のため、喫茶店の店員の作業療法をしている、カフェパレットのメンバーたちに対して、この女性は、〝おつかれさまでーす〟という一種類のことばしかかけたことがなかった。顔には、ファストフードでよくある、「１００％の営業スマイル」が貼り付いている。ケースワーカーをやっているうちに身についた、職業上の機能障害なのか、自己防衛の一種なのか。以前働いていた会社の、決して温かみがあるとは言えない、やり手の年配の女性幹部が、怒ったように、

〝ちかごろの若い女の子の冷たいことったら、ないよ〟

と口説いていたのを、北村は思い出していた。だが、若い女性たちが仮にほんとうに冷たいとしても、それは、彼女らがいきなり放り出される、ある種の〝無情の世界〟、「カラカラに乾いた、利害関係だけで成り立つ社会」のせいかもしれない。

相方の看護学生は、よく笑い、まだ社会を知らないうちの、無邪気さをそなえているかのようだった。北村は、中年特有の図々しさで、若い女性の華のある雰囲気を楽しむことにした。

曇っていたのだが、雲間からわずかに光が漏れ、喫茶店を囲んでいる木々の葉をきらめかせ、光がキラキラとこぼれだした。まもなく、開場だ。

時間が来て、主任が、

〝開場です〟

と宣言し、張られていた縄が取られて、並んでいたお客たち

が堰を切ったようになだれ込んだ。物色していた商品を次々に手に取り、北村と看護学生はしばらくの間、対応に追われた。お客たち、と言っても、そのほとんどは、このメンタル・クリニックのクライアントかその家族および関係者、もしくは、カフェパレットの関係者たちだった。あるいは、このＮＰＯ法人の趣旨に賛同してくれた、それほど多くはない、一般の社会人の会員と言ったところだろうか。それも、平日のこの時間、来るのは大方、年金生活者だろう。

ふだん孤立した生活を送っている北村は、そばには若い女性がいるし、それなりの娑婆世界のひとたちと交流できるのを楽しんでいた。こういった病気の特徴として、感情の平板化ということがあり、来る日も来る日も曇りの日ばかり、という日々がつづくのだが、きょうばかりは、北村のこころにも、わずかに光が射すかのようだった。

バザーを開始してから1時間も経たないうちに、多くの商品が捌けて、大量の小銭と少しのお札が会計の袋に溜まった。売れ筋の商品というのはやはり決まっていて、だいたいが、だれもが目をつける、それなりに実用性のある、新品にちかい品物だった。売れ筋の商品が出てしまうと、パタリと売れ行きはとだえ、ひと段落ついた、という感じになった。

目をつけていたものを買ってしまったお客たちの多くは、そのまま帰ってしまうか、残っている品物を物色し、ためつすがめつし、だが結局は買わない、ということになりがちだった。北村は、通りすぎるお客たちに対して、

〝このお皿、いかがですかー〟

と声をかけ続けた。看護学生と、ちょっとした世間話をしたり、ふざけあったりもした。

売れ行きが途絶えたまま、昼時になり、メンバーたちは交代で、まかないのカレーライスをいただきに行った。このバザーの仕事は、ヴォランティア扱いで、報酬が出ない代わりに、カレーはただで食べられるのだった。ヘルパーステーション〝こころ〟の焼き鳥も順調に捌けて、シオが売り切れになったようだった。いまになって到着したお客もいて、売れ筋が出たあとのガラクタのなかから、何か使えそうなものを物色していた。

まかないのおばちゃんの指令で、きょうは仕事じゃないから、好きなときにタバコ吸いにいっていいよ、ということだった。メンタル・クリニックはきょうは休院日で、がらんとしたひとけのない通路を通って、北村は喫煙室へタバコを吸いにいった。

喫茶店のなかは、中央のテーブルに、かき氷機やジュース用の紙コップが置かれ、あちこちで、カレーライスを食べたり、ソフトクリームを舐めているお客たちが座っていた。厨

房では、暑い中、まかないのおばちゃんが３０代の女性たちを従えて、カレー鍋をかきまわし、カレーを盛り付けたり、そのほかこまごまとした作業を行ったりしていた。
北村が喫煙室から戻ってきて、店のなかをのぞくと、まかないのおばちゃんが声をかけた。

〝そろそろ、お昼にしたら？〟

北村がカレーを受け取ると、おばちゃんは、

〝陽が出てきたから、おもてで食べるといいよ〟

と言った。
北村は、言われるままに、カレーの入ったプラケースを持って、おもてへ出た。建物に立てかけてあるベンチに座って、若いケースワーカーの女性がカレーを食べているのが見えたが、そこへは行きたくなかった。シートが敷いてある、商品のない、空いているところへ行こうとしたところ、ケースワーカーの女性が視線に気づいたらしく、声をかけた。

〝北村さん、こちらで食べたほうがいいですよ〟

断るわけにもいかず、北村はカレーを持って、ケースワーカーの女性のとなりに腰を下ろした。黙って食べていればいいものを、日頃、良くない感情を持っていることを表明したくなり、北村は話しかけた。

〝Ｙさん、さいきんも相変わらずお忙しいんですか？〟

ケースワーカーの女性は、文字通りに受け取り、
〝いや、そんなに忙しいわけではないですよ〟
とこたえた。

〝いやいや、挨拶したら、スッといなくなるじゃないですか〟

北村の悪意を感じとったらしく、ケースワーカーの女性は、
〝ふっ〟と、苦笑ともつかない息をもらした。
北村は、ちょっと言わずもがなのことを言ったな、と後悔し、一般的な話題をふってみた。

〝政権が代わって、自立支援医療というやつは、どうなるんですか？〟

〝いや、よくわかりません〟

そう言って、ケースワーカーは黙り込んだ。北村も気まず

さを感じ、そのあとは黙ってカレーを口に運んだ。
そのうち、ケースワーカーの女性は、北村のことばをなぞるように、スッといなくなった。

昼時のあと、バザーは、消化試合、といった趣きで、のんびりと進行した。まれに、気に入ったものを見つけ出したお客が、北村や看護学生にお金を渡して、商品を持っていったが、13時をまわったあたりから、ケースワーカーの主任が見切りをつけ、投売りを始めることになった。ほとんど、百円均一になり、もともと百円のものは、五十円になったりした。
小学生くらいの男の子が、クラシックのCDを手にして北村にきいた。

〝これ、いくらですか〟

北村は、こどもに配慮して五十円の値を言い、こどもはお金を渡してうれしそうにCDを持っていった。
たくさんあった品物の、三分の二ほどは捌けて、そろそろお開きか、という雰囲気になってきたころ、メンタル・クリニックの院長が現れた。どんな具合か、見物に来たらしい。北村は、挨拶をした。

〝盛況だったようですね〟

〝おかげさまで〟

院長は、関係者各位に声をかけてまわっていた。
14時半、そのまえから、店じまいの支度をしていたひとたちもいたが、お客もほとんどいなくなり、ケースワーカーの主任が、終了を宣言した。

〝みなさん、お疲れ様でした。片付けにはいってください〟

若い、男性のケースワーカーが、送迎用バスを運転し、メンバーの何人かを引き連れて、リサイクル・ショップへ、売れ残った大型の家電などを売りさばきに行った。
北村は、おもてで作業をしていたひとたちと一緒に、売れ残ったものを片付け、ブルーシートを畳んだ。喫茶店のなかも、片付けで大童のようだった。
女性のケースワーカーは、別室で売り上げの計算をしていた。ヘルパーステーション〝こころ〟の焼き鳥は、完売していた。
片付けの作業に区切りがついたのは、15時をまわったこ

ろだった。参加者全員が、喫茶店のなかへ集まり、ケースワーカーの主任が挨拶をした。

〝みなさん、ご苦労様でした。今回の売り上げは、十一万円です〟

拍手と歓声があがった。

〝では、一本締めで、お開き、ということにしましょう〟

それで、グループごとに分かれて、解散、ということになった。カフェパレットで、作業療法をしているメンバーは、まかないのおばちゃんの統括のもとに、集合した。

〝じゃあ、このあと、カラオケ行くひとー〟

Kさんは、そういう賑やかな催しが好きではなく、ひとりだけ帰ることになったが、ほかのメンバーたちは、喜んで参加することになった。

女性陣たちは、いったん家へ戻って、着替えたりシャワーを浴びたりといった身だしなみをするものもいたが、男たちはそのまま、市内の繁華街にあるカラオケ屋へ向かうことになった。通りの雑踏にまぎれると、このひとたちが病気だとは、一見わからないだろう。

リーダーである、まかないのおばちゃんが到着するのを15分ほど待ったあと、カウンターで部屋をとり、メンバーたちはエレヴェーターで3階へ上がった。部屋へ入り、飲み物や食べ物を注文したあと、お定まりで、分厚いソングブックを持って、積極的なメンバーから予約を入れ始めた。

一番若い女性が、報道などで〝社会現象〟と言われているアニメのテーマ・ソングを熱唱し、一同の喝采を浴びた。それぞれが、得意の持ち歌を披露して、一日の疲れを発散するかのようだった。飲み物のグラスが空き、食べ物がなくなり、灰皿には吸殻が溢れた。

途中で退席するメンバーもいたが、そろそろ夕食時になるかというころ、だれからともなく、お開き、ということになった。メンバーたちはぞろぞろと部屋を出ていった。

1階のホールは、騒音と、若い連中で溢れていた。

カラオケ屋の待合のテーブルのむこうには、大型のモニターがあって、なぜか、褐色の難民たちの映像が映し出されていた。前世紀は、〝戦争の世紀〟とも言われていたのだ。知られているだけでも、二度の世界大戦があり、いくつものジェノサイドがあり、拉致があり、地球のあちこちでおおき

な、茶色い戦争が起こったのだ。生まれてから15年ほどのあいだとは言え、なにごともなく、平和な日々を送ることができたことが奇跡のように思えて、北村はこころのなかで涙を流した。

まかないのおばちゃんが代表してお金を集め、会計を済ませたあと、メンバーたちは挨拶を交わしながら、三々五々、街のあちこちへ散っていった。

小説　佳作

マドンナ

縁筵　勇二

いつもの通りセンターの廊下の掃除で、伸び上がって鴨居を拭いていますと、

「たい子さん、なんも無理して高いところを拭かなくても…。高いとこは背の高い人に任せたら…」

と云う声に視線をやると、「あの方」がニコニコしてからかうように云うのです。

「これ以上身長がつまらないように伸ばしてるんです」

私もそう云い返してやりました。

私はとある老人福祉センターのお掃除係りです。

今の会話でもお分かりのように、鴨居には少し背伸びしなければ届かない程の身長なんです。もう少し云いますと、小太りなんです。身長も昔に比べると三㎝は縮んでしまいました。歳のせいなんでしょうね。六十も半ばになればしょうがないんですね。でもまだ元気でこうして働いています。そんな私を見かけると「あの方」は声を掛けて来るんです。

あの方は私のことを「たい子」さんって呼ぶんです。

「たい子」って私の名前ではないのですが、いつ頃からかあの方が呼びかけると、それが私の名前であるような気がして、つい返事してしまうんです。その呼び方がごく自然で、何となく返事をしてしまうような雰囲気なんです。あの方の持つ不思議な魅力なんでしょうね。

あの方はもう八十も半ば、当然のように頭は白髪ですが、見た印象は七十代前半位の元気そうな方です。普通のお年寄りのようにじじむさくて、とっつき難いって感じもしません。年寄りにありがちな不精ひげを生やしてたのを見たことがないから、お洒落なんですね。お洒落たってケバケバしく飾り立てるような外見的なお洒落ではなくて、身だしなみはキチッとしていて、見えないところに気を使うような内的なお洒落とでも云うのでしょうか…。お話の仕方もオットリしていて、育ちのよさが感じられます。そして周囲を柔らかく包み込むような雰囲気を漂わしていて、声を掛けられると、ウブな小娘のように「トキメキ」を感じてしまうのです。還暦を過ぎて今更、別に愛だとか恋だとか云う生臭い感情ではなく、幼い頃大人の人に褒められて胸がどきどきしたような感じなのです。そんなホンワカとした気持にさせる存在感のある方なんです。

その方のお名前は存じあげません。だから「あの方」とお呼びしてるのですが、お名前が分からなくても支障のない関係なんです。例えば毎朝通勤の途中必ず顔を合わせる人がいたとしますと、いつとはなく目礼から「おはようございます」って声がけするようになることがありますよね。勿論どこに住んでいるか、何と云う名前なのか、勤め先などは全然知らなくても、別に支障はないわけですが、そんなことと同じなんです。あの方にとっての私の存在も同じなんだろうと思います。

あの方が云うには、いつも出掛ける場所は、その物理的な環境とそれに付随する人や物が固定化されてくるものだそうです。そこへ行くとその人に逢えると云う気持、そして逢ったと云う実感…それが今日一日を送ったと云う心の安らぎに繋がるんだなんて何だか難しい言い方をされましたが、要はセンターに行けば私に会える。そしてそれが今日一日を生きた証となると云うことなんでしょうが、そう云われれば人間の生活って、いつの間にか心の中にそんなパターンが作り上げられているのでしょうね。私達の生きる社会の仕組みと云うよりも、智恵なのでしょうね。

どうして「たい子」って呼ぶのか聞いてみました。

聖徳太子を知ってるだろうと云うのです。

「はい」と云ったらその下のほうの二字だよと生真面目な顔で云うのでした。下の二字って云うと「太子」（タイシ）ですよね。「シ」を「コ」と読めば、成る程「たい子」です。私がキョトンとしていると、「そうなの」と念を押すようにニヤニヤしながら云いました。

漢字で書いて眺めているうちに、分かったのです。「ふとった子」と云うことが…。

「デブ」とは面と向かって云うわけにも行かないので、考えた挙句が「たい子」。もっともらしい名前に聞こえるんです。「まあー」って思いましたわ。私の太ってることがあの方になんの関係があるのって思いましたわ。だけど不躾な言い方をされるよりは、落語の「考え落ち」のようにヤンワリとユーモラスな言い方に気遣いを感じましたわ。

私は六十半ばのバアちゃんです。夫を五年前に亡くし、娘と二人で暮しています。娘も一人は嫁に行き、残った一人は縁遠いのかまだ保母さんをしています。

夫は定年後事業を起こし一生懸命やっていましたが風邪が基で肺炎を併発しあっと云う間に亡くなってしまいました。

私がこの仕事についたのは娘達も手がかからなくなった頃からです。専業主婦でしたが何もすることがなくなって来たので健康のためと、孫も出来たのでオバアちゃんとして小遣

いもあげたいし、そんな小遣い稼ぎのためで、これと云った手職があるわけでもなく、掃除好きであったもんですから、この仕事を始めたわけです。

私達は見合い結婚でした。家にやってくる背負い呉服商の小母さんが年頃になった私を見て、「チエさん、いい人がいるんだけど、一度逢ってみない…」と私の母に持ちかけたのです。母も私をそろそろ嫁に出さなければと思っていたんですね。話がトントン拍子に進み、見合いってことになったんです。あの頃は今と違って見合いが結婚の前提みたいなもんでしたから、あの小母さんのような人があちこちに話を持ち込んで縁結びをしていたんです。今流に云うと「紅い糸」を引っ張って歩く人がいたってことなんですね。私の口から云うのは憚られますが、私もその頃は背丈も普通より一寸大きく、均整もとれていましたから、夫も一目惚れのようでした。たいした紆余曲折もなく、半年ほどで嫁入りしてしまったのです。結婚生活は平凡なものでした。娘を二人も授かり、家事、子育てと夢中でしたが、気がついてみると夫も定年間近ってな状態でした。

夫が晩年、晩酌でいい機嫌になると偶に云いました。

「俺はこんなデブを嫁にした覚えはないんだ。俺が惚れたカアさんは、すらりとした細身の美人だったんだ。仲間がお前のことを掃き溜めに鶴のような嫁さんだと、羨ましそうに云ってたもんだ」

そう云って絡むんです。掃き溜めに鶴ってのは本来的な意味のほかにスマートで痩せぎすの体型のことも云ってるんですよ。

そうかと思うとしみじみと云うのです。

「天は二物を与えずって云うが、お前も見込まれたもんだな…。天の神はお前に試練として太めの身体を授けてくれたんだわ…。天の神さんはお前をそんな身体にして溜飲を下げてるんだよ。きっと…」

随分嫌味なことを「天」の所為にして云うんですよ。しかし何で私が「天の神」に溜飲を下げさせなければならないか分からないんですが…。

今までこんなことなんか云ったことのない人でしたのに…。うちの亭主の「天の声」はデブデブコールだったんです。

別に大食らいで太ったわけでもなく、最初の子を身ごもったときにホルモンのバランスが崩れたのか太ってしまったんです。丁度標準寸法であった体型が、頭から押さえつけたために寸詰まりになった分、前後左右に膨らんでしまって福々しくなってしまったと云うことなんです。

だから「あの見合いのとき、こんな太った娘なら嫁さんには貰わなかったよ…」

そう嫌味を云うんですよ。云われたってどうしようもないし、私は黙って笑ってるより仕方ありませんもんね。でも大

相撲の小錦みたく、小山のように太ったと云うわけでもなく、全体がふっくらとしている程度だと思っているんですがね、うちの人は何でも大袈裟に云う癖があるから、聞いた人はダブダブに太っていて立ったり座ったりが大変な人のように思っちゃうんですね。私に会った夫の友人は、旦那さんの話じゃ肉の塊のように聞いていたが、何も気に病むほどじゃなく、一寸太っているって感じじゃないの、気の毒な程太っている人が沢山いるから気にすることないよって云ってくれるのです。まあ娘は昔の私みたいなのでホッとしてますがね…。

そんな亭主も亡くなってみれば、急に一人身になった空しさ、寂しさがあり、それなりの愛着も残りましたが、五年も経てば良いことも悪いこともヴェールがかかって薄れてしまうのと、娘や孫がいたもんですから気がまぎれてたんですね。

太っているって云われた最初は腹が立って、離婚を考えなかったわけじゃありませんでした。しかし正直言って離婚して生活して行ける自信がありませんでした。母子家庭として生活保護を受けるなんていやでしたから。それにデブデブコールだってのべつ幕なしに云われているわけでもなく、晩酌が過ぎたときくらいだから、聞き流していれば済むことだし、暴力を振るうわけでもないし、この人はデブデブと云ってれば気が済んでいるんだと分かって来ました。カアちゃんって云う代わりにデブって呼んで甘えてるんだと思えばいいんだと思いましたら気にもならなくなりました。むしろ亭主が私に抱いていた気持がうっすら見えてきたようで、かえって楽しいくらいでした。夫婦なんて外から見たって分かりませんよ。

うちの亭主がどうしてデブデブってしつこく絡んだのか、今になって思いつきましたが、これだとて亭主に聞いた訳でもなく、当時の言動から、そうなのではないかと思ったわけですが……。亭主が生きている時は、馬耳東風と聞き流していましたが、亡くなった今では、夜中にふと目覚めたりすると、考えるとも無く浮かんでくるのです。

亭主は私をマドンナにして置きたかったのではなかったのかと……。

マドンナってダビンチの肖像画で有名ですが、それではなくて夏目漱石の「坊ちゃん」に出てくるでしょう。教頭の赤シャツがひそかに想いを寄せていた芸者を、キザっぽく英語名で呼んだりしていたけど、赤シャツが勝手に描いた理想像に、現実の女性をあてはめ悦に入っていたってことらしいですが…。

うちの亭主もそれらしいんです。あの赤シャツの気持を思えば、あのデブデブ呼ばわりもなんか納得がいくようで…。

亭主の描いたマドンナ像を実現してみるためには、自分の手元に自分の思うようになる実物が必要です。それを結婚を機にやってみようと思ったのでしょう。偶々私がその対象に都合よく合致していたってことなんじゃないかと思いますよ。

結婚して暫くは、と云うよりも身ごもるまでのほぼ一年程は亭主の思うように進んでいたんでしょう。随分優しくしてくれました。身ごもって少し体型が変わって来ても、子供を産んだら元に戻るだろうと亭主の対応は変わりませんでしたが、生んで一段落してからです。わたしの体型はどっしり形になったきり元に戻りませんでした。それからです。チクチク始まりました。

尤も亭主にしたら思い描いたマドンナどころか、私がその辺のお上さんに見えてきたのでしょう。そりゃそうです。家事をし、所構わず胸をはだけて娘に乳を飲ませ、おしめを替え、添え乳をして子供を寝かせながらウトウトしてしまったりする子育て、おしめも昔のことですから布おしめでした。毎日洗濯し、畳んでと結構な仕事量です。従って碌にお化粧もしないし、お洒落もしない。恋人同士のように出掛けるわけでもない。そんな現実に直面して、亭主の夢は段々壊れて行くんですもの、それがストレスになって、無いものねだりのように攻撃対象が一番手近な私になってきて、デブデブコールが始まったようです。

うちの亭主は余りに純粋過ぎたのでしょう。純粋培養したものは雑菌に弱いと云われていますが、うちの亭主は余りに綺麗な夢を抱いたために破れた反動が大きかったのでしょう。

マドンナにはマドンナらしくして欲しい。それにはマドンナを手中で育てれば思うようになるからとそんなヴァーチャルなことも可能と思ったことが、私の場合太ったことが亭主の夢を壊してしまったのです。

男の人ってどうしてあんな本当に夢物語みたいなことを真面目に考えるのでしょうね。夢をもつのが悪いってことじゃなく、ホント、ドン・キホーテの物語を目の前に見ているようです。

マドンナってのはひっそりと心の奥に秘めておくものなんでしょう。丁度骨董市で偶々手に入れた掘り出しもののように、他人には内緒で優越感に浸り、独りニヤニヤしているように…。ある意味ではモノマニアックなものだと思います。

そりゃ、「カアさん」呼ばわりされて下にもおかない程大事にされ優しくされたら、少々薄気味悪いけど、悪い気はしませんよ。しかし現実を超えた所謂作られた世界に住むことになるわけで、祭り上げられた本人にしてみれば、そんな非現実の世界に住まわされては頭がおかしくなってしまいます。迷惑な話なんです。でもうちの亭主は私にデブデブと発散していたからよかったものの、若しあれが内向していたとしたら大変だったと思います。

人生って色々あるもんなんですね……。

うちの亭主は夢を追っていました。

勤めていた時十年程コンピュータ業務に従事していました。定年退職した時はアメリカのコモドール、タンディ、アップル等の各社からベーシック言語を用いたパーソナル・コン

ピュータが出始めた頃で、コモドールを一台入手して使い易さに驚き、販売をと考え退職金を資金にして起業しましたが、当時としては時代の先端を走っていましたから、各企業が関心を持つ環境ではなかった。小学生を相手に、大学の知識を教えようとしていたようなものですから、商売になる筈もなかったんですね。十年早かったってことが分からなかったんです。商売というものが分からなかったので悪戦苦闘の末亡くなってしまいました。

実はこのお掃除の仕事も今週一杯でおわりなのです。お掃除は市役所が三年ごとに入札で業者を決めることになっていて、今回の入札で私の会社が負けてしまい、二十数年の実績がありながら今週一杯で終わりとなってしまいました。従って「あの方」とも逢えなくなってしまうのです。廊下での一、二分のやりとりが楽しくて、たいして永い付き合いでもないのに、何となく心に残っています。

文芸評論　入選

復元・『悲しき玩具』～啄木の編集意図からの考察～

水関　清

第一章　はじめに

その名を後世に残す『一握の砂』の巻頭を飾る、宮崎大四郎と金田一京助に対する献辞の後に、啄木はこう書き記した。

「明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相邇（ちか）きをたづねて仮にわかてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の紀念なり。」

素直に読めば『一握の砂』という歌集は、①明治四十一年から二年余の間に詠んだ歌の中から半分を選び、感興の催すままに五章に分けたものであるが、②「秋風のこころよさに」だけは明治四十一年秋の記念である、ということになる。

当初の一行書きを三行書きに改め、四首単位で歌意を集約し、さらには章頭歌と章末歌の呼応を考えた配列にすることなど、この歌集の中に張り巡らされた巧緻な編集の存在を考えれば、この啄木の言葉は、韜晦が過ぎると思われる。さらに、こうした啄木渾身の歌集編纂の跡を、啄木の「推敲」という観点から総合的に検討すると、啄木が意匠を凝らした編集の妙がより一層明らかとなる。

念願であった第一歌集『一握の砂』刊行後、啄木は第二歌集を構想し、『一握の砂以後（明治四十三年十一月末より）』と題した「中判ノート」をあつらえた。しかしながら、その後の体調悪化などのために果たせず、啄木晩年最大の理解者である土岐哀果が、啄木の遺志を受けて東雲堂から出版したのが、『悲しき玩具』である。冒頭に、啄木の死後発見された最晩年の歌を置き、「中判ノート」に書きつけられた歌群を記載順に編集したものとされてきた。

この状況に一石を投じたのが、啄木の「推敲」に焦点をあてた、大室精一の一連の研究である（「『一握の砂』における推敲の法則」佐野短期大学紀要、二〇一二年）。それによると、『一握の砂』における啄木の推敲は、㈠助詞の付加や訓読みへの変換などによる、定型から「字余り」への改変、㈡「五七五七七」を構成する定型句を自在に切断して次の句につなげるなどの、「句」から「行」への改変、そして、㈢各首の配列を自在に構成していく中で歌意を集約する、の三点に要約されるという。

啄木自らが編集した第一歌集である『一握の砂』で採られ

た推敲方針が、啄木の死後に編集された第二歌集である『悲しき玩具』の場合にも堅持されたと仮定すると、啄木の第二歌集にかけた意気込みを、ある程度まで再現し得ると考えられる。

本稿では、「中判ノート」・『一握の砂以後（明治四十三年十一月末より）』と、寄稿などによって関連する諸雑誌等の掲載歌とを比較して、先の推敲方針によって改変された後の歌群を、啄木が意図した第二歌集収載歌と仮定することで、『悲しき玩具』の復元を試みたので、文献的考察を加えた上で報告する。

第二章　哀果・編　東雲堂版『悲しき玩具』と啄木の「中版ノート」・『一握の砂以後（明治四十三年十一月末より）』

岩城之徳によれば、東雲堂版『悲しき玩具』と、啄木の遺稿である「中判ノート」・『一握の砂以後（明治四十三年十一月末より）』（以下、「中判ノート」と略記する）との間には、冒頭二首の増補をふくめ、五十七首七十七箇所にわたる、句読点その他の異同があるという（「石川啄木伝」　東宝書房、一九五五年）。さらに近藤典彦によると、「寝る」と「寐る」の十八箇所にわたる混同、十二箇所にわたるルビの誤りがあり、さらに決定的なのは、本来なら巻末に来るべき二首を巻頭に置いたことにともなう、啄木の編集方針からの逸脱があるという。その結果、啄木の歌論から採った『悲しき玩具』を啄木の第二歌集の題名としたことと相俟って、啄木の抱いていた編集意図から大きく逸れてしまったことを指摘している（「復元　啄木新歌集」　桜出版、二〇一二年）。

以上の経緯をふまえて、今回の検討対象となり得るテキストについて考えてみたい。現在閲覧可能な、『一握の砂以後（明治四十三年十一月末より）』原本からの復刻ノートとして、『肉筆版　悲しき玩具』（書物展望社、一九三六年）、および『悲しき玩具　直筆ノート』（盛岡啄木会、一九七四年）のふたつがある。前者には複写上の不備などが多いとされ、後者の復刻テキストを、今回の検討対象とした。

『悲しき玩具　直筆ノート』の外形は、最後の歌が記載されている頁までで五二葉、それに続く余白が一二葉、合わせて六四葉の薄いものである。中をみると、見開き左側の頁には三行書きの歌が四首ずつ記入されており、各首の冒頭にあたる部分（表示上は、短歌本体の右側の行）には、一首ずつ〇印が付されている。さらに〇印の中央には、点が付されているものと、そうでないものとがある。付された点の色には、黒・朱・青の三種類があり、中央に点が付されていないものとあわせると、計四種類の〇印が混在していることになる。歌が記入されている左側と向かい合う、見開き右側の頁は、すべて空白となっており、後日の編集用に設けたものと思われる。

以上のような型式からみて、この「中判ノート」は、単に歌稿を集めただけのものでなく、諸雑誌に掲載済みの作品を

推敲して一定の決定稿としたものや、逆に諸雑誌に投稿する前の段階で推敲中の歌稿などを収載するための、多彩な役割を担う存在であったと思われる。

藤沢全は、「啄木哀果とその時代」（桜楓社、一九八三年）の中で、形式論の立場から「中判ノート」に対する体系的な考察を行い、その記入状況は、以下の五段階が想定されるという。なお、〇〇〇番歌という番号表示は、東雲堂版『悲しき玩具』収載歌の掲載順に沿ったものである。

第一段階　（三～六八番歌）
第二段階・前期　（六九～九八番歌）
第二段階・後期　（九九～一一四番歌）
第三段階　（一一五～一三〇番歌）
第四段階　（一三一～一七七番歌）
第五段階　（一七八～一九四番歌）

念願であった第一歌集『一握の砂』刊行後、啄木は第二歌集を構想し、『一握の砂以後（明治四十三年十一月末より）』と題した「中判ノート」をあつらえた。日本近代文学館所蔵のノート原本は、一八四葉の分厚いものであり、本研究の基本テキストとした『悲しき玩具　直筆ノート』の三倍近い厚さがあり、左側頁に四首ずつ書きつけると仮定して、約七〇〇首の記載が可能である。それほどの意気込みでとりかかった第二歌集にかけた啄木の編集意図をうかがうカギは、「中判ノート」収載歌と雑誌掲載歌とを詳細に突合せ、啄木の推敲の跡をたどることにあると思われる。

第三章　『一握の砂』における啄木の推敲意図

藤沢のいう「五段階記入説」が明らかにしたように、各段階において、「中判ノート」と諸雑誌等掲載歌のどちらが推敲後の決定稿であるかの推定は、複雑である。しかしながら、第一段階（三～六八番歌）をみるかぎり、雑誌「秀才文壇」「早稲田文学」「創作」「精神修養」「曠野」、「東京朝日新聞」に掲載済みの作品に、「中判ノート」に記入された未寄稿歌を適宜挿入することを基本に、ほぼ発表順に浄書したものとなっており、『一握の砂』における編集を連想させる。

何故啄木は、『一握の砂』において、このような精緻な編集を行ったのだろうか。次にこの問題について考えてみたい。『一握の砂』編纂と前後して発表された歌論である「一利己主義者と友人との対話」の中で、啄木は以下のように語っている。作中の「A」は啄木自身、「B」のモデルは、啄木の親友・並木武雄である。（大意要約）

B　相不変（あいかわらず）歌を作ってるじゃないか。（中略）そうそう、君は何日（いつ）か短歌が滅びるとおれに言ったことがあるね。この頃その短歌滅亡論という奴が流行って来たじゃないか。

A　近頃の歌は何首或（あるい）は何十首を、一首一首引き抜いて見ないで全体として見るような傾向になって来た。

そんなら何故それらを初めから一つとして現さないか。一一分解して現す必要が何処にあるか、とあれに書いてあったね。一応尤もに聞えるよ。しかしあの理窟に服従すると、人間は皆死ぬ間際まで待たなければ何も書けなくなるよ。歌は――文学は作家の個人性の表現だということを狭く解釈してるんだからね。仮に今夜なら今夜のおれの頭の調子を歌うにしてもだね。なるほどひと晩のことだから一つに纏めて現した方が都合は可いかも知れないが、一時間は六十分で、一分は六十秒だよ。連続はしているが初めから全体になっているのではない。きれぎれに頭に浮んで来る感じを後から後からときれぎれに歌ったって何も差支えがないじゃないか。一つに纏める必要が何処にあると言いたくなるね。

（中略）

B　しかしとにかく今の我々の言葉が五とか七とかいう調子を失ってるのは事実じゃないか。

A　とはいうものの、五と七がだんだん乱れて来てるのは事実だね。五が六に延び、七が八に延びている。そんならそれで歌にも字あまりを使えば済むことだ。自分が今まで勝手に古い言葉を使って来ていて、今になって不便だもないじゃないか。なるべく現代の言葉に近い言葉を使って、それで三十一字に纏（まとま）りかねたら字あまりにするさ。

B　それもそうだね。

A　のみならず、五も七も更に二とか三とか四とかにまだまだ分解することが出来る。歌の調子はまだまだ複雑になり得る余地がある。昔は何日（いつ）の間にか五七五、七七と二行に書くことになっていたのを、明治になってから一本に書くことになった。今度はあれを壊（こわ）すんだね。歌には一首一首各（おのおの）異った調子がある筈だから、一首一首別なわけ方で何行かに書くことにするんだね。

B　そうすると歌の前途はなかなか多望なことになるなあ。

A　人は歌の形は小さくて不便だというが、おれは小さいから却（かえ）って便利だと思っている。そうじゃないか。人は誰でも、その時が過ぎてしまえば間もなく忘れるような、乃至は長く忘れずにいるにしても、それを言い出すには余り接穂（つぎほ）がなくてとうとう一生言い出さずにしまうというような、内から外からの数限りなき感じを、後から後からと常に経験している。多くの人はそれを軽蔑しないまでも殆ど無関心にエスケープしている。しかしいのちを愛する者はそれを軽蔑することが出来ない。

B　待てよ。ああそうか。一分は六十秒なりの論法だね。

A　そうさ。一生に二度とは帰って来ないいのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらない歌が一

番便利なのだ。実際便利だからね。歌という詩形を持ってるということは、我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。（間）おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。

日々の暮らしの中で、二度と帰ってこない折々を愛惜する心を、短歌の備えている短詩型という身軽さを武器にして掬い上げて文字という形で定着させることを重視し、珍味や御馳走ではない、香の物のような、日々の食卓に欠かせない存在としての短歌。これが、啄木の短歌観の核心であることを余すところなく語っているが、注目したいのは、以下の発言である。

「なるべく現代の言葉に近い言葉を使って、それで三十一字に纏（まとま）りかねたら字あまりにする。」

「のみならず、五も七も更に二とか三とか四とかにまだまだ分解することが出来る。」

「昔は何日（いつ）の間にか五七五、七七と二行に書くことになっていたのを、明治になってから一本に書くことになった。今度はあれを壊（こわ）すんだね。」

「歌には一首一首各（おのおの）異った調子がある筈だから、一首一首別なわけ方で何行かに書くことにするんだね。」

ここには、題材こそ身近な暮らしにとるものの、題材とその背後に潜む微妙な自意識を貼り付けて、セットにして表現することで、「切れ切れの生活断片」を、「明晰かつ繊細な心の索引」とすることに、『一握の砂』の実践を通して果たし得たという、啄木の高揚感が漂っている。

生活の細部を見つめる中で得られた歌の題材を、「明晰かつ繊細な心の索引」とするために、啄木が心を砕いたのは、「推敲」である。詠出時には定型で発想された表現が、助詞の付加やヨミの変更などの手段によって「字余り」に変わり、句の途中での改行などによって「歌のしらべを『句』から『句またがりの行』に推移」させ、三行書きという書式によって「歌の読み方」を指定する。そのように推敲された一首ずつを、見開き二頁に四首ずつ配置するばかりではなく、各章の冒頭には二首を置く一方で章末には一首しか置かないことで、章頭歌と章末歌を響き合わせ、章における歌意を深く、厚みをもたせる配列など、自在に構成していく中で、自らの歌意を歌集のすみずみにまで行きわたらせようとしたのである。

「字余り化」「定型句の切断と行への改変」は、上記「一利己主義者と友人との対話」の中の「なるべく現代の言葉に近い言葉を使って」「五も七も更に二とか三とか四とかにまだまだ分解」し、一首ごとに「異った調子がある筈だから、一首一首別なわけ方で何行かに書く」という主張に見事に符合している。「定形からの離脱」を意図した啄木の推敲の基盤には、「一生に二度とは帰って来ないいのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すに

は、形が小さくて、手間暇のいらない歌が一番便利なのだ。」という啄木が自らの歌論を堅実に実践しようという、明快な姿勢がうかがえるのである。

第四章　啄木の推敲意図からみた「中判ノート」と諸雑誌掲載歌の関連性

啄木自らが編集した第一歌集である『一握の砂』で採られた推敲方針が、「中判ノート」においても踏襲されたと仮定すると、「中判ノート」原稿の詳細な点検を通して、関連諸雑誌掲載歌との異同を探り、その推敲の痕跡を探すことは、啄木の推敲意図を推測する上で重要である。

第二章で述べたように、見開き左側の頁には三行書きの歌が四首ずつ記入されており、各首の冒頭にあたる部分(表示上は、短歌本体の右側の行)には一首ずつ○印が付されており、さらに、第一段階、第二段階・前期、第三段階、第四段階の○印には、黒・朱・青の中点が入っている。具体的には、第一段階(三～六八番歌)の歌に付された中点の色はすべて黒色、第二段階・前期（六九～九八番歌)のそれらはすべて朱色、第三段階(一一五～一三〇番歌)のそれらは青色で、第四段階は、冒頭の一三一番歌のみに黒色の中点が入っている。

第一段階と第二段階・前期の歌群を例にとると、諸雑誌掲載歌にのみ黒や朱の中点が付されており、「中判ノート」のみに収載され、諸雑誌への未寄稿歌には付されていない。このことから「中判ノート」における中点の色の意味を考えてみると、それは「推敲の有無」と考えられる。すなわち、第一段階にみられる、黒色の中点は**「中判ノート」掲載歌が推敲後**であることを示し、第二段階・前期にみられる、朱色の中点は**諸雑誌掲載歌が推敲後**であることを示すと推察される。また、第二段階・後期の歌群に中点の色が付されていないのは、これらが、推敲後すべて「創作」に寄稿されており、推敲の前後である備忘を付す必要性がなかったためであると思われる。

やや難解なのは、第三段階である。「精神修養」初出歌には「青」、「中判ノート」を推敲後「新日本」に寄稿した歌には「黒」の中点を付すことを基本としているが、一部に例外もある。例えば、「精神修養」寄稿後、「中判ノート」で推敲し、「新日本」に再寄稿した一一五番歌の中点の色は「青」である。さらに、「中判ノート」初出歌の色も「黒」である。また、一一九番歌には「黒」の中点が付されているが、以下の示すような特異な推敲の跡を示している。

(a)「精神修養」限りなき心ぼそさよ!/目をとぢて胸の痛みをこらへてある日!

(b)「中判ノート」■廻診の医者の遅さよ!/痛みある胸に手をおきて/かたく眼をとづ。

(c)「新日本」回診の医者の遅さよ!/■痛みある胸に手をおきて、/■かたく眼を閉づ。

従来から、(a)は(b)(c)の推敲前の歌とされてきたが、

その歌意を比べてみると、疑問が残る。すなわち、病状が好転しないことによる将来への心細さを詠んだ(a)と、胸の痛みを何とかしてくれないだろうか、という医師の治療に対する願いの表明の場としての回診の遅れの嘆きを詠んだ(b)(c)との差異である。このような疑問を背景に、中点の色が「黒」であることから、「精神修養」寄稿歌は「中判ノート」から「新日本」への再寄稿歌とは別歌である可能性も指摘されている(大室精一　『悲しき玩具』歌稿ノートの中点　佐野短期大学研究紀要　二〇〇九年)。ほかにも、「句」から「行」への改変が見られる一一六番歌、「句」の改編がある一二八番歌・一二一番歌、そして一二〇番歌でも、そうした疑問が浮かぶが、中点の色はいずれも青であり、一一九番歌の黒とは異なっている。

以上、第三段階での推敲と中点の色の意味を考えると、「新日本」への再寄稿の有無にかかわらず「精神修養」初出歌を「青」とし、「中判ノート」初出歌は、「新日本」への寄稿の有無にかかわらず「黒」としたものと推測される。したがって、「精神修養」初出歌については、**「中判ノート」収載歌が推敲後**、「中判ノート」初出歌を除く、それ以外の歌群は**「新日本」掲載歌が推敲後**、と考えられる。

第四段階は、「新日本」「文章世界」「層雲」掲載歌からなるが、おおむね詠出順になっている。「新日本」寄稿歌には、句読点やダッシュの付加という、基本的な啄木推敲の跡のほか、連続する五組の歌群を配置した上で、それぞれの歌群をつなぐ歌を追加するという、『一握の砂』でみられたような、配列構成の吟味の跡がうかがわれる。以上のことから、**諸雑誌掲載歌が推敲後**と考えられる。

第五段階は、「詩歌」掲載歌となる。句読点やダッシュの付加という、基本的な啄木推敲の跡を別とすれば、歌順の入れ替えは限定的であるものの、**諸雑誌掲載歌が推敲後**と考えられる。

第六段階の啄木の絶唱は、死後発見されたものであり、推敲の有無は判断できない性質のものである。

以上のような手順で、「中判ノート」と関連諸雑誌に掲載された歌群の内容を十分に吟味することで、定型からの離脱を目指した推敲の有無を探り、あわせて中点の色区分についても検討することで、どちらの収載歌が、啄木自らの推敲後とするかの立場から、筆者は、藤沢のいう「五段階記入説」の修正を試みた。各段階の要約を以下に示す。

第一段階　(三～六八番歌)　中点の色は「黒」

雑誌「秀才文壇」「早稲田文学」「創作」「精神修養」「曠野」、「東京朝日新聞」に掲載済みの作品に、「中判ノート」に記入された未寄稿歌を適宜挿入することを基本に、ほぼ発表順に浄書したもの。

作歌の時期は、以下の通りである。三～四四番歌が、明治

四三年一一月～同年一二月。四五～五〇番歌が、明治四三年大晦日～明治四四年正月。五一～六八番歌が、明治四四年一月一七日である。

第二段階・前期（六九～九八番歌）中点の色は「朱」

「中判ノート」に記入後、雑誌「コスモス」「早稲田文学」「文章世界」に寄稿された際に推敲を加えたものと、「中判ノート」に記入されたままの未寄稿歌とからなる。

作歌の時期は、以下の通りである。六九～八六番歌が、明治四四年一月二二日から二九日までの間。八七～九八番歌が、明治四四年二月一日から一二日までの間である。

第二段階・後期（九九～一一四番歌）中点の色「なし」

「中判ノート」に記入後推敲を加え、雑誌「創作」に寄稿されたもの。

作歌の時期は、明治四四年二月一九日である。

第三段階（一一五～一三〇番歌）中点の色は「青」と「黒」

雑誌「精神修養」に寄稿後、推敲を加えたもの(うち二首は、雑誌「新日本」への再寄稿歌)と、「中判ノート」に記入後推敲を加えて、雑誌「新日本」に寄稿したもの。さらに、「中判ノート」に記入されたままの未寄稿歌二首とからなる。

作歌の時期は、明治四四年二月二〇日から同年三月一八日までの間である。

第四段階（一三一～一七七番歌）中点の色「黒」、ただし冒頭の一首のみでほかの歌群は、中点の色「なし」

「中判ノート」に記入後推敲を加えて、雑誌「新日本」「文章世界」「層雲」に寄稿したもの。

作歌の時期は、以下の通りである。一三一～一五二番歌が、明治四四年六月七日～一二日までの間。一五三～一六二番歌が、明治四四年六月一二日～一五日までの間。一六三～一七七番歌が、明治四四年六月下旬である。

第五段階（一七八～一九四番歌）中点の色「なし」

「中判ノート」に記入後推敲を加えて、「詩歌」に寄稿したもの。

作歌の時期は、明治四四年八月二一日である。

第六段階（一～二番歌）

土岐哀果からの著書『黄昏に』贈呈に呼応して、いわゆる「白鳥の歌」を原稿用紙に書きつけたもの。

作歌の時期は、明治四五年二月一八日前後と推定される。

「切れ切れの生活断片」と、その背後に潜む微妙な自意識をセットにして表現するために、啄木が求めたのは、従来の

短歌が当然視していた定型からの離脱であった。具体的には、「定型歌の字余り化」「句の分割と行への変換」「多詠出歌の、段階にわたる巧緻な割り付けなどによる、複眼的な歌意の創出」を、綿密な推敲を重ねて編集に結実させるのが、啄木流の歌集編纂である。それは、啄木の健康状態に大きく左右される、骨身を削る作業という側面を有する。その観点から、当時の啄木の健康状態と、上記の六段階の成立時期とを概観してみたい。

第一段階の六六首は、『一握の砂』編纂の疲れは残すものの、ひと通りの社会生活が可能な程度の健康状態が保たれていた時期である。一九首からなる第二段階・前期の後半に、啄木は、結核性腹膜炎のため東大病院に入院する。一六首からなる第二段階・後期は、入院後の処置で、幾分状態が改善していた時期である。第三段階の一六首は、高熱に苦しめられ、病状が切迫していた時期である。第四段階の四六首は、病勢の進行がやや弱まって、束の間の安定を見せていた時期である。第五段階の一七首は、家庭内不和が極限まで募って、作歌意欲が損なわれることになる直前の、一時期である。第六段階は、病状が極まって深刻な時期に、友人からの贈呈歌集にわずかに作歌意欲が起こって、原稿用紙にやっとの思いで書きつけた絶唱の二首である。

各段階における、啄木の推敲の到達度をまとめると、おおむね第二段階までは『一握の砂』で実践された四首単位の再構成を意識した推敲が加えられている。もちろん完全な状態でないことは、啄木が哀果に「中判ノート」の『一握の砂以後』を渡しながら、「原稿はすぐ渡さなくてもいゝのだらうな、訂さなくちゃならないところもある、」と言ったことからも、明らかである。第三段階以降になると、四首単位から、二首・三首・五首などといった、多彩な組み合わせが見られ、それぞれは語意や字句の連想によって結び付けられていることが多い。

関連する諸雑誌の数も、段階がすすむにつれて減少している。すなわち、第一段階では「秀才文壇」「早稲田文学」「精神修養」「曠野」「創作」の五誌プラス東京朝日新聞一紙だったものが、第二段階では「コスモス」「早稲田文学」「文章世界」「創作」の四誌、第三段階では「精神修養」「新日本」の二誌、第四段階では「新日本」「文章世界」「層雲」の三誌、第五段階では「詩歌」の一誌のみになっている。

さらに歌集初出歌の内訳をみても、第一段階一三首、第二段階八首、第三段階二首と漸減し、第四段階で七首と再び増加しているが、これは啄木の病勢の進行がやや弱まって、束の間の安定を見せていた時期と符合しているものと思われる。次章では、「中判ノート」と関連諸雑誌寄稿歌における啄木の推敲の跡をたどることによって、『悲しき玩具』の復元という問題について考えていきたい。

第五章　復元・『悲しき玩具』

「中判ノート」・『一握の砂以後（明治四十三年十一月末より）』には、初出歌(以下、歌集初出歌)が三二首ある。その内訳は、第一段階が一三首、第二段階八首、第三段階二首、第四段階七種、そして第六段階が二首である。復元・『悲しき玩具』を構想するにあたって問題となるのは、それら歌集初出歌の収載箇所である。啄木の推敲が、歌群の配列構成の完成にまで及んでいたと考えられる第一段階（A）と、推敲が部分的で、句読点や疑問符やダッシュの追加、ならびに「句」から「行」への改変などという、定型からの離脱にとどまっている第二段階以降(B)の場合とでは、歌集初出歌の持つ意味が大きく異なるからである。

すなわち、諸雑誌等の掲載歌を推敲して編集し、配列構成を整えるために新たに創作することも含めて、統一的な構成意識をもちつつ歌群の配列を完成させる意図のもとで、歌集初出歌が適宜挿入された（A）の場合は、初出歌を含むすべての歌を再構成することによって、歌群の配列位置によって歌意が開顕されるという、啄木本来の推敲がなされた証左であるという、重要な意味を持つ。これに対して、推敲の途中段階にある(B)の場合には、歌集初出歌は、諸雑誌等への寄稿歌を推敲する中で、引用されることのなかった歌の集まりということになる。換言すれば、(A)は推敲後の統一感がすでに付与された歌群で、(B)は、今後行われるであろう推敲の中で、統一的で適切な挿入箇所を与えられる存在ということになる。

以上のような推論を踏まえて、復元・『悲しき玩具』における歌集初出歌の扱いは、以下のように定めた。上記(A)では、復元・『悲しき玩具』における歌順は、「中判ノート」と同一の収載箇所とし、上記(B)では、まず諸雑誌等で啄木の推敲が一定程度加えられていると推測される歌群を原則として先に置き、歌集初出歌は、推敲済みの歌群の後に置くこととし、その収載順は、「中判ノート」におけるそれにしたがった。ただし、推敲過程が複雑な第三段階の二首についてのみ、発行年が古い「精神修養」とそれが新しい「新日本」の間に、置くことにした。

このような手順をふんだ上で、「ノート歌集」の各段階における啄木の推敲の跡をたどってみたい。まず、第一段階の歌群では、「諸雑誌等掲載歌」を推敲したものが「ノート歌集」である。第二段階以降では、歌集初出歌の持つ性質が第一段階と異なると考えられるため、それら以外の歌群における推敲状況を示すと、以下のようになる。第二段階は、前期・後期とも「中判ノート」を推敲したものが「諸雑誌掲載歌」と推測される。第三段階の歌群の場合はやや複雑で、雑誌「精神修養」に寄稿後、推敲を加えて「中判ノート」に収載した歌群(一部は雑誌「新日本」に再寄稿)と、「中判ノート」を推敲して、雑誌「新日本」に寄稿した歌群とからなる。第四段

階は、「中判ノート」を推敲して、雑誌「新日本」「文章世界」「層雲」に寄稿したものであり、推敲後「詩歌」に寄稿したものが第五段階である。第六段階の二首は、いうまでもなく啄木の死後発見されたもので、推敲の暇はなかったものと思われる。

啄木の推敲が加わったと推定される歌群を、啄木が編集を意図した第二歌集(その後の『悲しき玩具』)収載歌と仮定して、復元を試みた(表)。これを復元・『悲しき玩具』と呼ぶこととしたが、先に述べた歌集初出歌の扱いなどの要因の影響を受けたために、収載歌の順序は、「中判ノート」原本とは微妙に異なる。なお、啄木が推敲対象とした歌群の収載順を論じる場合には、便宜的に「中判ノート」各段階の歌順を用いた。なお、推敲段階が特に複雑な第三段階の「精神修養」掲載歌と、一部の「新日本」掲載歌については、諸雑誌掲載歌と「中判ノート」掲載歌とを並列表示した。

以下、第一段階から順に第五段階までについて考察する。

第一段階 a (三〜一八番歌)

歌集初出歌八首、「秀才文壇」明治四四年一月号(以下、雑誌の発行年はすべて明治四四年のため、発行年を略して発行月のみ示す)初出歌七首、「早稲田文学」一月号初出歌一首(ほかに「秀才文壇」一月号との重出一首)の計一六首からなる。前半の三〜一〇番歌八首のうち、六首が歌集初出歌、二首が「秀才文壇」であるのに対して、後半の一一〜一八番歌八首のうち、五首が「秀才文壇」、二首が歌集初出歌と対照的である。

「秀才文壇」初出歌には「十二月」という総題がつけられ、二首が二行書き表記で、一〇首中七首が「中判ノート」に収載されている。第一段階 a に収載された二行書き表記の一首は、歌集収載時に三行書きに改められたほか、以下の二首は大幅に改稿されている。

「夜おそく渇きおぼえて木の実売る店をたづねに出でゆく心(「秀才文壇」)」
→「咽喉がかわき、/まだ起きている果物屋を探しに行きぬ。/秋の夜ふけに。(「中判ノート」)」

「うつとりと本の挿画にながめ入る安き心を/ひとり嬉しむ(「秀才文壇」)」
→「うつとりと本の挿画に眺め入り/煙草の煙吹きかけてみる。(「中判ノート」)」

「早稲田文学」初出歌には「手のよごれ」という総題がつけられ、一五首中五首が二行書き表記であるが、いずれも歌集収載時に三行書きに改められている。歌集の第一段階 a に二首が採られ、残る一三首は、次の第一段階 b に収載されている。

この歌群では、勤め人の一日が表現されており、三日ごとに繰り返される、深夜の帰宅のあり様をつづった、以下に示

す一五番歌からは、勤め人の哀感が心に迫ってくる。

「二晩おきに夜の一時ごろに切通の坂を上りしも―勤めなればかな。」

銀座の東京朝日新聞社での夜勤を終え、上野広小路までは市電の最終でたどり着くのだが、自宅のある本郷三丁目方面へ向かう、乗り換えの市電はとうに終わっている。目前に伸びているのは、ゆったりとしたS字状の切通坂、左は湯島天満宮。わずかなガス灯の明かり以外は黒々とした闇の中である。坂を上りきれば、右手には本郷警察署。本郷通りを越えて、喜之床の二階の下宿まで、あと一〇分歩くのである。

家にたどり着いた後は、酒の酔いで疲れを癒したのかもしれない。一五番歌に続く一六番歌から一九番歌は、「秀才文壇」(一六、一八番歌)と「早稲田文学」(一六番歌は重出、一七番歌)の掲載歌に、歌集初出歌(一九番歌)をからませ、飲酒にまつわる心の動きが表現されている。詳しく見ていくと、一六番歌「酒のかをりにひたりたる」、一七番歌「酒のめるかな!―酒のめば」と続き、一八番歌の「酔ひを味ふ」という表現で、酒に関する歌をまとめている。

このように、多彩な心情の揺れや動きを、手堅く四首単位でまとめようとした啄木の推敲の跡をたどると、『一握の砂』で発揮された編集手腕が彷彿としてくる。いうまでもなく『一握の砂』は、「我を愛する歌」「煙(一)(二)」「秋風のこころよさに」「忘れがたき人人(一)(二)」「手套を脱ぐ時」という五章を、その真ん中にあたる「秋風のこころよさに」を挟んで、前に二五二首、後ろに二四八首という見事な均衡の中で、頁ごとに二首ずつの三行書き短歌を割り付けることによって、まず四首単位で歌意をまとめ、さらに、各章の巻頭歌と末尾歌を呼応させる中で、章ごとのイメージをふくらませ、ついには歌集の巻頭歌と末尾歌とを遠く響き合わせるという、多段階にわたる巧緻な割り付けと編集を張り巡らせることで、「日々の暮らしを愛惜するなかで、自己の生活を発見する」というモチーフを存分に奏でることの出来る歌群がひしめく、啄木渾身の歌集だからである。

第一段階b　(一九～二四番歌)

歌集初出歌二首と、「手のよごれ」という総題がつけられた「早稲田文学」一月号初出歌のうち、第一段階aに収載された二首を除く、計一三首からなる。

第一段階aにつづいて勤め人の一日が表現されているが、aとは異なり、勤務後の在宅での暮らしのあり様が詠われている。酒を飲むことにまつわる心の動きを表現した一六番から一八番歌に続く一九番歌では、「酔ひのさめたる」と詠い、二〇番歌は、「真夜中の出窓に出でて」と、酔い覚ましの境地を詠んでいる。二三番歌、故郷への思いや、日常生活の積み重ねの中で抱く、ささやかな未来への希望、などが四首単位で詠われている。

第一段階ｃ（三五～四四番歌）

「方角」という総題の「創作」一月号掲載歌八首、「今年も」という総題の「精神修養」一月号掲載歌七首、同じく「今年も」という総題の「曠野」一月号掲載歌八首からなるが、三重出歌が五首、重出歌も三首あるため、総計は一〇首となる。ある雑誌での初出歌が、複数の雑誌に再掲載される過程を経て、句点や読点が付加され、配列位置が動かされて、再構成され、歌群としての表現意図を持つものにする、という啄木お得意の推敲である。「創作」単独掲載歌は、以下の二首のみであり、このグループの末尾に置かれている。いずれも、大晦日から新年を迎える日常の出来事を題材にしているが、「創作」単独掲載歌は、他の歌とやや趣を異にしている。

「人がみな同じ方角に向いて行く。/それを横より見てゐる心。」

「いつまでか、/この見飽きたる懸額を/このまま懸けておくことやらむ。」

第一段階ｄ（四五～五〇番歌）

「このごろ」という総題の「東京朝日新聞」明治四四年一月八日号掲載歌八首中の六首が、このグループである。第一段階ｃの一〇首とをあわせると一六首の歌群になるため、四首ごとにまとめられているが、第一段階ｃの末尾に配された上記の「創作」単独掲載歌二首の前後で、歌境が異なっている。前半では年越しの安堵感が前面に出ている一方で、後半では年越しの労苦の先にある不安感に触れているところが、対照的である。

以下に示す「東京朝日新聞」初出の二首は、「中判ノート」では一首にまとめられ、四首単位の末尾歌という重要な位置に配されている。

「あたらしき瀬戸の火鉢に凭りかゝり眼閉ぢ眼を開け時を惜めり（東京朝日新聞）」

「青塗りの瀬戸の火鉢を撫でゝみぬ心ゆるめる元日の朝（東京朝日新聞）」

→「青塗りの瀬戸の火鉢によりかかり、/眼閉ぢ、眼を開け、/時を惜めり。（「中判ノート」）

特徴的なのは、それまで蓄積した疲労のために、あまり活動的になれない自らに対する焦燥感を、あえて傍観者的視点から詠むことで、大晦日から新年を迎えた日常の中で、激務に疲れた生活の悲哀を確かな表現にかえていることである。

第一段階ｅ（五一～六八番歌）

「都合悪き性格」という総題の「創作」二月号初出歌一六首に、歌集初出歌二首を加えたものであるが、「創作」初出の段階では自由に発想されたために前後の構想を考慮していなかった歌群を、歌集初出歌の挿入や歌の並べ替えなどの方法

を駆使して、再構成が試みられている。

冒頭の大晦日の歌から、元日の歌へと展開し、日常の勤務に戻る勤め人の姿と心情とを類想歌として集約している。「創作」初出の段階では分散していた橘智恵子の歌三首は、これらの勤め人の日々を表わす四首単位のくくりの中に組みこまれている。それに続いて、総題となった「都合悪き性格」にそって、自由な発想のもとに繰り広げた自己分析を、パッチワークのような形で四首にまとめているところには、どこかしら『一握の砂』における「手套を脱ぐ時」の章に通底するところがある。

以上のように第一段階の歌群を通覧すると、諸雑誌等掲載歌を引用した上で、要所に歌集初出歌を配するという構成を行いつつ、歌群をまとめていく中で、構想された歌意を明らかにしていく、という『一握の砂』と同様な推敲を啄木が行っていることが分かるのである。

第二段階・前期a　（六九一～八七番歌）

「二三行なれど」という総題の「コスモス」二月号掲載歌八首と、「机の位置」という総題の「早稲田文学」三月号掲載歌一二首であるが、「早稲田文学」掲載歌のうち一首は、第二段階・前期bから増補されたものであり、「コスモス」の八首はすべて「早稲田文学」と重出であるため、歌集初出歌八首とあわせた実数は二一首となる。これらの作歌時期は、啄木が入院する直前にあたる、明治四四年一月二二日から二九日の作であり、体調不良を自覚しつつも、多忙な日常の中で、まだまだ活発な活動を行っていた頃にあたる。

読点や疑問符またはダッシュの付加、ならびに朱色の中点が各首の冒頭にあるという、啄木の推敲の跡が確認できることから考えて、「コスモス」「早稲田文学」の掲載歌が、推敲後と考えられる。入院前夜の体調不良を自覚する中、暮らしの中で心をよぎるさまざまなことを、手堅く掬い上げて配列したことがうかがわれる。題材は、「待ち人のなかなか来ない切なさ」「空を仰ぐという習慣を忘れそうな都市生活の窮屈さ」「自らの場当たり的な虚言癖の反省」「自宅における父親(啄木のこと)の挙措を、子どもらしい目でとらえる娘(京子のこと)の愛らしさ」など、多岐にわたる。これらの掲載歌の中に、八首にのぼる歌集初出歌を、どう組み込んでいこうとしたのか興味をそそられるが、それは、その後の啄木の体調悪化などのためか、第二段階・前半bのような再構成が果たされていないのは残念である。

第二段階・前期b　（八八一～九八番歌）

「病院の夜」という総題の「文章世界」三月号掲載歌からなるこの歌群は、啄木の入院前夜である明治四四年二月一日から、東大病院入院中の二月一二日までの作である。入院後に、腹腔に貯留した腹水を排除するために穿刺排液という治

療が行われた後の小康状態にある時期に詠まれたものである。題材は入院後の出来事に採られており、「入院前夜からの緊張が、入院当日の夜になって思いがけず緩んで行ったこと」「診察時の医師とのやりとり」「同室者のたたずまい」「病院の中からのぞく外の世界」など、多彩である。入院という緊張を強いられる状態の中で診察を受け、治療行為の一環とはいえ腹部に針を刺されて管を入れられ、病棟の同室者の動向にも神経をとがらせたりと、入院生活にまつわる心情は、いずれも非日常性が高いものである。そこに、病院の窓から見える外の世界で働く巡査の姿をはさみ、窓から見上げる空の高さを詠い、その一角に煙草を吸う自らの姿もしっかりと詠みこんで、外の世界の日常性を対比させるなど、啄木ならではの巧緻な編集の跡がうかがえる。

第二段階・後期（九九一～一四番歌）

この一六首からなる歌群も、入院中の時期である明治四四年二月一九日の作である。「寝台の上より」という総題の「創作」三月号に掲載するにあたって、本来なら第二段階ａとｂに収載されるべき時期の歌が、各一首増補された結果、「寝台の上より」は一八首構成となっている。

腹水が貯留していたために体動は困難で、寝台での臥床を余儀なくされた啄木の脳裏には、さまざまの思いが湧き上がっては消えていく。父母のこと、妻子のこと、友人のこと。神童ともてはやされた少年時代からはじまり、文学と恋のために一身をなげうって、ときには周辺を顧みず、まっしぐらに自らの夢を追い求めた自分の姿を客観視すると見えてくる、もう一つの自分の姿。終日そうした思いを巡らす寝台の枕頭に巡回してくる看護婦たちのたたずまい。入院中の自らを苛む悲哀感の中で窓外を望めば、路上を歩く人々の姿があり、その視線の先の街々で繰り広げられる世事を、新聞を読むことなどで、遠く聞く毎日。

これらが淡々と詠まれているのである。

第三段階（一一五～一三〇番歌）

（註：「新日本」収載歌は、第三段階と次の第四段階の中で、一体となって推敲されているため、付表には、第四段階収載歌である一三一～一五二番歌についても一括して表示した。）

この段階の一六首は、明治四四年二月一九日から三月一八日の間に詠まれたものである。この期間、啄木は病院に入院中であったが、特に二月二五日からの約十日間は連日の高熱に苦しめられていた時期である。三月一五日に退院しているため、詠出時期は入院中と退院後が各八首ということになる。入院加療後の完全な体調回復を願い、会社勤めと自らの文学立志の充実拡充を考えていたであろう啄木の苦衷が最もよく表現されているのが、この第三段階の歌群である。

入院中に詠まれた、「病中十首」という総題の「精神修養」

四月号掲載歌十首に、退院後間もなくの時期に詠まれた、「やまひの後」という総題の「新日本」七月号掲載歌二十六首の中から七首（うち三首は「精神修養」掲載歌を推敲後、再寄稿したもの）を加え、ほかに歌集初出歌二首が含まれる。その成立段階は、つぎのように推測される。当初は、「精神修養」四月号掲載歌に歌集初出歌二首を加えた一二首で収載されていたものに、再寄稿歌三首を含む「新日本」掲載歌四首が加わった結果、この第三段階・一六首における啄木の推敲の最終形態は、二首の歌集初出歌を除けば、「精神修養」掲載歌七首と、「新日本」掲載歌七首になったと考えられる。なお、「中判ノート」ではこの段階から、三行書きの行頭を一行または二行にわたって一字下げるという、これまでになかった新しい表記の形が始められていることも目をひく（以下、一字下げの箇所は■で示す）。

なかなか回復しないばかりか、高熱に苦吟するという、思わざる体調不良に直面する日々にあっても、啄木の「短歌の備えている短詩型という身軽さを武器にして、二度とは帰って来ないいのちの一秒を、文字で定着させる」という意識は健在である。医師のひと言に神経をとがらせ、脈をとる看護婦の手の冷たさやふるえにも目を配る。病院の廊下の長さに自らを励まして起きてはみるが、すぐにまた横になりたくなる。熱が高くなってからは、意識はついつい氷嚢に集まる。そんな日々の中で、病院の庭に咲いていたであろうチューリップが目に留まった一瞬に、以下の歌が詠まれたのである。

「起きてみて、／また直ぐ寝たくなる時の／力なき眼に愛でしチュリップ！」

退院後の暮らしの中で自覚する体力の衰えも、啄木ならではの表現で詠う。カラフルなサラダの盛り付けに食欲がそそられたものの、いざ箸をとってみても、なかなか食は進まなかったであろう。

「あたらしきサラドの色の／■うれしさに、／箸とりあげて見は見つれども—」

この第三段階の歌は、高熱に苦しんだ入院中から、退院後の療養生活に至る経過の中で詠まれており、推敲過程も入り組み、行頭を一文字下げるという新しい表記が導入された時期である。体調不良の中に沈潜しがちであってしかるべき啄木の思考であるが、想いを核としつつも、外界の事物をあわせて詠みこむことで、「切れ切れの生活断片」に「いのち」を与える推敲をしているのである。

第四段階　（一三一～一七七番歌）

第三段階で触れた「新日本」掲載歌のうち、残る十四首は、この第四段階収載歌となるが、「新日本」掲載の時点で、第三段階収載歌七首を加えて綿密な推敲が加えられている。連続する五組の歌群を配置した上で、それぞれの歌群をつなぐ歌を配置するという、『一握の砂』でみられたような、配列構成

の吟味がなされた結果、入院時から在宅療養に移った約四か月間での出来事を、類想歌を連ねる形式で編集されている。

「新日本」に続く掲載歌は、「五歳の子」という総題の「文章世界」と、「或る日の歌」という総題の「層雲」掲載歌であり、おおむね詠出時期に従った順序になっている。前者は、父親の入院中に目に見えて伸びた背丈に目を見張り、自我が顔を見せる姿に目を細め、時にはおもちゃを捨てて父親になつき、大声で唄を歌えばこれを褒め、町の往来に興味を示す、吾が子の成長してゆく姿を描写して余すところがない。後者は、病を養う喜之床での暮らしを、五首―二首―二首―二首という類歌連想の方式で配列されている。そのために、名歌の誉れ高い以下の「中判ノート」掲載歌が削除されていることを留意しておきたい。

「閑古鳥！/■渋民村の山荘をめぐる林の/■あかつきなつかし。」

「放たれし女のごとく、／わが妻の振舞ふ日なり。/■ダリヤを見入る。」

この時期、啄木の病状はやや落ち着き、詩集「呼子と口笛」を編むなど、文筆活動にも改善の兆しが見えていた時期である。第二～第四段階にわたる、「新日本」掲載歌の推敲などは、その証左であろう。

第五段階　（一七八～一九四番歌）

「猫を飼はば」という総題の「詩歌」掲載歌からなる作歌時期は、啄木の体調が下り坂であった、明治四四年八月二一日である。推敲の跡をたどってみると、句読点やダッシュの付加という基本的なものに加え、冒頭から一一首目以降の五首で大きな改変がなされていることに気づく。

「友の情けの為替」の到着を「いもうとの眼」が憐れみ、「電燈の玉のぬくもり」に秋の到来を予感し、叱られて寐てしまった子どもの枕辺に人形を置く。

この改変でもまた、類歌連想の編集方式がとられている。

第六章　まとめ

啄木の生涯のうち、二十四年間をまとめたのが『一握の砂』なら、『悲しき玩具』は、明治四三年一一月から四四年八月までの九カ月弱の暮らしが反映されたものであるが、その詠唱の対象とした領域は、きわめて広い。通勤や残業などの勤め人の日常、勤務から解放された後の家庭での生活、結核性腹膜炎という病に倒れた後の病院での暮らし、自らの症状、医療労働者としての医師や看護婦の日常、数え年が五歳になる娘・京子を見つめる父親の眼差し、妻や母との葛藤など、従来の短歌が対象としなかった領域を次々に取り込んだのである。

今回、啄木の推敲の跡を手掛かりに、推敲後の作品によって『悲しき玩具』の復元を図ってみると、そのことがより一

層明瞭となった。『悲しき玩具』は、『一握の砂』が目指した「中年の歌」の領域を、確実に広げたのである。

選評

安東　璋二

小説は11篇。意欲的な作品が多く好感を持ったが、内容的には前年上位の作者の作品に筆力で上回るものが揃った。

最も印象に残ったのは**畠田実里「鎮魂歌」**。入選歴十分の作者だが、今作はとりわけ中味の濃い語り口の工夫が目についた。

冒頭出稼ぎに出ようとする父に不満の母が、もう帰ってこなくていい！と怒鳴った一言が引き金のように、出稼ぎ先で父が不慮の死に巻きこまれ、母が衝撃と失意の日々を送るという少年時のわたしの回想から始まる話は、そこから辿られる父の謎の多い生や母との葛藤のなりゆきが興味深い。父の生の謎は父の郷里に同行した姉の言葉や、母の死後取りよせた父の戸籍謄本などで段階的に明かされ、後半母の郷里の叔父の話でほぼ明らかになる。

早く郷里を出て働き、治安維持法やタコ部屋など時代の影に脅かされて逃げるように下海岸の母の実家に住みつき、聟に入って母と苦労を重ねるという両親の複雑な生のなりゆきを、わたしの視点に姉や叔父の語りを入れる苦心の構成で、人称の出入りなどいささかまぎらわしいが、かぎられた紙幅で首尾よく一篇にまとめあげた筆力と構成力に感心した。数奇な両親の生の鎮魂歌というテーマも、真率に心に残る。

日高光「雛人形たちの記憶」。中年で待望の女児が生まれた高校教師の家庭。四ヶ月の赤ん坊の家に飾られた雛人形たちの目を中心に家庭の一年後五年後から十年後を描く。雛壇の中で三人官女を紫式部、清少納言、和泉式部、左右の大臣に菅原道真、藤原時平と平安時代の有名人を特に見立てて描く。いささか都合のいい見立てだが、人物の歴史的な興味を活かして話に奥行きと変化を与えている。一家は赤ん坊の成長と共にアパートから一戸建てに移るが十年後、雛壇もない狭いアパートで一家の破局を唐突に描いて終わる。家庭の平和の象徴であるはずの雛人形と一家の現実の皮肉な対照を描いた一篇は、パターン的な図柄ではあるが、歴史的な趣向をうまく取りこみ、ちょっと辛口のファンタジーとして面白く仕上がっている。

髙橋剛治「煌（きら）めきの『Zボーイズ』」。熱烈なボクシングファンだった高校三年の時間と、定年退職で妻と函館の実家に戻り、その時間を追想している主人公の現在の時間を交互に描く。Zボーイズは当時バンタム級の世界王者を争った二人のボクサーのこと。その世界注目の一戦が高校三年時の春、それに絡む僕の青春の思いが語られる、とはいえ日本選手が絡まないその世紀の一戦はテレビ中継もなく一般的な話題の記憶もない。それだけに興味深く読める。作品はボクシング部がなく相撲部で活躍した高校時代から、ボクシング部に入った大学入学の春まで現在の時間と並行して進むが、作品のモチーフは主人公が追想する「あの夏の希望と憧れ、溢れる思い」だ

ろう。世界王者が乱立するボクシング界の現状だけに、作者のボクシング愛と知識には時代への喚起力と郷愁があるが、その溢れる思いが小説的な趣向にまで至らないのが惜しまれる。

上記三作を入選としたが、**佐々木文彦**「**バザーの日**」も心に残った。メンタルクリニックで精神障害者などを対象とするらしいＮＰＯ法人の年に一度のバザーの日を、メンバーの一人の視点で描く。社会復帰のための作業療法でメンバーが店員をしている会場の喫茶店に、ケースワーカーやまかないのおばちゃん、ヘルパーグループなど共同作業の関係者が集まって開業の準備から順調にバザーが終業し、メンバーが慰労のカラオケ店で解散するまでの一日の情景が、売り場担当の主人公の目を通して手際よく点描される。もう少し背景説明がほしいが、「無情な」現実社会に心の交流を閉ざされた人々が、多くの人と交流するバザーの日の思いは、曇り空からわずかな日がさす当日の天候などにも託して坦々と語られ感慨を誘われる。内容は別として、ふと阿部昭の佳篇「人生の一日」を思い出した。

縁延勇二「**マドンナ**」は老人福祉センターで掃除係をする六十半ばの女性の語り。小肥りの私を、たい子さんと親しく呼びかける八十過ぎのお洒落な男性の話から、デブと自分を呼んでからかった亡き夫のことを思い出す。夫は若き日の自分をいとしんでマドンナとして置きたい夢があったのではないかと思い返す。格別な趣向の話ではないが、男と女の心の機微を漱石の「坊っちゃん」のヒロインに結んで、淀みなく練られた文章で語る、華のある九十五才の短篇も佳作に加えたい。

ほかに「**影とひかり**」は大手の商社に勤めて仕事には恵まれたが家庭運がなく二度の離婚でひとり暮しの定年間際、出会った未亡人と結ばれるという男の人生。一篇にまとめた筆力は買うが反面小説になりそうな局面の話をすべて説明的にまとめて平板な身の上話に仕上げている。もったいない感じの残る作品。

「**ゴアンゼンニ**」は函館ドックがモデルらしい造船所のクレーンを擬人化した語りで、一隻の船が造られ進水するまでの工程や背景を工夫した語り口で親しみ易く要を得て語る。造船の説明文としては上乗だと思うが、ほかに趣向がなく、小説の造形には至っていない。

以下「**箱館にて**」は幕末の箱館伊能忠敬と高田屋嘉兵衛兄弟が出会う冒頭に期待したが、そこから人物場面時間が入り乱れ、飛躍して話を要約できない。折角の知識を活かしたかった。「**別れの曲**」結婚話がもつれて別れた二人が同じ店で再会しまた別れる場面を描く。情感が欲しい設定だが話に新味がなく平凡にまとめている。「**二人の男**」、五枚足らずの高校生の小品だが信号機を二人の男に見立てた発想を面白く読んだ。センスを感じる。中学生の一篇は作品になりきれていない。まず、よい小説を読んでほしい。

評論は**水関清「復元・『悲しき玩具』～啄木の編集意図からの考察～」**一篇。このところ連年の作者の啄木論だが、本論は啄木の第二歌集「悲しき玩具」をめぐる実証的な考察。

「悲しき玩具」の復元に関しては近年も、作者が触れている近藤典彦の「啄木新歌集」で「一握の砂以後（明治四十三年末より）」という表題の歌集として編集出版されている。土岐哀果が編んだ第二歌集の表題は「悲しき玩具」だがこれは出版社の事情で哀果が随意に考えたものである。この歌集は出版を念願した啄木が生前整備した歌稿ノートを底本としているが、近藤典彦はこのノートの基本的な性格を「一往の推敲・編集を経て記入されていったノート形式の歌集」と前掲書で説明している。近藤が第二歌集の表題を「悲しき玩具」ではなく、「一握の砂以後（明治四十三年末より）」としたのは、このノートの啄木の記入に添ったものである。

水関氏の本論もこのノートを底本として、「一握の砂」で採られた啄木の歌の推敲方針を「悲しき玩具」にも仮定し、ノートの歌と雑誌掲載歌を詳細に突き合わせ啄木の推敲の跡を探って、「悲しき玩具」の復元を試みる、というものである。先人の論なども踏まえ「一握の砂」から第二歌集に至る啄木の歌の道筋を丹念に論索をしている真摯な労作であるが、この論稿には基本的な問題点があって、折角の研究の論の評価を妨げている。作者のためにもここではそのことを指摘しておきたい。

本稿はヨコ書き表記で提出された。タテ書きを原則とする市民文芸だが、本稿は内容そのものにヨコ書き表記への違和感があった。啄木の、「悲しき玩具」の特徴として言われるのは、「一握の砂」で啄木が試みた三行書き短歌のさらに徹底した実践である。本稿でも触れている啄木の歌論からも、三行書き短歌の工夫と創造は必須の実践だった。むろんそれはタテ書きを前提としたものである。「悲しき玩具」の復元を試みた本稿が、その三行書き短歌の推敲過程を横書き一行の短歌とし区切って書くのはいささかの違和感を免れない。本稿を横書きにしたのは枚数を考慮したためだろうか。三行書き短歌として表記するのは行数を要する。本誌ではタテ書き掲載になるので違和感の減少になれば幸いだが、としても「悲しき玩具」の復元を本筋とする以上、そこにこだわって書いてほしかった。結果的に本稿は上限枚数を相当超過し、作者の真摯な復元の成果であるはずの付表の掲載は見送らざるをえなかった。不本意なことだろうが、紙面の制約上、諒として貫わなければならない。

ノンフィクション　入選

土方歳三最期の足跡を訪ねて（ある巡査の『書簡』から）

木村　裕俊

（はじめに）

今年、令和元年という年は明治二年（一八六九）に箱館戦争が終って、ちょうど百五十周年を迎える年です。これを機会に、箱館戦争と碧血碑の関係資料を整理していたら、古い『書簡』の記事が目に留まりました。

それは、ある巡査の『書簡』で、尊敬する故郷の名士、土方歳三の最期の地と埋葬地を調べて故郷の先輩に報告したものでした。

箱館戦争の最終局面は、明治二年五月十一日の新政府軍による箱館総攻撃でした。土方歳三は、その日の戦いで狙撃されてそのまま絶命しました。遺体はすぐさま五稜郭に運ばれましたが、その後の消息がぷっつりと消えてしまったのです。どこで誰に狙われたのか、その後どこに埋葬されたのか、分からなくなったのです。

故郷の先輩で歳三の幼馴染が、北海道に赴任した巡査に、機会があったら土方歳三が亡くなった時の状況を調べてくれるように依頼していたのでした。

今回紹介する巡査の『書簡』は、土方歳三の最期の場所と埋葬地について調査し、故郷の先輩に報告したものです。今回この『書簡』を再調査してみると、その内容が細かく丁寧な観察眼で、明治時代の碧血碑の役割や、関係者の対応が生きいきと蘇ってきました。

箱館時代の土方歳三には、多くの伝説が残されています。この『書簡』を通して、土方伝説の謎に迫りながら土方の最期と碧血碑の役割について、これまでの史実と『書簡』の内容を比較・検討してみたいと考えています。

一、加藤福太郎からの『書簡』

『加藤福太郎書簡』と呼ばれるその書簡は、北海道室蘭警察署の巡査・加藤福太郎が故郷多摩郡の先輩に出した書簡です。加藤という人物は、東京府多摩郡日野町の出身で、室蘭警察署の巡査に採用された人でした。彼が北海道の巡査に採用され赴任するにあたって、日野町の先輩である平忠次郎から「函館に行く機会があったら土方歳三の消息を是非調べて欲しい」と依頼されていました。

この『書簡』は、昭和四十三年に東京都日野市の土方歳三

の生家で発見されたものでした。宛先は「東京府南多摩郡日野町の平忠次郎」であり、差出人は「胆振国幌別郡幌別村（現・登別市）の加藤福太郎」でした。書簡の日付は、明治二十五年（一八九二）五月十五日になっています。『書簡』の原文は、現在も東京日野市にある「土方歳三資料館」に保管されています。

同館の館長である土方愛氏は、この書簡について次のように解説してくれました。「書簡宛先の平家は中世からの名家で、土方家とは縁戚関係にありました。平忠次郎と、土方歳三は幼馴染でした。明治維新の頃は、新撰組に対する世間の風当たりも強くて、歳三の最期の消息もまともに調べられる状態ではありませんでした。それでも、平家・土方家の両家とも遠い北海道の地で戦死した歳三に関しての、僅かな情報を互いに分かち合っていました。忠次郎自身も函館を訪れて調べたようですが、詳しくは分からなかったと聞きます。彼はずっと歳三の殉難地や、埋葬地のことを気にかけていたといいます。

一方、差出人の加藤福太郎という人物は、同じく多摩郡日野町出身で室蘭警察署の巡査になった人でした。平忠次郎と加藤福太郎はその書簡の内容から、かつては日野町にあった養蚕伝習所の師弟関係にあり、尊敬する先輩でもあったのではないかと推測されています。加藤は北海道に赴任するにあたって、先輩の忠次郎から、勤務先が同じ北海道であり、もし函館に行く機会があったら是非とも土方歳三の最期の消息を調べて欲しい、と依頼していたようです。」と語っていました。

『加藤書簡』から巡査の調査した内容に興味深いものがあり、故郷の先輩への報告も詳細できめ細やかにまとめられていました。

この『書簡』を読み解きながら、以下にその内容を検討していくこととします。

二、平忠次郎と加藤福太郎の関係

『加藤書簡』の文体は、現在私たちが使っている文体とは違い、カナ混り漢文に近く読みにくいため、原文の雰囲気が残る程度の現代文に置き換えることにしました。

まず、『書簡』の前文の書き方で、平忠次郎と加藤福太郎の関係がある程度想像出来るのではないかと考えました。

先日は貴方様の御書簡に接し、誠にかたじけなく拝見仕（つかまつ）り候（そうろう）。

そちらもいよいよ暖気が加わる時期となり、これからは益々ご多忙となる中、ご尊家様には殊にご健勝の段、はるかに遠い北海道からお祝い致し奉（たてまつ）り候。

下りて、小生も何事もなく日々を暮らしおり候間、御休心これ願い候。当地も昨今はそれなりの暖気となりま

して、一重桜は風を痛んで散りはじめ候えども、八重桜、桃などは徐々に笑みを含み、咲き始め候。故に朝夕は余程凌ぎ易さを相（あい）覚え候。幸いに御放念下されたく候。

とあります。かつては養蚕伝習所の師弟関係にあり、また先輩でもある人に書簡を頂き、その返書として出す手紙の前文であることを想像すると、まさしくこうした言葉遣いと内容になるのではないかと思われます。

三、「函館碧血会」会長・和田惟一を訪ねる

いよいよ『加藤書簡』の本文に入ります。前回までの平忠次郎からの手紙には、土方歳三のことについて、もし函館に行く機会があった場合には、くれぐれも宜しく調査して欲しいと、こまごまと書いていたようです。そして今回折よく、函館への出張を命じられました。事前に土方歳三の消息について色々下調べをしてみると、「土方歳三の情報は、和田惟一（ただいち）から事情を聴くと全て分かる」と教えてくれる人がいたので和田を訪ねた、といいます。『書簡』には、

さて、前信にて詳しく御通知を下され候(そうろう)件に付き、幸い五月十三日に函館への出張を命ぜられ候おり、土方歳三君の消息や墓のことを人に尋ね候ところ、ほどほどの調べにて、函館の東濱町にある丸和旅店の主人こと、和田惟一なる者を尋ねたれば万事判明するだろうと申し聞かせたる者があるに依り、直ちに和田氏を訪いたるところ、同氏は「辰巳（たつみ）戦死者の名簿」を所持いたしおり、小生に示したるところ、隊の冠長たる土方君は第一の初筆に顕わし居りたり。

とありました。

和田惟一は、函館東濱町の「和田旅館の主人」であり、同時に函館で海運業を営む経済界の代表でした。また彼は「函館碧血会」の初代会長でもあったのです。加藤は函館の和田にあらかじめ、土方歳三の調査について相談していたのかも知れない。加藤が函館に着いて和田旅館を訪ねたところ、和田はすぐに箱館戦争の『辰巳戦死者ノ名簿』を出して、それを加藤に見せてくれました。この辰巳戦死者とは、「明治の辰年（元年）と巳年（二年）の箱館戦争犠牲者」のことです。そこに記されていた土方歳三は、榎本軍の最高幹部で陸軍奉行並・総司令長官でした。隊の第一人者で冠渠であった土方歳三は、その名簿の第一番目、初筆に書かれていました。

土方歳三の名前が最初に記載されている名簿とは、明治四十年に発行された榎本武揚の『明治辰巳之役東軍戦没者過去帳』（市立函館中央図書館蔵）という史料が思い浮かびます。この史料の基礎になる名簿が早い時期から存在していただろ

うことは、想像されていましたが、それがこの名簿にあたるのではないかと考えられます。

榎本武揚の『戦没者過去帳』の名簿とは、戊辰戦争で亡くなった戦没者八百十六名の名前が書き込まれている名簿です。和田惟一が持っていた『辰巳戦死者ノ名簿』は、内容を確認出来ませんが、土方歳三が最初に書かれていることから、榎本武揚の『戦没者過去帳』のうちの「箱館之役戦没者霊位」と同じである可能性が強いと思われます。

和田惟一は幕臣ではありましたが、箱館戦争には参加していませんでした。かつて和田も榎本艦隊の一員として、品川から美嘉保丸という運送船に乗ってエゾ地を目指したのですが、途中折悪しく台風に遭遇して銚子沖で破船してしまい、エゾ地には辿り着かなかったのです。明治十五年に函館で活躍していた実弟の宮路助三郎を頼って函館にやって来ました。榎本武揚は、この元幕臣で箱館戦争には参加しようとして参加出来なかった和田惟一に、現地での「函館碧血会」を任せて碧血碑の管理保護を要請しました。和田もこれに応じ、生き永らえたものの務めとして碧血碑の保存・祭祀を誠心誠意行ったといいます。

ここでは、その箱館戦争を知らないはずの和田惟一が『辰巳戦死者ノ名簿』を持っていたのです。この名簿は箱館戦争後、かなり早い段階に整理され、存在していたのだろうと考えられていました。つまり榎本が整理した名簿の原典と思われる史料で、少なくても明治二十五年より以前の早い時期には、既に存在していたことが分かります。

そして「東京碧血会」と「函館碧血会」のメンバーで、すでにその認識が共有されていたことも分かります。それがこの『辰巳戦死者ノ名簿』であったと考えられます。

加藤は、和田会長から具体的な細かいことは、柳川熊吉という者がおり、その者に聞くように勧められ、午前十時ごろには和田旅館を辞しています。『書簡』では、

> そうして同氏は、なお詳しきことは、柳川という者が心得ているので、知らせおき候により、小生は午前十時ころ和田氏方を辞した。

とあります。

和田惟一は、幕臣で「函館碧血会」初代・会長でしたが箱館戦争には参加していなかったことはすでに述べました。維新後に縁あって函館に来たのが明治十五年であり、箱館戦争の細やかな内容は詳しく把握していませんでした。そこで、「函館碧血会」の世話人を務めていた柳川熊吉を紹介したのでした。熊吉は箱館戦争が終った後、旧幕府軍犠牲者の遺体を回収し埋葬した中心人物でした。箱館戦争後の状況を最もよく知る人物の一人でした。柳川熊吉と「碧血会」との関係は、後述することとします。

四、碧血碑を訪れる

加藤は、柳川熊吉を訪れる前に碧血碑に立ち寄っています。『書簡』には碧血碑への道順の情景を短く記していますが、明治中期の谷地頭の風情と「碧血碑」の様子が描かれています。そして、碧血碑に登る坂口には、番人小屋があり、そこに一応の断りを入れてから碑に参詣したと述べています。

函館区の谷地頭は、公園地のすぐ側に基督（キリスト）教学校があり、その上なる碧血碑を訪ねたるところ、碑に登らんとする坂口に、碧血碑の番人小屋なるものが在るに付き、一応断わりて碑に参詣したるに、…

書簡では、当時の谷地頭公園地のすぐそばにキリスト教学校があり、碧血碑はその上にあったとしています。この当時谷地頭地区には「アイヌ学校」が建てられ、ニュージーランド人が校長をしていたそうです。また、それ以前にも近くにはイギリス国教・聖公会があったともいわれ、おそらくそれらを指しているのだろうと思われます。異国情緒あふれる風景は、谷地頭の街にも及んでいたのです。

碧血碑を前に加藤は『書簡』で碧血碑の概容を次のように述べています。

…切石をもって方六尺・高さ六尺に積み上げられたる台あり。且つ、台の下には入口ありて鉄の格子の戸締まり有り。よりて書類はその間にあるものの如し。碑は台の上にその高さは不明なれども、大よそ台共に二十尺もあらんと思わるゝほど、切り積み石の碑にて大文字にて「碧・血・碑」と記しあり。また、台の後ろの方には「明治辰巳實有此事　立石山上以表厥志　明治八年五月」と切り付けありて、誰々の碑なるや姓名なければ、台の中の書類を見ざれば不明なりし。

切石造りの碧血碑は、石室となっている台座部分とその上部に立つ石柱の二重構造になっており、碧血碑の各部分の構造一つひとつについて、目通りではあるが大よその寸法が詳しく記載されています。おそらくは、平忠次郎への報告用に、その規模が想像できるように具体性をもって細かな寸法まで示していたのだと思います。

また、石室の背後に刻まれた漢文についても触れています。石室背面の漢文は「明治辰己之年（元年と二年）、実際に此の事（箱館戦争）があった。そのため、山上に石（碧血碑）を建て、それをもって私たちの志を表します。明治八年五月」と書いているのです。

一般的に、顕彰碑や記念碑などの石碑には、誰が何のために碑を建設したのか、詳しく述べられています。例えばこの

「碧血碑」であれば、旧幕府軍がなぜ戦いを始めたのかその経緯を述べ、この戦いに散った八一六名の名簿をズラリと書き入れても不思議はないのです。しかし、石室背面に刻まれた碑文は一般の人たちが読んでもすぐに理解しにくく、誰のための、何の碑であるのか、名前や由緒が分からないようになっているのです。

碧血碑の石室の中には霊璽と経箱があり、それらを納めて多くの戦没者を慰霊していました。加藤が想像したとおり、石室内に碧血碑の目的や名簿が残されていたのだろうと思います。経箱の中に経巻があったといわれますが、恐らくは経文と名簿がセットになっていたのだと思います。その名簿とは、先に和田惟一会長が持っていた『辰巳戦死者ノ名簿』だったのではないでしょうか。

碧血碑が建てられたのは、明治八年です。この年すでに七回忌でしたが、それでもまだ新政府からは「朝敵・賊軍」の扱いを受け、世間には大きな憚りがありました。ただ、こうした間接的な表現で表された漢詩は、事情を知って読み返してみると、かえって哀惜の情が沸いてくるような気が致します。

五、柳川熊吉との面談と土方歳三の伝説

㈠　柳川熊吉と碧血碑

その後加藤は、柳川熊吉と会っています。熊吉は「箱館戦争」終結後の遺体の回収・埋葬から碧血碑の建立に至るまでの事情に詳しい人でした。

巷説によると箱館戦争が終結した時、旧幕府軍戦死者の遺体は街中に放置されたままでした。これを戦争に関係のない、熊吉ら函館の住民が収容し、実行寺に埋葬したのです。この中心人物が大工の大岡助右衛門と柳川熊吉であり、埋葬を引き受けた実行寺の住職・日隆師の三人でした。時には新政府軍の将校に咎められることもあったようですが「亡骸に敵味方はない」と勇気をもって行動しました。それが後に多くの住民と他の寺院を動かして、大きな行動へと繋がったのでした。

明治五年（一八七二）に榎本武揚ら旧幕府軍の最高幹部が釈放された時初めて榎本らは、柳川たち函館市民の行動を聞き、感激したといいます。榎本らは改めて、箱館戦争終焉の地に出来るだけ大きく立派な慰霊碑を造ろうと決意しました。碧血碑は明治七年（一八七四）に建設を始め、同八年五月には現地・函館で組み立て上がりました。街中に放置された犠牲者を埋葬した関係もあり、柳川熊吉は最初から世話人として碧血碑の建立に協力していました。大岡助右衛門は、この時期には札幌に赴いていたため、以後は熊吉が生涯にわたって碧血碑の世話人を務めていました。

碧血碑は、戊辰戦争で亡くなった旧幕府軍犠牲者の追弔慰霊の碑です。柳川熊吉は、箱館戦争からのすべての事情に通

じていましたし、碧血碑の建立にも関わっていました。
こうした事情から函館碧血会の和田惟一会長は、加藤にすべての事情に最も詳しい柳川熊吉を紹介したのでした。

㈡　土方歳三伝説（最期の地と埋葬地）

もう一つ、土方歳三の最期の地と埋葬地について、伝説化した情報にあらかじめ触れておきます。加藤福太郎は、このことを調査しに来たのです。
土方歳三の殉難地も埋葬地も諸説があり、未だに確定していません。『書簡』では加藤が柳川熊吉から、遺体が収容されたことを聞いて安心し、故郷の先輩にその顛末を報告していますが、現在の私たちには『加藤書簡』の内容で土方伝説は解決していません。土方ファンは未だに、土方歳三はどこでどのように最期を迎え、どこに葬られたのか、探し続けているのです。今なお巷説で語られながら分からない土方歳三の最期の行動について、確認しておきましょう。
明治二年（一八六九）五月十一日、新政府軍の箱館総攻撃が開始されました。島田魁らが守備していた弁天台場が新政府軍に包囲され孤立したため、土方歳三はこれを救出しようと、僅かな兵を率いて出陣しました。新政府軍の軍艦「朝陽」が旧幕府軍の軍艦によって撃沈されたのを見て土方は「この機を逃すな！」と大喝し、一本木関門にて敗走してくる仲間を再度進軍させ「我この柵にありて、退く者を斬らん」と発しました。歳三は一本木関門で、七重浜からの新政府軍に応戦していました。馬上で指揮を執っていた時、乱戦の中で一発の銃弾が土方の腹部に命中して落馬、近くの将校が駆けつけた時には絶命していました。敵の狙撃弾か流れ弾に当たったとするのが通説です。
弁天台場に進軍していた旧幕府軍の兵士らは、一時勢力を盛り返しましたが歳三の死によって総崩れとなりました。歳三の遺体は、すぐに五稜郭に運ばれ埋葬されたといいますが、別の場所に安置されたともいわれ、その場所は未だに特定されていません。享年三十五歳でした。榎本軍最高幹部八人の中で、戦死したのは土方歳三だけでした。
土方歳三の消息は大よそこのような内容です。しかしこれに伝説的要素が加わり、歳三が戦死した場所は、一本木関門であるとか、もう少し市街地寄りの鶴岡町の辺りか、もっと市街地に近い十字街の「異国橋」の付近ではないかとの説もあります。弁天台場の仲間を救うために、少しでも前に進ませたかったのでしょうか。一本木関門説は『麦叢録』に書かれた
「土方歳三殿、一本木にて戦死ス。」
との一文で有力視されていますが、これとて、執筆者の小杉雅之進がその場にいたのかどうか確認されていません。またそれ以外の説には、小説などの影響を受けている可能性もあり、はっきりしないものが多いのです。

埋葬地にもいくつかの説があります。土方の死後、遺体はすぐに五稜郭に運び込まれ立ち合い者のみで急ぎ焼香して、五稜郭内のある場所に埋葬されましたが、場所は秘匿されたといわれます。他にも馬方の松四郎が歳三の遺言だとして、五稜郭から歳三の首をそっと持ち出して神山村の大圓寺の境内に埋めたという説。新撰組の誰それが七重浜付近に隠し、後日別の場所に改葬したとする説。あるいは東川町の願乗寺とする説などです。それに今回の柳川熊吉が報告した説が加わります。もちろん熊吉がいう説以外は、肝心な点が秘匿され、分からないことが共通しています。

㈢ 柳川熊吉の報告

さて、加藤はその後、碧血碑の丘を下って、柳川熊吉を訪ねました。熊吉は谷地頭で「柳川亭」という蕎麦屋を営む傍ら、生涯「函館碧血会」の世話人として碧血碑を見守って来た人です。『加藤書簡』は、次のように続いていました。

それより碑を下りて、山の下にいる（和田惟一の知らせたる）柳川亭という蕎麦屋の柳川熊吉を訪い、詳しく調べたるところ、石碑は、明治八年に、戦死者のためとして、有志（荒井・榎本・大塚・その他）の建てたるものなれども、その当時は土方君の屍のあるところは、巷説紛々として明らかならざれしも、柳川などが尽力して取調のうえ分かったのは、函館より僅かに離れたる七重村（現・七飯町）というところの、焔魔堂にて、土葬の上、宝物の如く大切に致しおることが判然。

碧血碑は、明治八年に旧幕府軍の戦死者のために建てられたもので、有志者（荒井郁之助・榎本武揚・大塚霍之丞その他）により建てられました。建立の有志は、榎本と大鳥が代表して登場しますが、他の名前は余り出てきません。ここではわずかながら、荒井郁之助や大塚霍之丞らの名前が出てきています。

碧血会はもともと東京在住の旧幕臣の有志が「東京碧血会」という結社を作り、碧血碑を建造して函館に送り、函館の有志が谷地頭に建立しました。その後函館にも「函館碧血会」を作り、碑の管理と慰霊祭の執行を行わせました。当時、会のメンバーは幕臣が中心であり、兵卒・中間・職人らの世話人が具体的な作業を行っていました。

柳川亭を訪ねた加藤は、ついに熊吉の口から土方歳三の遺体がどこにあったのか、聞くことが出来ました。明治八年に「碧血碑」を建てた時、土方歳三の埋葬地は、巷のうわさが入り乱れ不明のままでした。それを柳川らが尽力して取り調べた結果、函館からわずかに離れた七重村（現七飯町）の焔魔堂に土葬されていましたが、地元の人々は宝物のように大切に扱っていたそうです。そして、

この地の人たちと種々に談判し話し合ったすえ、土方の遺骨は、再び火葬して改め、即ち明治十二年に致り、漸く「碧血碑」の中に収めたという。丁度その時、榎本君が露国より帰りて、函館に寄りたる時にて、土方君の屍の在りかが分明したることを聞き、大いに喜ばれたりという。かつ碧血碑は、数多くの戦死者ある中でも、最も土方君に重きを置き、早くいわば土方君のために建てたるものというも、差し支えなしという話なり。

地元の人たちと種々話し合いを重ね、土方歳三の遺骨は再度火葬して改め、明治十二年に碧血碑の周辺に納めたといいます。

碧血碑には、戦没者全員の遺骨が納められているのでしょうか。明治二年に遺体を回収し埋葬した時には、各寺に分散して埋葬したため、当初は碧血碑に遺骨はありませんでした。明治十一年に函館大火があり、遺骨を納めた実行寺、称名寺、浄玄寺、願乗寺が区画整理で移転したり墓所を変えたりしたため、同十四年に宮路助三郎が自費で各寺の遺骨を回収し碧血碑の周辺に埋葬し直したと言われます。柳川熊吉の主張通りであれば、恐らくこの時点で、土方の遺骨と一緒になったのだろうと思われます。

土方の遺骨を碧血碑に納めた時、丁度「樺太・千島交換条約」の交渉のためロシアに行っていた榎本武揚が帰国して函館に立ち寄っていました。熊吉から榎本に土方歳三の亡骸が見つかって碧血碑に収めたと報告をしたら、榎本は大層喜んでいたといいます。

碧血碑は戊辰戦争で犠牲になった旧幕府軍犠牲者の慰霊碑ではあるが「土方歳三の死に最も重きを置き、土方歳三のために碧血碑を建てた」といっていますが、これは少し言い過ぎのような気がします。熊吉の説明なのか、『書簡』の報告での表現なのか分かりませんが、土方に対する大げさなリップサービスだったような気がします。

『加藤書簡』には、柳川からの説明がさらに続きます。

よりて小生は、進みて土方君の改名(戒名)を尋ねたれども、同碑はその初めより、七星と称する神社の神官が函館出張所に居りて霊祭したるものなれば、神葬祭に付き土方君回収の節は、戒名としては附せざるよう覚えると申し候。しかしながら、当時は縁故ありて、函館区船場町の實行寺と申す法華寺にて（称名寺の隣りなり）読経等の世話致し居り。毎年六月の日曜日には奉経之れ有り候由にて、本年は六月二日に経を奉ずることなりという。よりて当節は寺にて改めて戒名を付けたるやも知れずという。

次に加藤は、土方歳三の戒名について尋ねています。柳川は、碧血碑は当初より七星という神官がいて慰霊していたので、土方の遺骨を碧血碑に納めた時には戒名を付けていなかったようだと答えていました。

碧血碑の碑前慰霊祭は、明治八年に最初の神葬祭を北海道東照宮の神官が行いました。この時の祭主は、神道事務局本部の大講義・七星正泰が当たっていました。そのことを報告しつつ、柳川は碧血碑に祀られた人たちには戒名などは付けていなかったように覚えるとしていましたが、しかしその後、縁あって船場町の実行寺でも仏式の慰霊祭を行っている。こちらは毎年六月の日曜日に行なうが、今年は六月二日に予定している。そのため寺では戒名を付けているかもしれないと報告していました。

ここでは、「碧血碑」の碑前慰霊祭を、神式と仏式の慰霊祭が別々に行われていたことについても触れていました。碧血碑が建立された当初の明治八年九月十四日に実行寺が仏式による碑前祭を行い、その三日後の十七日に北海道東照宮が神式の碑前祭を行ったことは、よく知られています。その事がこの『加藤書簡』で改めて確認出来たのでした。この内容からは、神式による慰霊祭は神道事務局本部の七星正泰によって執り行われていたことも追認できました。

碧血碑建設の折、代表幹事の宮路助三郎は、北海道東照宮を谷地頭に勧請して碧血碑の守護を願っていたといいます。北海道東照宮は、もともと徳川幕府の五稜郭奉行所を護る神社でした。一方、仏式については旧幕府軍の犠牲者を最初に埋葬した実行寺が担うのはごく自然のことでした。碧血碑慰霊祭は当初から神式と仏式の交歓があったのだと思います。

小生、實行寺には、遠方に付き遺憾ながら取調べを二(すま)せず。且つ、柳川熊吉なる者は、以前土方君の人夫として働き居りたる者なりとて、土方君の性行等、涙を忍びて語り居りたり。六十歳近き老人の昔語りに、無意の小生もその当時愛国の念凝りて、土方君等の疑いて朝敵となりしを追想し思えず髪冠を衝くの感を来たしたり。

實行寺には、遠かったので行くことが出来ず、調査しなかったとしています。また柳川熊吉は、一時土方の下で働いていたようで、土方の性格や癖などについて涙をこらえながらに語っていました。六十歳近い老人の昔語りの言葉に、当時は強い愛国の念を持っていた土方歳三らが、新政府から「朝敵」とされたことを思い出して思わず激しい怒りを覚えた、と感想を述べていました。

なお碧血碑には千円の金ありて、年々五十円の利子を得らるゝことにて、六月二日の祭には番人の給金その他合計致し、有志は宴を開き、もって追悼の情を表する由、

永代これが祭を絶つが如き事は之れ無き話なりと語り、依りて實行寺に問い合わせたらんには改名(戒名)の有無等は判明致すべく候。

最後に「碧血会」の予算についても触れています。熊吉は「(東京) 碧血会」には、募金の時の財産が残っており、その金額からの利子で、番人の給金を支払い、有志たちは直会の宴を開いて、追惜の情を表していたといいます。戒名のことについては、実行寺に聞けば分かるでしょう、と言っていました。

碧血碑の建設費用は、すべて旧幕臣関係やこれを応援していた人などからの浄財による募金です。浄財は、四千円以上集められ、建設費用に三一六〇円かかったことが分っています。「東京碧血会」では、残った千円の浄財を年五分の公債に預金し、その利子を毎年「函館碧血会」に送り、墓守の管理費や碑前祭の経費などに充てて追惜の情を顕わしていたといいます。こうしたやり方が行われる限り、碑前祭がいつまでも絶えることなく続くだろうといっていました。

小生は碧血碑に参詣の折、官服なれば別に供物等持参致さざるに付き、止むを得ず剣を抜きて門前の松ヶ枝を切り落したる処、気揚り魂(こころ)勇みての為作(いさ)に付き、何時よりも剣の切れ味が宜き様に思われ候。

今後小生、函館に出張の折は何がなり共、先生のため、国のため、同郷の名士のため、必ず碧血碑に参りて、もって無上の楽みとなさんと（去りし名士の墓を訪い、魂を慰むるは、又楽しみならずや）思料致し候。

目下、御大多忙中故、縷々(くわ)しき事は申し述べず候。御家内様及び伝修生諸君に宜しくお伝え願い上げ奉(たてまつ)り候。

五月十五日　　加藤福太郎　拝

平　先生　　机下

加藤は碧血碑に参詣する際、官服のままで来ており、別に供物等も持って来てはいませんでした。やむを得ず、剣を抜いて門前の松の枝を切り落としました。上気していたせいでしょうか、気がはやって力が入り、いつもより剣の切れ味が良かったように感じられたとの感想を述べ、今後函館に出張する際には何があろうと、必ず碧血碑に立ち寄り、その事を何よりの楽しみにしたいと思うと、自らの決意も合わせ述べていました。

そして最後に、御大の平先生は忙しい身であろうから、余り詳しく述べません。奥様はじめご家中の方々、伝修生諸君にも宜しくお伝え下さい、といって筆を置いています。

（おわりに）

今回検討した『加藤書簡』からは、新しい歴史の発見はありませんでした。しかしこの『書簡』からは、これまで伝聞でしか確認出来ていなかった幾つかの事柄を確認することが出来ました。その事がこの『書簡』への大きな評価だと思います。

例えば「函館碧血会」の初代会長の和田惟一が持っていた『辰巳戦死者の名簿』です。榎本が明治四十年に発表した『明治辰巳之役東軍戦死者過去帳』より十五年も前に名簿が存在していたことが明らかになったのです。残念ながら実物がないので、その分評価はそれ程高くはなりませんが、しかしこの名簿はもっと以前に存在していて、箱館戦争から余り時間を置かない時期には、既に整理されていた可能性があります。

碧血碑の近くに「番人小屋」があったことにも触れていました。この「番人小屋」は、今はもう跡形もありませんが、昭和初期までは存在していました。碧血碑の保守や警護に大きな役割を果たしていました。碧血碑の石室内には、当初刀や銃剣・陣笠などが所せましと置いてあったそうですが、番人小屋は昭和八年に住む人がいなくなりました。その後金属類は太平洋戦争に供出させられ、戦後は盗難にも遭いました。昭和三十年代には「碧血碑」の大文字が盗まれたこともありました。

柳川熊吉の説明から、碧血碑の碑前祭は神式と仏式の両方で行ったことや、神式は東照宮が主催し仏式は實行寺で行っていたこと、そして碑前祭の後に寺で施餓鬼法要を行っていたこと、碧血会の碑前祭での経費は、残った浄財の利子から生み出して賄っていたことなど、今まで伝聞的な内部の資料からの情報が主なものでありました。

柳川熊吉からは、肝心の土方歳三の埋葬地について聞きました。『書簡』では、七重村の「焔魔堂」で発見されたとしていますが、七重村には「焔魔堂」はありませんでした。現在の七重浜に近い、函館市吉川町に昔「焔魔堂」があったといわれます。今は「極楽寺」という寺になっています。ここは、新撰組の島田魁が一本木関門で戦死した土方歳三の遺体を亀田七重の念仏堂の縁の下に隠した伝説と重なっています。その後明治二十年に、島田が改葬して碧血碑に収めたということになっています。但し島田魁は、土方が戦死した時には弁天台場に居り、遺体を隠すことは出来なかったと思います。

どちらにしても、そのことを証明する行動や報告に具体性が見えず、結局根拠のない伝説だけが残り、解決した事実が現在に引き継がれていないのです。今回の熊吉の報告でも、なぜその亡骸が土方であったのか、それを証明するものが一切ありませんでした。土方の殉難地と埋葬された場所は、「永遠の謎」なのかもしれません。

一般的に伝説とは、ある時代の特定の人物が、その場所で実際に起こった出来事と結びついて、真実のように信じられ

て語り継がれていく言い伝えです。土方歳三は京都時代に比べ箱館での生き様の方が人間性の幅が広がったといわれます。大野・二股口での戦いでも、合理的な洋式戦術を積極的に取り入れていたし、戦いの合間には部下たちに「軍律を乱さぬように、今日は一杯だけだぞ」といいつつ、酒を注いで廻ったといわれます。この一言に部下たちは土方に命を預けたのでした。

一本木での最後の戦いでも、新政府軍に包囲された弁天台場の仲間を救うために、積極的に進軍していったのでした。その勢いが最期の地を一本木から、鶴岡町へ、さらに異国橋へと進ませていったのだと思います。

埋葬地についても、遺体が新政府軍に見つかるとさらし首に処せられる、武士の対面が大きく損なわれると考え、残された仲間は絶対に見つからない場所を探し、地中深くに埋めたといわれます。箱館での土方伝説は、枚挙にいとまがない程多くあるといわれます。

いま五稜郭公園には、千六百本のソメイヨシノが毎年春を彩っています。函館の桜の散り時は、土方の命日の五月十一日頃です。この満開の桜が散り始めると、枝を離れた花びらの一つひとつが、五稜郭で儚く散っていった多くの犠牲者たちの姿と重なり、思い出されるのです。

土方歳三はいま、函館とその近郊の観光地でアイドルのような人気者になっています。伝説の殉難地と埋葬地を巡り、その先々で土方は大勢の旅人から慰霊されています。そしてそこに残された土方のパワーを分けてもらい、自分の力に変えている人たちもいました。

土方伝説の「謎」は「謎」として、このままミステリアスであった方が良いのかもしれないと思います。

さて、東京日野の平忠次郎氏は『加藤福太郎書簡』の報告で納得出来たのでしょうか。

（了）

ノンフィクション　入選

基坂の老医師

齊藤　満

港が見える丘に一度は住んでみたかった。函館山の中央の麓に建っている旧函館区公会堂を散策の折に立ちよってみた。眼下に函館税関があり、大小の船が停泊し、青函連絡船が行き交う、まるで絵画を観ているようであった。静かな風情は心の安らぎとなり、私は深呼吸しながら脳裏に景観を記憶した。

昭和三十六年の初秋に、当時台町の検疫所に隣りの棟に勤務することになり、バス通勤に便利なところを探していたところ、市立函館病院前のバス停の側に、二階建ての古めかしい病院の跡に、貸間ありの一枚の貼り紙があった。ここは、知る人ぞ知る「小便博士」で市民の間でいわれていたところだった。

玄関前の右に、医学博士・木内　幹　の白い小さな陶器の表札があった。思い切ってこの建物を管理している年配の女性に、入居の希望を申し込んだ。二、三日してから契約が終了したが、空いている部屋に案内された。

「尿研究所と産婦人科」を兼ねていたが、閉院してしばらく経っているらしい。

入居は二階で廊下をはさみ、八、九室あり私が最後だといわれた。病室だけに堅固な建物で天井は高く、窓は洋風の引き違いであった。階下は待合室、診察室、薬局、尿研究の器具が棚の上下に並んでいた。病院の独特なホルマリンの臭いが漂っている。ここでの生活が馴れるだろうかと、少し気になった。

人の声もしない、かつて看護師や研究の若い医師も廊下を歩いたことを想像してみた。

入居して間もなく、木内先生と廊下で対面したが、目礼するだけであった。歩幅がせまい先生の足取りが私の目にとまった。

木内先生の概要

医学博士、正七位、市会議員、医師会長

木内　幹

千葉県香取郡神代村の生れにて明治三十九年東京帝國大学医学部卒業後直ちに大学院に入学、同四十一年旅順口日

本赤十字社病院治療主幹として赴任次いで関東都督府医院医長に転任数年にして、ドイツに留学す。ドイツ滞在中、函館区長北守氏の電請により、当地病院に来職せるは大正元年八月一日なり、爾来、函館病院婦人科長として研究中尿診断を発表して斯界に一新を促せり。時あたかも大正三年六月十日なり、翌年学位を得、爾来十三年間在職す。辞して木内尿研究所長となり、尿の研究に専念す。昭和四年市会議員に当選、翌五年再選せらる、囲碁を好み忙中の閑を見出して、黒白を争い又俳句に妙なり、俳号三平俳壇を賑わす。近詠

太刀に斬って捨てたき餘寒かな

私は無医村で生れ育ったこともあって、二十歳を過ぎる頃までは、病院で診察をうけたこともなく、ましてや医師の姿も見ることはなかった。それだけに木内先生と同じ建物の中に居るということは、緊張を感じてしまった。村落の人は、函館の病院で診察するということは、何科であっても話題になっていた。

古くから医師のいないところに、人住まずともいわれ、昭和二十九年二月十二日付の「道新」に今の「読者の声」の「論塔」欄に、十八歳の声を掲載された。私は興奮した。

医療施設を

渡島と桧山の国境、ここ大島村原口は冬季ともなれば全く交通機関は途絶えて陸の孤島と化してしまう。このへき地にとって最大の急務は医療の施設である。病院までは二里余もあり一度急患が発生した場合は屈強の男四、五人で患者を昼夜の別なく運ばねばならず、その途中手当が遅れ尊い生命をなくした例も一、二ではなく、また短期間で治る病気も手遅れのために長びき、経済的に恵まれぬ村民は一層苦境に追い込まれる。

日本赤十字社の無医村の巡回には患者は殺到するが、それも年に一度か二度に過ぎず、そのため現在でも封建的な一種の神がかりを信じる人々を見る時、文化国家として恥ずべき存在を嘆く。（以下略）

六十五年前の投稿文を記憶を頼りに、図書館の係員の配慮を頂き対面した。私にとって医師は神であった。

時折、目礼するだけであった先生の姿が、いつも時を経てなお脳裏から離れない。

木内幹先生の記念祝賀会

木内幹氏が函館病院に赴任したのは、大正元年（一九一二年）八月で「尿診断」を中外に発表したのは同年六月十日で

ある。たまたま大学に在学中、産科婦人科の講義に於いて、木内氏尿診断を学んだことのある、桧垣麟三・阿部龍夫の両名は、大正十三年六月十日がその尿診断発表十周年に相当する事に想到して、先輩知人に働きかけて、この函館より発表された画期的学説のために、記念祝賀会をもくろんだところ、幸いに多数の賛成者を得てその実現を見ることが出来た。

その実況を函館日日新聞社は、左の如く報じている。

世界的の一大発見である、木内博士の尿診断発表以来、本年は恰も満十年に相当するので、この学会の一大偉業を記念せんが為、博士の友人等相謀り之が記念祝賀会を昨十日午後三時より、五稜郭の菅谷別邸内に於ける広大にして折柄、百花競ひ新緑滴る庭園に開かれた。

来会者は（百五十六名略）の人々にて、函館に於ける殆ど紳士階級を網羅し、稀に見る美しき集会なりしが、同四時銅鑼の合図に一同若草萌ゆる広場に参集し、木内博士夫妻亦席に着くや、林本社理事は発起人総代として簡単なる挨拶を述ぶる所あり、佐藤潔氏は各地より寄せ来れる数十通の祝電披露し、終わって斉藤与一郎・渋谷金次郎両氏の祝辞演説ある。

その後、木内博士の謝意を述べて曰く、「同情ある諸氏の厚意は余の生涯忘れるべからざる深刻なる印象となれり。余は茲に三点に於いて感謝の意を表すものなり。

即ちその一は、学者に対する諸士の同情にあり、学究必ずしも平凡ならず、容易にあらず、言はば不断の戦闘なり。貧苦と闘ひ、且つ日夜の研究は或は敗れ或は退き、悪戦苦闘の結果は遂に真理の勝利となる。諸氏の厚意は即ち一学徒として百万の味方を得たるに等し。

第二は国産学問に於いてなり。現今は一事万事舶来学問ならざれば要を為さず、随って之を顧るものなき中に、我尿診断は所謂国産的なるに於いて、殊に函館に於ける発明として余の大に努力せしことを認められたること。

第三は、余一個人として諸氏の日頃の同情に深謝の意を表せざるを得ず。余は之を以て黄金に代へ而して満足するものに非ず。飽迄も他力に頼らず、自力に依って之が達成を期せんとす。今後共須らく諸氏の監視を切望する次第なり」云々と。切なる意中を披瀝し拍手裡に降壇。之にて直ちに園遊会に移れり。折柄不順の肌寒き風にかん酒おでんの大繁昌となり、寿司に団子、蕎麦の温かきも大繁昌にて、東西両見番の紅裙連俄かの多忙に目を廻す許りなりき。この広場にて大小美人の手踊あり。十分歓びをした後に、遠藤吉平翁の発明に唱和し、木内博士万歳を三唱して散会せるは五時半頃なりき。

永井潜博士は木内氏の新著「胎児男女診断」に序して「殊に君が辺陬の一開業医として、独立独歩、独創独行、奮って

木内研究所を起し、診治の余暇をもって、この一大問題の研鑽に没頭し、孜々として日夜真理の探追に邁進しつつある真摯なる態度に対しては、仮に学説に於いて多少生硬に失し、方法に於いて未到の嫌ありと評する者があるとしても、心からなる景仰礼讃を禁じ得ない」と述べて居られる。

木内氏の業蹟の価値を知ると知らざるとにかかわらず、学問的な記念会に函館の人士の粋を挙げて参集したこの日の盛況は、函館として絶後でないまでも空前であった。

私は、永井潜博士のこの賛辞に身震いを感じた。明治時代の医師の文才に、天下の文豪に勝るとも劣らぬ精神が宿っていることを、さらに驚嘆した。

永井博士は、広島県賀茂郡で、明治九年に出生、東京帝国医科大学卒、後にドイツ、英国、フランスへ留学、明治から昭和初期まで生理学に物理化学の実験、技術、理論を導入したことで有名であった。

函館区長・五代
北守政直

ドイツに留学中の木内先生を、函館病院に電請により要請したのは、五代区長・北守政直であった。函館病院の婦人科医の欠員があったのかは、当時の病院関係者の意見が、区長の決断したことは、どの組織体でもとっていることだ。木内先生を推した医師たちによるものと、理解することは当然であろう。

ここで北守区長の経歴を知ってみたいと思い、図書館に足を運んだ。氏は、岩手県盛岡市の出身で、開拓使時代の明治十一年四月に来函して、開拓使雇いとなり、そのまま函館県職員、北海道庁函館区役所書記を歴任し、明治二十九年十一月までの通算約十九年七ヶ月在職した人物である。

初代区長・林悦郎の就任後に助役となり、四代の区長を支えた。したがって助役生活は十一年間弱、函館在勤は通算で約三十六年五ヵ月に及んだ。この行政手腕、能力によって木内先生は函館病院に着任したのだろうと、思い募らせるものがある。

北守政直が明治十一年に来函した翌年に、木内先生が、千葉県香取郡神代村に生れたのだ。先生はこの村では神童と呼ばれたに違いない。この村からやがて東京帝国医科大学へそして大学院に学ぶことは、余程の労苦を体にしみこませ、前述のとおり、大正十三年六月の「尿診断発表十周年記念祝賀会」で、謝意の中での、その一に注目してみた。

「学者に対する諸氏の同情にあり、学究必ずしも平凡ならず、容易にあらず、言はば不断の戦闘なり、貧苦と闘ひ（略）、悪戦苦闘の結果は遂に真理の勝利となる」は、幾度も読み返してみた。

先生の脳裏に刻み込まれているのは、生れ故郷のことが頭

から離れなかったことだろう。
香取郡神代村は、先年町村合併により現在は香取郡東庄（とうのしょう）町に変っている。小学校名は、東庄町立神代小学校である。先生の在学中の一枚でも記録に残っているものはないだろうかと、いろいろと探し求めて東庄町役場教育委員会の担当者と電話で会話したが、一切関係資料はないということであった。
私は手もとにあった資料を送った。神代小学校に届いて児童らが、生涯を北海道の医学・医療に捧げた木内先生を誇りに思ってくれたらうれしい、ただそれだけであった。
神代村は茨城県に近く、利根川が銚子の海に流れる風光明媚なところ、ひたすら尿診断の研究に情熱を燃やした木内先生に、尊敬するばかりの年月が続いた。そのことを思うと胸が痛くなってくる。

壁に題す　村松文三

この漢詩を口語文として書き記すことにした。最も私の大切にしてきた詩文であり、私が村落を後にしたとき心に刻んだ。

男児志を立て郷関を出づ
学若し成らずんば死すとも還らず
骨を埋む豈墳墓の地を期せんや
人間到る処青山有り

「大意」を述べることは意とするところではないが、書き記してみる。

男児というものは、志を立てて故郷を後にしたからには、学問の道に精進して若し目的達成が出来なければ、死んでも故郷に帰らないものだ。
自分の骨を埋めるのに、どうして先祖の墓に限定する事があろうか。
人生を歩む上に、此の広い世の中には、自分の骨を埋めるのに適した土地はいくらでもあるではないか。

作者の村松文三（一八二八～一八八四、文政十一年～明治十七年）、幕末の志士、名は文三、香雲又は二十回狂士号とある。
さらには、江戸後期の医者、政治家、漢詩人。幸崎管仲の子、伊勢（三重県）山田の人。駿河の国（静岡県）焼津の村松玄庵に医を学び、養子となる。
この漢詩は、どの職業につくことになっても、古来、一度は目をとおしたり、学校の先生から教えられる人生訓に等し

いものである。
順風満帆の時は少ないものであり、何かしらの心の中に覚悟をもっていなければ、人生の荒波を乗り切ることができないことは、承知しているが、人の上に立つ者ほど学んでおくべき詩文であった。
古くは、故郷に錦を飾るということが、人生の目的のひとつでもあったが、後世に継いでいく学問を積み重ねておくことは、さらに大切であるというようになった。

私は入居してから四年目の昭和四十一年の春、管理人と会って部屋を出ることにした。
住めば都というように、基坂一帯は第二のふる里の地のように感じていた。
夕下風が今日も吹いている、優しい風だ。
昭和三十九年五月、結婚をした。忘れることが出来ないのは、この年の十月十日、西暦だけは忘れていない。一九六四年だ。東京五輪の年であった。管理人に結婚したことを報告した後、廊下で先生とたまたま会ったので、妻を紹介したところ、微笑を浮かべてくれた。
あの日から今年で五十五年目になる。
かつて台町の勤務も終えてから、今も年に二、三度は西部地区に足を運ぶ、そんなある時に、すでに市立函館病院は港町に移設し、後日散策してみたら元町公園となっており、よく整備された坂の辺りは、観光バスの駐車場となっている。様変わりだ。なつかしいなァと思いながら、かつての病院（尿研究所）の地に、平屋の住宅が建っていたが、いつか再建築された建物が新築されている。
特になつかしかったのは、庭に大きな木があったが、今も二階建の先に枝葉が揺れている木は大木となっている。そのすぐ下は、大町会館があるので、木の名だけでも知りたいものだと思っている。
函館税関もすでになく、その後に、海上自衛隊函館基地隊になっている。赤レンガ群も観光地区になり、緑の島もでき、ヨットハーバーにもなっている。
しかしどうしても、木内先生の消息を知りたいと思いながら、改めて函館医師会に電話してみる勇気もなかった。
よく考えてみると、どこかに転居されているのではないだろうかと、近くの古くからある家の人を訪ねてみたが、時すでに半世紀も経っているので知る人はいないのが当然であった。
中央図書館の資料室で手がかりはないかと、新聞の死亡広告欄を、年代を指折りながら、先生がお亡くなりになった時代を想定しながら、しばらくの時をかけたある日の３５ミリの保存のフィルムを思いついた。
ついに探しあてた、不謹慎ながらホッとして、つぶさにフィルムの回転を落しながら確めた。間違いはなかったので、係

の人にコピーを依頼して新聞を手にしたときは、感動を覚えた。

死亡広告の概要のみ、列記をしないで先生をしのびながら書き出してみたい。

父木内　幹儀一月二十三日午後四時五十分、天寿を全うして永眠いたしました。

ここに生前のご厚情を深謝し謹んでお知らせいたします。

通夜は一月二十七日、午後五時、告別式は一月二十八日、午後一時、場所は大町会館（函病下）、昭和四十八年一月二十六日

喪主は、木内〇〇　私はご長男であろうかと思いながらも、書くことをためらった。

友人代表は六名の方々であったが、函館病院に着任して以来の親しかった先生たちであった。

竹田侃一郎、寺門陸雄、宮村環、葛西武美、平塚常次郎、登坂良作、

葬儀委員長は、菊池勝夫

別欄には、当会顧問木内　幹　殿の永眠をご通知申しあげます。社団法人函館医師会、さらに、日本産婦人科学会名誉会員・北海道産婦人科学会顧問及び道南・・顧問の木内先生の逝去を通知する欄があった。

函館をこよなく愛し、患者のため、尿研究に励んだ先生は、自ら基坂の上の角地に病院を建て、その地に一生懸命に生きてきたのだ。

寒い日が続いていた。天気の解説には、二十五日は発達した低気圧の影響で、全道的に荒れ模様の天気となり、胆振地方では電線着雪などの被害もあった。二十六日も引き続き冬型の気圧配置で、西部・北部を中心に一時雪が降りそう。しかし天気の回復は早く内陸部では後半から晴れ間が出てくるだろう。

函館の天候は青空の天気予報と似ているので、北寄りの風、曇りで時々雪が降る。海上は波がやや高い、と報じていた。

気候温暖の地とはいえ、一月の寒さは肌を刺すような風も舞う。近くの角の旧イギリス領事館の周辺にも道のわきに積雪があった。

昭和十年ごろまでに領事館として使われていた建物だが、木内尿研究所とは近くであった。今にして思うと研究所の建築は西洋風であったことからして、木内先生のセンスがすごかったと思っている。

函館病院の真下なだけに、当時としては患者として訪れる人たちの目にうれしく感じていたかも知れない。

助産婦雑誌（10巻4号）
北海道の分娩

木内先生の学術的論文等の詳細は、昭和三十一年十二月に刊行された。「函館医師会史」（著者、阿部龍夫）を一読することによって、医学に全く無学であっても、多くの医師たちによって今日の医療の発展に寄与されたことを知ることができる。

私は昭和十年六月に生れたが、村には助産婦はいないので、経験を積んだ無資格の人がとりあげてくれたと、子どもの頃に母から聞いた。難産もあり、母体も胎児も命懸けであったことは、私の無医村に対する不安を募らせた。命を落した人もいた。

木内先生の研究功績は後記にしたが、先生の論文でないものを読んでみたいと、心にとめていたところ、パソコンから「助産婦雑誌」「北海道の分娩」のページを開くことができた。横書きの雑誌文であるので、縦書きにした。先生は元より文筆家であることを何かの折に知っていたが、改めて読んでみると分りやすい文章で綴られていた。

私が独逸から函館へ来たのは明治四十五年即ち大正元年八月一日で、今日までざっと五十年を北海道に暮しました。其間の色んなことは頭にも残ってるし、視聴にも触れて居る。だが其前の事は先賢前哲の垂訓や、田夫野媼の物語から拾遺し、聊か後世のため文献にしたい。

助産婦雑誌の編輯部から御依頼をうけた時、丁度私は好きなヘッベルを読んで居た。作者知らずの霧の国の歌は北欧の津々、浦々まで滲透して中世紀の文化推移を唄ってる。大きな理想、それを若き詩人は犀利な眼光で脚色し了したのである。

中世紀の芸術家は名を後世に残そうなどと云う野心は全然持たなかったそうで、興に乗じて吟詠し飄然として去る。之は私共が学ばなくてはならぬところ、只今私が北海道の分娩、その四方山話を綴るとしても木内と云う名は極めて小さく取扱って戴きたい。北海道が特殊地位にあることは御承知の通りで、函館から根室、胆振から日高から天塩、阿寒から美幌峠、大雪山から狩勝峠、洞爺から駒ヶ岳、不等辺三角繁簡錯綜絵画の筆法其儘の土地柄では、人事万物之に準じて居る。文化々々と叱られても叱っても、総てがそうは行き廻らぬ。分娩と云う字を解するのは四分位のものであとの六分はお産でなくては分らぬ。分かった様な顔をしても、何所から何所までを云うのか、など分りっこは無い。

そこで本篇を書くに当り、私は大体の七項に亘り色々の風俗習慣を並べて見る。即ち事実を先にして、時代をくっつけることにした。

曰く産室、産床、分娩、消毒、臍帯、産褥、アイヌ産の各項にしました。

ところが偶然と云うものは恐ろしいもの、木内お前のやって居ることを先に書け、と云わぬばかりの出来事が生じた。筆始めの日である。

七月二十日朝八時拙宅での分娩

里〇千恵殿、二回目経産婦三十五才が、突如階上婦長室に早朝の訪れ午前八時、何だか下腹緊張、歩けなくなった。心配だから用意して乗りつけた。予定日に近い。直ちに分娩室へ導きました。・・・略・・・

次頁になったところでパソコンの掲載が途切れてしまった。その後の先生の記事は、国会図書館で閲覧できるようだが、私は小柄なあの先生が、全身全力で分娩に立ち会って、無事出産できたことを想像しながら感服をした。

ご逝去してから本年は四十六年目になる。天寿を全うされたとあるが、私なりに逆算してみたら、九十四歳に没したことになる。

子宝に恵まれたとあるので、先生の概要の項に記載しなかったが、男三人、女三人とあった。時は経てしまったが、木内先生の意志を継ぎ、六人の方々がご健在でありますようにと、私はただ祈るばかりだ。

生前の功績は、知り得た範囲だけを記してみたい。大正元年八月に函館病院に着任のことは前述したとおりだが、翌年同二年八月には、函館医事講究会、二十五周年は公会堂で開かれた。この年、函館の路面電車が走ったので、さぞかし先生は驚いたことだろう。

東京より北では初めてのことであり、仙台より早いという。いかに函館の文化が進んでいるかを脳裏に刻みこんだに違いない。

着任当時の人口は、九万四千人で、戸数は約二万二千、十一年後には、道内六区に市制が実施されたので、正しくは、大正十一年八月一日、晴れて区から函館市となった。

昭和三年に、医師会会長、五年に再選、七年にも再選となり、昭和十三年から十七年と木内先生は医師会会長としての重責を負うこととなる。人望は厚いことはこのことからしてもよく分る。昭和二十九年顧問となるが、前年の四月には、道南婦人科医会を発足し、会長就任する。

私は余りにも無知なことを承知の上だが、一般市民に、函館の医学会ですごい先生がいたことを知ってほしいので、発表された論文をいつの時代にかページを開いてくれるだけで先生を追悼することができるからだ。

昭和三年一月　「印度カルカッタ市で発表癌腫尿診断の新報」

昭和三年九月　「胎盤早期剥離に行へる帝王切開術附子宮供覧」
昭和四年　「卵巣癌の供覧及尿診断の示説」
昭和五年十二月「建設酵素の発見経路」
昭和十年二月　「蛔虫性虫様突起炎の供覧」

昭和三年五月十二日、第三回北海道医師会大会が開かれた。当日朝三発の花火を合図に函館病院に於いて、北海道医師会役員、常務委員及び郡市医師会代表委員よりなる全委員会が開かれ、九時半より公会堂二階大講堂で総勢二百余名が参加した。

座長に北海道医師会長、関場不二彦氏を推し、主催地として木内市医師会長が挨拶を述べ、沢田北海道庁長官（木村衛生課長代読）佐藤函館市長等の祝辞があった。

この行間を読みながら、木内先生が医師会長としてこの会を成功裏に終了させるため、壇上で頑張った姿が想像を越えて胸に迫りくるものを感じた。この席上五人の先生の講演があった。札幌、小樽、東京、七飯、四番目に函館の木内先生が「性難による妊娠を論ず」と題して発表した。

十一時四十五分、岡副準備委員長の挨拶を以て閉会し、記念写真を撮り、昼食後貸切電車で湯の川に赴き三時半から五時まで遊園地で園遊会を開き、六時から八時まで福井家で懇親会を催した。

これらの記録をまとめ、「函館市医師会史」を担当した、阿部龍夫先生の文筆のすごさをため息をつく思いで読みあげた。

阿部先生は木内先生着任時に、函館病院小児科長であり、東京帝国医科大学では後輩に当る。函館中央病院小児科長として赴任してからは、さらに著作を生み、函館歌壇界の重鎮であった。阿部たつをとして、函館新聞歌壇の選者として有名であり、短歌、無風帯社の主宰をつとめていた。

何んという偶然だろうか、私は昭和二十六年十一月十八日に歌壇に投稿をして選ばれたのだ。十六歳の時であった。短歌紀元の主宰。白山友正先生と二人が選者であり、合わせて昭和二十八年三月まで五十首が入選となった。

「我が顔は記憶になくも名前だけ聞きてほほえむ師は老いましむ」

「いささかの交際費に事欠けば同士の会をわれは脱しぬ」（三月九日付）

この短歌の投稿を最後に、昭和二十八年三月十五日、かねて労働契約をしていた、留萌管内・羽幌町の沖二十五キロに浮かぶ、ニシンの千石場所として知られる周囲十二キロの小島「焼尻島」へ、ヤン衆としてふる里を後にした、数えて十八歳の春まだ浅い日であった。

第二次世界大戦が終結してから、七年七ヶ月・・・まるで特攻隊の少年兵のような感じであった。

未知への遭遇・荒くれた男たちの命を懸けた戦場に赴く・・

勇者になれる挑戦でもあった。夜の函館駅は北へ出稼ぎに行くヤン衆で大混雑をした。大漁をしたが私は陸に生活の場を求め、その十年後に木内先生の閉院した病室を住居と定めて四年間先生と同じ空間で呼吸を共にした。

基坂の思い出の中に、前述のように伴侶と共に五十五年目の秋を迎えた。そして再び来年、再び東京五輪を迎えることになった。

今年、木内先生の生誕百四十年になる。先生が好きだった基坂は、私の人生の基坂ともなっている。

人生の山坂を越えながら、人は己の望みをかけて生きていかなければならない。老医師・木内先生の経歴を閲覧しながら、もしかして生れ故郷に近い利根川の大きさを、海のように感じていたかもしれない。

その地には帰ることはなかった。学問の道は厳しい、明治の男の挑戦を研究所の中で、終日、顕微鏡をのぞき若い医師と共に、無言の闘いをしていたことが想像される。

開業したときの記念写真をみて、全部で二十五人、先生を中心にして白衣男女合わせて十五人、子どもの姿もあった。中に一人、木内尿研究所の黒いはっぴを着ていたのは、めずらしい。看護婦九人、白衣の天使の姿が、希望に燃えているように見える。

もう一度、港町の風情を確かめたいものだ。

医療分野を含め、すさまじい早さで進歩をしている。遅れをとることは許されない時代になったが、心のゆとりがなくなってきている。これも現代の世相に呼吸を合わせなくてはならないのだろうか。時の流れに身をまかせていることになる。

五十年前に読んだ本の中に、忘れられない一文があった。「人生の五十歳は、一日にたとえれば午後三時だ。日はまだ高い。だが、急がねばならぬ。」ゲーテの言葉であった。

私はいくたびも木内先生の後姿を見ることがあった。そのたびに次の詩を思い出す。

ボーイズ・ビー・アンビシャス
この言葉はよい
しかし、あまり疲れた人は
しばし路傍の草に腰をおろして
道ゆく人を眺めるがよい
人も決して、そう遠くへはいくまい

ツルゲーネフのいった言葉を味わおう。

日暮れの港町の風情は、一日の疲れを忘れさせてくれる特効薬であり、精神安定剤でも服用した気分になる。

港が見える丘の近くに住んでみて、昭和二十二年に歌われ

た情景が忘れたことはない。
旧公会堂の周辺を作詩したのではないかと思うほど、この地域に住んでいる人たちは、心の中で口ずさんでいたような気がする。

あなたと二人で　来た丘は
港が見える丘
色あせた桜　ただひとつ
淋しく咲いていた
船の汽笛　むせび泣けば
ちらりほらりと　花びら
あなたとわたしに　降りかかる
春の午後でした

作詞・作曲は、東　辰三　は、大正九年、兵庫県に生れた。本名、山上松蔵。神戸高等商業学校卒業。昭和期の歌謡界で活躍した人である。
神戸の港町の情景が作詩につながっていることは、在学中に脳裏から離れなかったのだろう。函館の港町を詩にしたのではないかと思うほど、歌詞は優しく郷愁を感じさせてくれる、メロディーもなつかしい、人を恋しくなるような気がしてならなかった。
歌手・平野愛子は、函館の人にとっては、忘れ難い人となった。作詞、作曲して歌が世に出てから今年七十二年が経ったが、古い歌詞ではない、今も「港が見える丘」は変るところはない。観光客がよく訪れる西部地区は初秋の中にあった。観光客と間違えられるほどこの丘に立ってきた。
木内先生をしのびながら。ペンを終える。

文献　函館市医師会史（昭和三十一年）
助産婦雑誌（一九五六年十月号）（PC）
函館市史
函館名士鑑

ノンフィクション　入選

僕と勘太朗

菊地　政義

上り函館本線・森駅を過ぎると、程なく列車が停まる。駅ではない、姫川と言う小さい山奥の信号所だ。従業員は所長とその部下の両名だけ。その所長の独り息子高橋一君が、四月半ばの日曜日早朝、紺の大きい風呂敷包みを抱え、我が家を訪問したときから、この話は始まる。

「ガサッ！ゴソッ！」包みのなかで異様な物音がする。何か居る。僕は一君の面を窺った。

「実はねぇ！小烏が入ってるんだよ。昨日、姫川の森を散歩していると柏の木の下で此れが這いつくばってモソモソ動いていて、何処かの巣から落っこったんだ」、家に帰り父に、飼って良いかお願いすると、『烏なんてとんでもない、家にはカナリヤを前から飼っている。もと居た処に置いて来い』と叱られた。それで今ここで君にお願いしようと思い、今朝一番で出て来たのさ」

一君は漸く包みを解く。僕は凝視していた。烏は「ケゥケゥ」と力なく鳴いてる。時々「ピクッピクッ」と動く。羽もまだ小さい。肉屋の店頭で見かける肉片のようだ。時々目をあける。白い輪のなかに黒い瞳、これがとても可愛い。まだ物がはっきり見えないのだろう。なんとなくおどおどしている。僕はこの頼りない肉片を立派な大人の烏に育てよう、ひとりで勝手に決めてしまった。一君は安心して次の列車で姫川へ帰った。

僕は両親に烏の子を見せ、家人には絶対迷惑はかけない、世話一切を僕が見る、と云う事で承諾を貰った。

僕はまず小烏に何か餌をと思った。母から朝食の残飯と味噌汁、それに鰯を細かく刻んで、雑炊めいたものを作り、古い手頃な丼に入れて、黄色い嘴の側に置いてみた、最初は見向きもしなかったが暫くおいて見てみると、全部奇麗にたいらげていた、瞳が一層きれいに見えた。

僕は小烏の小屋より先に、名前を考えなければと思った。丁度この頃、街では、勘太朗月夜歌と云う流行歌がはやっていた。軍歌一色の時代にこの歌だ。僕は全部歌うことが出来た。股旅いわゆるばくち打ちの歌だ。学校ではこの歌を禁止した。僕はこの小烏に（勘太朗）と名付けることにした。

さあ、ひるからは勘太朗の部屋造りだ。忙しくなるぞっ、物置をひっかき回し、手頃なりんご箱一個、少し厚めのむしろ一枚、藁を少々、薪一本、ちょっと欠けている皿一枚。我が家は物持ちがいいから間に合わせで、大抵のものは、何でも見付かる。まあ、こんなもので良いだろう。いよいよ作業にとりかかる。

我が家の裏庭は結構ひろい。約五十坪はあるだろう。馬鈴薯・キャベツ・とうきび・その他の野菜をうえている。それでも勘太朗の寝所のスペースは充分だ、庭の左側奥に決めた。古い薪切り台を引っ張り出し、その上にリンゴ箱をガッチリと据えた。それにむしろを半分かぶせる。屋根がわりだ、日射防止だ。あとの半分は手前にだらりと垂らす、これは勘太朗家の玄関だ。あとは藁で寝所を作り、欠け皿を左側の奥におく。風が吹いても飛ばされないように上に薪を据える、これで出来上り、早速勘太朗に引っ越してもらう。最初のうちは落ち着きがなく、モソモソと動きがとれない様に見えたがやがておさまり、例の白に黒の瞳をパチクリさせて辺りを見廻していた。どうやらお気に召したらしい。

大袈裟な表現だが、僕は思い込んだら命懸けと云うやつで、家族の者達も皆それを認めている。母を始め他の兄弟の中にも、勘太朗に対し好意と興味を抱く者が出始めた。それは僕にとっても嬉しいことだ。

もう何日経っただろう、勘太朗は確実に大きくなっていく、産毛も少し黒くなった、羽も同様、目に見えて烏らしくなっていく、家族揃って見守っていた。

午前七時、僕と勘太朗の時間が来る。僕は勘太朗の朝食を持って庭に出る、耳を澄まして近寄ると何がしか音がする。既にお目覚めらしい。玄関をたくし上げる、勘太朗は目をパチクリ、頭と足をバタつかせ食事をせがむ、今朝の献立は烏賊の臓物とその足の刻み、それに我が家の朝食の残りもの残飯少々、味噌汁少々であったが、大喜びで全部たいらげた。勘太朗は本当に食欲旺盛だ。どんどん大きくなるに違いない。

或る日の放課後、学校を終えてめずらしい時間に勘太朗宅に顔を出すと、丁度退屈していたらしく勘太朗は大燥ぎ、はしゃぎすぎて落っこちてしまった。決して飛び下りたと言える様子ではなかった。勘太朗は怪我もせず、すぐに立ち上り、元気に遊びはじめた。帰りはそうは問屋がおろさない、半分も飛び上れば良い方だ。自由に飛び下り、自由に飛び上がって自分の部屋に帰るには、あと一週間の訓練が必要と見た。

勘太朗は本当に利口な烏だ。最近は殆ど庭で遊ぶ事が多くなった。庭には、たくさんの野菜・小花が植えられている。或る日、勘太朗はそれらを小突いて食べていた。僕は人間の子供を諭す様に勘太朗を優しく叱った。あら不思議、以後ぴたりと止んだのである。

勘太朗は成長した。行動範囲も少しずつ広がっている様に見受けられた。

我が家の正面は玄関で、駅のプラットホームに面し、その向こうは内浦湾の海、その又向こうには遠く羊蹄山が望見された。

家の三方は高さ一間、約一・八米、横は全部で二十間、約三十六米の塀が巡り、その上部には幅十二糎くらいの板が細い道路の様に張り巡らされ勘太朗の格好の散歩道として役立った。

勘太朗はここに立ち、街を眺め、馬、牛、犬、猫、鼠などを眺め、駅の乗降客を眺めて、大いに刺激を受けたに違いない。

とにかく彼の知的発達、肉体的成長には目を見張るばかりである。

六月も半ばを過ぎた夕暮れの頃、勘太朗が見あたらない。庭の中、塀の廻りを隈なく捜したが駄目だ。こんな事は初めてだ。

僕は玄関を出て右手五十米程先に、鉄道官舎の共同浴場があり、その屋根の近くで三羽の烏が戯れている。いや喧嘩をしているのだ。少し小柄なのは間違いなく勘太朗だ。

僕は旗ざおをかついで現場に急ぐ。旗ざおを振り廻し二羽の大柄を狙い打つ。手応え大いにあり。当方の損害は軽微であった。

右の肩に旗ざお、左の肩に勘太朗を乗せて悠々帰宅した。

この経験は今後の彼にとって大いに役立ったに違いない。僕は左の肩にずしっと重さを感じた。

七月に入ると勘太朗はもっと奇抜なことをやり出した。家が駅の付近なので構内にはいつも列車が停車している。その屋根に悠然と鎮座し辺りを睥睨しているのである。貨車、客車を問わない。まことに異様な光景である。それだけでは済まない。やがて列車が発車する、動き出す、そのまま鎮座を続ける。どんどんスピードがあがる。上りは新川の踏切、下りは鳥崎川の鉄橋あたりが限界で慌て、舞あがり、悠々帰宅する。こんな事を繰り返しているうちに（あの家の烏）として近所では有名になってしまった。

勘太朗はもう立派な大人である。あの可愛い、円らな瞳はもうない。体もがっしりとたくましい、僕は考えている。リンゴ箱ではもう狭い、もう一つ必要だ。上を寝所、下を食堂にするか、近日中に解決、必至の作業だ。

八月、僕等の楽しい夏休みだ。一日から学校で早朝のラジオ体操が始まる。

僕は（宵っ張りの朝寝坊）だから早起きは辛い。翌朝、母が起してくれた。六時、充分間に合う。僕は家の前に立った。「カーゥ」と烏の鳴声、勘太朗だ、家の前の大きい松の最上段に留まり見下ろしている。僕は軽く笑顔を返し、先を急いだ。街に出て、本通りを急ぐと、突然ビューッと鋭い羽音と風圧、僕は思わず身を交わす、何者っ！おや犯人は勘太朗で

はないか、一体これは、恐喝なのか?それとも歓迎なのか、勿論これは歓迎であった。足踏をし軽く羽搏いて顔はやさしい笑顔ではないか。僕にはそれが良く分かった。

僕の十米ほど前の電柱に彼は止まる。僕が過ぎ去ると、亦彼が追って来て僕の過ぎるのを待って、再び、十米ほど前の電柱に止まる。同じ事を何回も繰り返すうちに漸く学校に到着、一体何本の電柱があっただろう、とても数えきれたものではない。

学校にはもう大勢の生徒が集っている、遠くから彼を探すと奉安殿の近くの黒松の大枝に止まり静かにあたりを窺っていた。六時半体操が始まる。彼に取って、今まで見た事がない不思議な光景の筈だ。

体操が終るとカードに判こを貰う。帰りも例の行動を繰り返す、帰路は羽音も静か、スピードも控えめ、彼は要領を心得たのだろう。家が見えると私より先に小屋に戻っていた。莚の扉は三分の一程開いていた。

さあ!朝食の準備だっ!

勘太朗は大人しくて利口だ。だが何時までもこれでよいのだろうか、堀の中の大将でよいのだろうか。もっと烏の社会に馴染む必要があるのではないか?若し烏の社会にユートピアが存在したら、僕は勘太朗をそこに推薦して送り込みたい。

或る日、僕は家の前に立つ松の木に昇り、遠く駒ケ岳や羊蹄山を双眼鏡で眺めて遊んでいた。ふと下を見ると、駅のプラットホームに、たたみ三畳ほどの四角形が白いペンキで描かれている。我が家の玄関の真正面である。一体これは何の印だろう。

後日、丁度居合わせた駅員に尋ねると、鉄道小荷物、いわゆるチッキの置き場所だと云う。

そう言えば蒲団袋や柳行李、手荷物などを積みあげた風景を見かけたが、真逆ここが指定された場所とは知らなかった。

駅の構内は全部、勘太朗の遊び場所と安易に思っていたが一寸注意しなければいけないと思った。

半月に渡る夏休みのラジオ体操も無事終えた。勘太朗も皆勤である。彼は亦、ひと回り大きくなった。もう立派な青年烏である。

最近、僕は心配の種をひとつ抱えてしまった。勿論それは勘太朗についてである。

体格が良くなり運動量も増している筈なのに、食事の量がだんだん減っているのである。魚の臓物などは外に蹴落としている事もある。

きっと外部で満たしているに違いない。

森の町は漁業の街だ。加工場がたくさんある。聞けば烏の社会にもそれぞれ縄張りと云うものがあり勢力範囲がきめられていると聞く、友達もなく、仲間のいない勘太朗は、うまくやって行けるだろうか僕は心配だ。

学校の図書室で調べたら、烏は鳥類中最も進化した類とみなされ、雑食性で腐肉・魚・ネズミ・カエル・こん虫・鳥卵などの動物質から穀物・果実・液果などの植物質もとり、イエネズミのように人家付近に住むことが多く、耕地から遠く離れた森林には生息しない。知能が高く、銃を持った人と持たぬ人を見分け、針金でしばった巣箱のふたを開いて中のひなや卵を食い荒らすわるがしこさがある事を知った。

また、カラスの形態的特徴は、くちばしが大きく、がんじょうで、上くちばしに刻歯がなく、上縁は凸、鼻孔は堅い毛状の羽毛でおおわれ、脚はがんじょうで後指はよく発達するが第3指よりは小さく、翼は長く先端がとがり、初列風切は10枚、尾羽は長さ中等で12枚ある。

僕は、これらの説明は良く理解出来た。要するに勘太朗は過保護だった。意外とタフなのだ。食事の減量は気にする事はない。

僕は、当分今まで通りのやりかたで行く事に決めた。

僕は毎日午後三時半頃下校する、丁度この頃、勘太朗は、板塀通りの散歩路か玄関前の松の上か、亦は中庭で遊んでいるのだが何処にもいない。

僕は一寸胸騒ぎがした。家人は誰もいない。夕方、父が帰宅する。私が問う前に、父は話し始めた。こうである。

「今日、午後一時頃森駅の助役さんが、事務所に来られ、『家のカラスが駅で扱うチッキの荷札を食いちぎって困ってる、善処願います』と云う話、父さんは鄭重に陳謝した。それで急遽準備して、午後二時頃の貨物列車に乗車させてもらい、姫川の林に解き放して一寸前に戻って来た。元気に飛びたっていったから心配ない」少し淋しそうに言った。

「ありがとう父さん、ごくろうさんでした。」

私はそっと、涙を拭いた。

翌朝、巣箱の取り壊しを始める。寂しい。寝所の藁を取りさり、捨てる、リンゴ箱を物置に戻し、空き缶や、欠けた皿も捨てる、薪切り台はもとの場所に戻す、庭は急に広くなり、もう、勘太朗を偲ぶ何物もない、庭の野菜ばかりが目だっている。

勘太朗は昨晩はどこに宿ったのか。寒くはなかったか。

勘太朗、お前は体格もよい、気立ても良い、すぐに友達が出来る、仲間も増える、そして部落会長になる、やがて村長にもなれるだろう。その暁には、馴れた汽車に飛び乗って、もとの我が家へ遊びに来い。待ってるぞ。

からす　なぜ　なくの
からすは　やまに
かわいい　ななつの
こが　あるからよ

終わり

ノンフィクション

佳　作

ブログより

菱　井　亜　紀

パソコンを取り換えた折、昔書いたまま、すっかり忘れていたブログがデスクトップの片隅にあるのを思い出した。まるで机の隅に置かれてほこりをかぶっていた日記帳といった風に。

しばらくぶりに目にした「韓国ドラマの窓から」と題するブログの、初めの日付をみると２００６年とある。（韓流ブームの先駆けになった「冬のソナタ」の日本放映は２００３年）それから数えるとずいぶん時間がたってしまったことになる。その間、韓流ブームがあり、その後のヘイトスピーチを経て、Ｋポップ隆盛で再ブームが到来したと言われるが、一方政治次元での両国間の確執で、マスコミの嫌韓報道も騒々しい。しかし、たとえ状況がどうであれ、作品の価値そのものは変わらないはずだし、そんなことで評価が変わるのはおかしいと私は思う。そこで、「ほこりを払って」久しぶりにブログを開いてみることにした。

【韓国ドラマの窓から】

２００６年2月

韓国ドラマを見るようになったのは、１０年来ハングルを勉強している友人の影響です。日本の、いわゆるトレンディドラマには無い、濃い人間関係に圧倒されながらも見始めるとすっかりはまりました。背景には歴史や社会情勢が色濃く反映されていて、単なる絵空事でないリアリティを感じます。

よければ、団塊おばさんの独り言にしばしおつきあい下さいませ。

男女関係と儒教の影響

韓国ドラマを観ていて思うのは、男女関係における抑制（性的ないみでの）ということです。「冬のソナタ」でもそうだったように、男女が同室しても性的関係にならない場合が多いのは、さまざまな抑制が働いているせいでしょう。腹違いの兄弟（かもしれない）場合（「冬ソナ」）や兄弟同然に暮らしてきた場合（「ラブレター」・「愛しのおばかちゃ

ん」等）。「ミスキム１０億」や「屋根部屋のネコ」の場合は契約同居という訳アリの状況でしたが、やはり同室でも性的な関係とは無縁でした。実際にはどうなのかはともかく、少なくてもドラマの中ではそのような価値観が働いているということでしょう。よく言われる「儒教道徳の影」をやはり随所に感じます。

ドラマの中の母の影

「冬ソナ」では、主人公チュンサンの母の過去（の過ち）がドラマの展開の重要な鍵になりました。「パリの恋人」「あの日射しが私に」「ラブレター」もそうでしたね。いわゆる「出生の秘密」の原点です。「ごめん愛してる」も自分を捨てた母を憎いつつ裏返しの憎しみや恨みを募らせていく「母恋い物語」として読むことができます。主人公たちにとって母親の影響は絶大です。陰に陽に物語の展開に絡む「母」の存在は、自分も同じ立場（母として娘として）ということもあり個人的にも関心のあるところです。

韓国ドラマにとって母親をはじめとする家族の位置は、とても大きいものがあります。家族の絆の強さに時に圧倒されます。

ところで「秋の童話」の何度目かの再放送があり、久しぶりに観ました。なんといってもウオンビンの存在感（主役でないのにかかわらず）。「秋の童話」はウオンビンにつきる、と私などは断定したくなりますが。しかし一方で母親（生みの母と育ての母）の子に対する愛情の深さにも圧倒されます。かつての日本にも、継母、実の母が登場するいわゆる「母もの」がありましたが、こちらは生みの母が絶対的な価値をもち、継母にいじめられる可哀想な主人公が、やがて愛情深い実の母にめぐりあう、といった構図が一般的だったと思われます。たしかに「天国の階段」のように典型的な継子いじめもありますが、しかし「秋の童話」の場合、母親は両方とも、実の子よりむしろ育ての子に深い愛着をもっているように思われます。血のつながりを重視するといわれるお国柄は日本と同じなのでしょうが、反面、義理の関係も大切にするという面があるように感じます。そういえば「１％の奇跡」でも、ヒロインの両親が血のつながらない子を我が子同様に大切に育て、「あの子は家の次女です」と公言する場面がありました。

いずれにしても、人間関係の濃さをドラマの世界からうかがい知ることができます。今の日本には失われかけているなにかということでしょうか。さまざま考えさせられます。

「ごめん愛してる」と「冬ソナ」

「ごめん愛してる」は、２００４年放映当時から大ヒットした作品。生まれてすぐ捨てられ野生児のように育った

ムヒョクは一見元気でも、自分を捨てた恋人をかばって撃たれた銃弾のせいでじつは余命いくばくもありません。生みの母を探す過程で関わるウンチェに、死を待つだけの自分を揶揄し「可哀想なやつだろう」という場面があります。そういうムヒョクを制してウンチェが言う言葉。「アジシ（おじさん）はちっとも可哀想じゃない。自分を裏切った女性をかばって撃たれるほど胸に愛が詰まった人なのに、誰より豊かな人なのにどうして可哀想なの？だから私はアジシに同情なんかしない・・。」この場面で不覚にも涙が止まらなくなりました。それと、これはどこかで味わった感覚・・とふと思い当たりました。

ご存じ「冬ソナ」の名場面「私はミニョンさんにはあやまりません。あなたは私の大事な物を持って行ったから。私の心を持っていったから。だから私はあなたにはあやまりません」というあの名台詞です。なんとなく似てると思いませんか？

「冬ソナ」と「ごめん愛してる」の倫理性

「冬ソナ」「ごめん愛してる」に共通しているものを「道徳的」と表現出来なくはありませんが、この言葉にはどうも手垢のついたイメージがつきまといます。むしろ「倫理的」といったほうが適切かもしれません。克己心や自己犠牲と言い換えてもおかしくないでしょう。自分のせいで病にたおれた（と思いこんでいる）元彼に己を犠牲にして尽くそうとする「冬ソナ」のユジンと「ごめん・・」のウンチェ。自分に非があるからと己を許さず、元彼のわがままを甘んじて受け入れるけなげさは共通です。そこには非常に強い倫理性がみられます。自分の本当の感情を強く押さえたために、ユジンは生気をなくしウンチェにいたっては幻覚すらみてしまうほどです。

「冬ソナ」のユジンと「ごめん愛してる」のウンチェのとる行動。それは単にやさしいとか優柔不断な性格だから、という以上の、非常に強い倫理観が働いていると思われます。「冬ソナ」のユジンは、ミニョンへの愛を胸にたたみ、婚約者サンヒョクのもとへ。ウンチェは、ユンの事故は自分のせいと思い、彼の側を離れられずムヒョクへの思いを募らせます。いずれも自分一人の幸せを求めるのは罪だという罪悪感から逃れられないでいるのがわかります。都会で仕事を持つ３０に近い年齢のキャリアウーマンであるユジンは、まだ己を失いませんが、ウンチェは自分の感情を抑圧するあまりとうとう幻覚をみるまでになります。ここも泣かせる場面でしたね。

「ごめん愛してる」と「冬ソナ」その２

「ごめん愛してる」と「冬ソナ」との共通点について、台詞もそうですがヒロインたちの人へのやさしさがあげら

れます。自分のプライドや好き嫌いの感情の赴くまま行動するのはひらたくいえば我が儘ですよね。「冬ソナ」ではユジンの元彼サンヒョク、「ごめん・・」ではムヒョクの実の弟ユンの行動がまさにそうです。対照的にヒロインであるウンチェは、一貫して自分より相手のためによかれと思う行動をとります。それも、ごく自然にでてくる行動でこれはもう天性のものだとしか言いようがありません。「冬ソナ」のユジンにも同様の傾向があります。病気になった元彼にどうしても冷たくはできない、それが優柔不断とも映りますが。ウンチェも、自分を必要とする人に対して冷たくしたり、むげに見捨てたりできない人間です。人に対する生来のやさしさをことあるごとに発揮します。寒さに震えるホームレスに自分の上着を脱いでわたすなどちょっとできることではないと思いますが。

「ごめん・・」のウンチェの行動は、「人間としての気高さ」さえ感じさせます。たとえば、知的障害のあるムヒョクの双子の姉に対する態度にそれはよくあらわれています。初対面の彼女が粗相して恥じているのを、とっさに「私もお漏らしすることがあるの」といって安心させる場面。それを目の当たりにしたムヒョクの心がまるで氷がとけるように急速に彼女に傾いたのも理解できる気がします。彼は親の愛や家庭の教育に恵まれなかった生い立ちから、粗野な言動を取って誤解をまねくこともありますが、根っから粗野な人間ではありません。そのことは姉親子やウンチェに対するやさしさでわかります。

親の責任ということ

「ごめん愛してる」のムヒョクの母の行動について、さまざまな書き込みを読む限りでは、「いろいろあっても、子供を捨てたことを知らなかった（死産だと告げられた）のだから本人に罪はない」という意見が圧倒的に多いようです。むしろ子捨てを実行したウンチェの父が悪人になっています。この秘密は墓まで持って行く、というウンチェ父。彼はムヒョク母の家の使用人というだけでなく、彼女に特別な感情があったのではないでしょうか。そうすることが女優である彼女のためだと信じ、あえて悪役を買ってでたのでしょう。（ところで「子捨て」については、韓国と日本で感覚の違いがあるかもしれません。「サンドウ学校へ行こう」などを見る限りさほどの罪の意識はないようにみえます。）

しかし、知らなかった、というだけで免罪されるようなことでしょうか。もっといえば知らなかった事自体が罪ということは言えないでしょうか。厳しい見方かもしれません。でも自分も子供の母親という立場だからこそそう感じます。ムヒョクの母は、もとはといえば不倫によって身ごもった自分の罪があり、産んだ子が死産と聞かされてそれ

を信じ込んでしまったうかつさがあります。その結果として不幸な生活を送ることになった実の子に、やはり彼女は責任があるはずです。なにもかも人任せにしてきたつけを払うべきはそのもとを作った本人です。

なぜそんなことに拘泥するかというと、ある人の言動に彼女のそれが酷似しているからです。その人も国の「親」といわれ、その人のために多くの「子」が障害者になったり死んだりして不幸な目にあったのですが、結局責任を問われませんでした。直接命令したのは下の者だったからです。しかしその命令は、とりもなおさずその人の命令でした。その人の場合、彼女などよりもっとずっと多くの人の人生を狂わせたにもかかわらず、そういう文学的なことはわからない、ととぼけ切ってとうとう死ぬまで責任をとろうとしませんでした。

言いたいのは、結果責任は負うべき、ということです。それが人としての道だからです。彼女が事実を知ることがあったとしたら、激しい自責の念に苦しむでしょう。でもその苦しみから、自分のために不幸だった息子の霊を一生かけて慰め、遺された障害者の娘とその子を守っていくことで罪償いをしようとするでしょう。

希望的観測で文学的すぎる解釈だ、といわれるかもしれません。でも、人として生きることは、ある意味とても文学的なことなのだと、今私は思っています。

家族の絆あるいは呪縛

「happy together」の何度目かの再放送を久しぶりに観て。

主人公の一人ソン・スンホンが、親戚の借金のために家や職を失う局面に陥り、お金の工面のため婚約者を捨てて資産家の娘との結婚を決意するという場面がでてきて、親戚の借金にそこまで責任を持つ必要があるのかと疑問に思ったのを思い出しました。韓国社会での親族の絆の深さということかもしれませんが。「結婚したい女」の中にも、病気の父とそれを看病する叔母親子の生活を支えるため結婚できずにいる友人がでてきました。核家族化の進んだ今の日本では考えにくいことですがそれだけ人間関係が濃いということでしょうか。兄弟姉妹に対する思い入れの強さにも圧倒されます。「happy together」のイ・ビョンホンも血のつながらない兄弟たちに疎まれながらも長男として兄弟たちの役に立とうと奮闘します。最初に観たときちょうど「美しき日々」でクールな御曹司ぶりに接したばかりだったので、彼のあまりの変身ぶりにおどろきました。それだけ役柄の幅をもった役者ということなのでしょうね。

韓国ドラマの家族

「1%の奇跡」について。その重要なテーマの1つは、

家族とそのあり方についてだろうと思います。ヒロイン、タヒョンの家族は、本人はもちろん両親も兄も他人を受入れる懐の深さをもっていて、貧富の差で人を計ったりせず、財閥の前でも卑屈になったりしない人々です。

もっといえば、男女の役割分担意識をも軽やかに飛び越えようとしているように思われます。もちろん肩肘張って男女差別反対を唱えているわけでなく、さりげなくですが。タヒョンが仕事で忙しい夫に家事を分担させるところ、古い世間の常識にとらわれない自由な発想を感じさせます。しかしそれは、家のことを家族みんなで受け持とうという意図からで、それが家族の一員としての自覚につながっていくことになるという考え方が根底にあるからでしょう。

肩のこらないホームドラマでありながら、考えさせられることが多々あります。

「1%の奇跡」と性善説

コメディ全般がそうだとはいえませんが、「1%の奇跡」に関していえばその根っこにあるのが性善説だという気がします。どんなに性格や相性が悪かったとしても、お互いの努力で、もっといえば相手への対し方次第で関係は変わりうるということが表現されています。関係修復の可能性がたとえ1%しかなかったとしても、その可能性を信じ相手を信じる心があれば状況は変えられる。それはつまり人間への信頼ということでしょう。たとえば、ヒロインであるタヒョンが、彼女に嫉妬したある女性にひどい目にあわされかけます。夫チェインは怒って、やられたらやりかえすのだと息巻きますが、タヒョンはそれを制して、彼女も反省しているのだから戦うのはやめてといい、「人を許せばそれがあなたの財産になる」ともいうのです。そして結果はその通りになります。この話を敷衍すると、国と国との関係にもいえることかもしれない、とも思います。深読みかもしれませんが、小説にせよドラマにせよ、優れた作品というものは、さまざまな解釈を許容するものだといわれます。はじめは、よくあるパターンのラブコメと思って見始めたのですが、所々で考えさせられる場面が多くあったドラマでした。

興味深いのはDV（家庭内暴力）が間接的にでも、でてくること。「ローズマリー」にもDVがかなり重要な背景としてでてきました。ペ・ドウナが父親のDVを許せないまま父の死にであう場面、哀切でした。いい作品でしたね。

それはさておき、「1%・・」ですが、ヒロイン、タヒョンがDVから親友を守るため自分の家に住まわせてしまう、というのは実際にあり得ることなのかどうか、とは思いますが、DVそのものはたぶん多いということなのでしょうね。

財閥が、ドラマのようにマスコミに追い回されるという

のは実際あるかどうかはわかりませんが。まあ、ドラマだからいいですけど・・。

「砂時計」の時代

「砂時計」は８０年代の韓国の、政財界や裏社会までが結託した権力に対する民主化運動の過程で、時代に翻弄され葛藤する若者たちを描いた伝説の作品。１９９５年の放映当時、人々の帰宅時間を早め「帰宅時計」といわれ社会現象にまでなったそうです。

警察の拷問場面は、まるで日本の戦時中の特高警察の拷問のよう。警察の拷問ではありませんが「初恋」(ペヨンジュン主演の)にも、やくざによるリンチのようなシーンがありました。権力、金力をもつ者が、それに逆らう「持たざるもの」を徹底的にいためつける点は同じです。考えてみるとこの国はほんの２０数年前まで独裁政権だったわけで、権力に逆らうものにはとくに人権など無いに等しかったのでしょう。光州事件も市民の側からみれば民主化闘争であり、自国の若者同士が血を流さなければならなかった悲惨な体験として人々の記憶にとどまっているということではないでしょうか。

ひるがえって今の日本をみると本当に自由と人権が保障された民主主義社会なのかどうか疑問を感じます。日本の権力が、たとえばイラク人質事件の時のバッシングのように、自分に逆らうものに対してある種の陰湿な圧力をかけてくる構図にどこか重なって見えてしまうからです。自分には関係ない、と思っているうちにいつのまにか「茶色の朝」(仏の寓話絵本) がやってくることはないでしょうか。それが取り越し苦労であってくれればいいと思います。

「砂時計」の暴力シーン

暴力、陰謀、裏切りなど人間社会の陰の部分をこれでもか、というふうに描かれると直視するのが正直なところ苦痛になってきます。この作品が、巷間いわれるような名作なのかどうかも途中視聴の段階ではまだ判断はできません。しかし、発表当時の韓国国内で、人々がこの物語に釘付けになったほどの作品だったことはまちがいありません。だとすれば、現在の私の物差しからではなく、当時の韓国の視聴者の視点（現実にはもちろん無理ですが少なくても理解しようとすること）が必要でそのためには歴史の事実を知ることも不可欠だと思います。といっても朝鮮史を教科書でおさらいするということではなく、長年にわたった独裁政権下で人々の生きる知恵もまた長年にわたって培われたのだろう、ということへの理解と共感を持つといういみです。

グリム童話がブームだったころ、おとぎ話は実は残酷なのだと盛んにいわれました。しかし、おとぎ話は素朴に現

実を反映しただけであって、物語の残酷さは時代のもつ残酷さなのだという意味のことを書いた研究者がいました。それに倣って言うと物語中の暴力も時代の凶暴さの象徴ともとれますし、時代や社会に対する人々の憤りや焦燥の現れ、とみればある意味わかりやすいともいえます。（個人的にはあまり見たくはないシーンではありますが。）

暴力シーンが嫌いなわけ

なぜ暴力シーンが嫌いかというと、すべからく争いごとが嫌だからです。それは個人の争いだけでなく戦争のような国家間の争いもふくめてです。だから北風か太陽かと問われれば迷うことなく太陽を選びます。性格ということもありますが、これはもう長年生きてきて獲得した生き方のスタンスと言っていいと思います。

もちろんそれはいい悪いの問題でないのですが。でも、たとえば、ある国が困ったことをするから罰するため攻め込んでもいいのだ、というのは1つの理屈です。しかし空から爆弾を落とす理由が、それが正義だからといっても、落とされる側にとってそれは納得できることでしょうか。もちろん国家と民衆は分けて考えなくてはならないでしょうし、そう単純に比較できませんが。

このことについては、言いたいことはたくさんあるのですが今日のところは1つだけ。簡単にいうと、自分がその立場になってみたらどうだろう、ということなのです。たいていの争い事は自分が相手の立場だったら、という発想がないことからはじまるという気がしてなりません。もしそれがあれば、同じ暴力に見えることもきっとずっと違ったものになるはずだと思います。

惚れるということ

ドラマの中の男女が恋に落ちる条件、などというと理に落ちる感じで「恋に理屈はいらない」といわれそうですが、ただドラマ展開の上でリアリティを感じるかどうかは大事なポイントだと思うのであえて考えてみることにしました。

「可哀想とは惚れたってことよ」という言葉を聞いたことがありませんか？私もどこかできいた言葉だとずっと思っていましたが、漱石の「三四郎」の中にでてきた言葉だったようです。

なぜそれを思い出したかというと「宮」の中でヒロインであるチェギョンがシンを好きになった動機が「寂しそうで可哀想だった」こと。それとシンの恋敵ユルがチェギョンを好きになったのも「孤立していて可哀想だったから」というものでした。同情が愛情に変わるということはたしかにあることですよね。

今観ている「アイルランド」でもヒョンビンが演じるグクがイ・ナヨン演じるジュンアを好きになった理由が、頼

りなげで「可哀想だから」でした。
ところで「宮」も新たな展開をみせはじめたようです。「可哀想」が「愛情」に転換するなら、それが「憎しみ」に転換することもまたありうることでしょう。さて今後どんな展開になっていくのでしょう。

「キムサムスン」
さて、「私の名前はキムサムスン」について。じつは再視聴することになって、主演したキム・ソナの書いた本を手に入れました。「キム・ソナが案内する私の名前はキムサムスン」です。彼女は日本とアメリカに住んでいたことがあり、長年ピアノも弾いていたとありますから、ドラマの中では英語も出来ずピアノもだめという設定ですが、実際にはまるで逆なのですね。ストーリーもさることながらなんと言ってもサムスン役のキム・ソナの圧倒的な存在感がこのドラマの魅力でしょう。彼女はあまり台詞を事前に暗記したりせずリハーサルの折その場の雰囲気や相手役との間合いで覚えるそうです。このドラマのようにリアリティが大切な場合、感情もその場に応じて変化するからだそう。だからアドリブもかなりあったようです。たとえば、3話でジノンと恋人の振りをすることになったサムスンが、ジノンの母であるナ会長に会う場面がありますが、愛しているかと聞かれて、手でハートのマークをつくったのは、アドリブだそうです。
サムスンを演じたキム・ソナが役作りのため8キロ太ったというのは有名な話ですが、このほかにも彼女自身の役に対する工夫が随所にあったようです。レストランの面接で、履歴書の写真を「修正したでしょ？」といわれ「ええしました。」とためらわずに言う場面、印象に残っていたのです。普通なら口ごもってしまうところですよね。それを、彼女は「サムスンは後ろめたいことをしたわけではなく、ただ自分をかわいくみせたかっただけだから、彼女の性格なら多分悩まず答えるだろう」と思ったそうです。それであのように無表情の答え方にしたのだとか。あれはキム・ソナ自身の解釈と判断でサムスン像をえがいてみせた場面だったのです。
ドラマのエンディングの、めでたしめでたし、という終わり方、涙涙の終わり方、いずれもありがちな「いかにも」と言う感じがします。もっとも、それだけに観ていて安心ということはあるのですが・・。
それに比べて、「私の名前はキムサムスン」の終わり方。最終回、すったもんだの末、サムスンは御曹司との結婚という「絵にかいたような幸せ」を得られるのか、と思いきや、それは彼女の妄想で、実際はまだ進行形の現実の中。御曹司の母の許しもない不安定な状態の中、今はしあわせでもいつか別れがくるかもしれない、それでも後悔しない、

というサムスン自身のことばで締めくくられます。
この終わり方は概ね好意をもって受け取られたようです。それまでのサムスンの言動から彼女の人となりを知る視聴者には、自分の意志をはっきり表現できる自立した女の潔さをそこから感じ取れるからだろうと思います。絵空事ではない現実にしかと向き合うサムスンの心意気に乾杯。

「復活」

「復活」にはまっています。物語展開の早さと、人物造形、脚本がしっかりしていること、それに主役のオム・テウンの演技力が、「復活パニック」といわれるほど、この作品がヒットした理由でしょう。なんと言ってもオム・テウンの魅力。いわゆる美形ではない俳優さんですが、表情になんともいえない魅力があります。他を受け付けない冷徹な表情とふっとみせる悲しげな表情との落差、片方の唇をゆがめるようにして作る微笑、それがそのまま泣き顔ともとれる不思議な表情に変換していく間合いの妙。今観ている他の作品のイケメン俳優の演技がすっかり間延びしてみえてしまうほどです。3分の2まで視聴したところですが、しばらくは「復活」とオム・テウンにはまってすごすことになりそうです。

「復活」最終回を見終えてしばらく虚脱状態です。いわゆるハッピーエンドではない、なにかしらざらざらしたものが残る終わり方、とでもいうのでしょうか。でもそれも、単純な復讐劇ではない、苦悩を背負ってしまった人間の、非常に人間的なドラマということなのでしょう。「復讐とは、自分が受けた苦しみをそっくり返すこと」という台詞がでてきますが、それならば復讐を果たして後、その苦しみがまた同じように自分に返ってもくるということですよね。オム・テウン演じる主人公は、そのことを良く理解しています。だからこそ懊悩も深いわけで、時折見せる泣き笑いのような、なんともいえない表情にそれはよく表現されていたと思います。ともあれ、細かい伏線や丁寧な人物描写、最後まで緊張感のとぎれない物語展開、それになんといってもオム・テウンの表情の演技にすっかりはまってすごした日々でした。

「がんばれクムスン」

この作品がヒットしたのは、いわゆる根性もの、のようなクムスンの苦労物語だけでないなにかがありそうです。３０分、１６０数話という長丁場では、ストーリーだけでなく、登場人物たちの人物設定がしっかりしていなければ。もちろんクムスンの人物像が一番のポイントでしょう。度重なる不幸や困難にも、ただ耐えるだけではない凛としたものを感じさせます。それはクムスンの生き方の姿勢にピンとした筋がとおっているからでしょう。

意地悪されても泣き寝入りすることなくきちんと自己を主張し、誤解されたと知るや追いかけてでも誤解をとこうとする姿勢、なにごとにもあきらめずねばり強く立ち向かうファイト、それは持ち前の性格もあるでしょうし、彼女を育てた祖母の生き方の姿勢でもあるでしょう。「恩を返さないのは人じゃない、とハルモニに教わった」という台詞がでてきたりするように、人としての生き方の芯がきちんとできています。

なんといってもまっすぐにものをみる強さが彼女の魅力です。私たちが失なってしまった何かがここにはある、という気にさせられもします。印象的なのはハルモニの言葉です。「親なしで夫にも先立たれお金もない、それでも泣き言を言わないクムスンはえらい、表彰状をあげたいくらいだ」と励ますところ。泣かせますね。クムスンが度重なる試練に「どうして私ばかりこんな目に遭うの」と泣き言をいうと「涙は最後まで取っておくものだ。おまえは死ぬほど努力したかい。してないだろう。涙はいよいよすることがなくなった時暇つぶしに流すものだ」とさとす場面などは、ハルモニの人生訓といっていいでしょう。(暇つぶしに流すもの)という表現など、なかなかできることではありません。泣いている暇もないほど必死で生きてきたということでしょう。すごいの一言です。

親子、祖母と孫の肉親はともかく、義理の関係の女同士の関係はなかなかシビアです。姑と嫁の確執はどこの国にも有るのでしょうがハルモニと叔母のやりとりも歯に衣きせぬ言い方で辛辣です。でも心の中ではお互いのことを認めあっているのですね。

「ありがとうございます」

lalaTVで放映中の「ありがとうございます」は、素朴な田舎の純真な女性がヒロイン。祖母あるいは祖父の面倒を見、年寄り(弱者)を大切にする女性と反抗的な態度の男性の取り合わせは「明朗少女成功記」「1%の奇跡」「めっちゃだいすき」にもみられました。礼儀をしらない男を毅然として叱咤するのもヒロインの役割で「ごめん愛してる」もこの系列といえるでしょう。あえてパターン化すれば「田舎」あるいは「素朴な女性」に象徴される人間の純粋さと「都会」のもつ功利的な冷たさとの対比といえなくもありません。最終的に「純粋さ」に軍配があがるという結末なのですが、そのあたりが今の日本のドラマにはない発想でしょう。(もしあったとしても非常にうそっぽくなってしまうのは現実世界がそうさせるから、つまりそのような価値観自体いまの私たちの社会からは失われてしまったからでしょう)

ヒロインが認知症の祖父の行為をそのまま受け入れる姿に「ごめん愛してる」のウンチェが知的障害の女性に自然

にとった態度を思い出しました。何気ない行為としてみすごしてしまいそうな場面に、韓国の価値観と日本のそれとの違いを強烈に思い知らされた気がしました。

　ところでこのドラマを「ハートフルストーリー」と紹介しているサイトがありましたが、この言い方（多分一頃流行った癒し系という意味でしょうが）にはなにかちょっと違和感があります。きっと今の日本の現実から発想した言い方でしょうし、それはそれでわかるのですが。むしろ生き方として当たり前の姿勢を示したい、というのがこのドラマの意図ではないかとそんな気がしています。

最近の韓国ドラマ

　すっかりご無沙汰しているうち、ＢＳはもちろん地上波でも頻繁に韓ドラが放映されるようになって韓国ドラマはもうすっかり日常にとけこんでしまった感があります。いいことか悪いことかは判断しかねますが…。Ｋポップブームでいわゆるイケメン人気歌手主演ドラマも多くなり、若い女性も韓ドラに顔が向くようになってきました。選択肢が増えることは大事なことですし韓国ドラマの裾野がひろがるのもよいことだとは思います。ただ、単に人気歌手が主演というだけで内容の薄い作品も増えているのでは、とちょっと危惧したりもします。もっとも日本の放送局は日本でヒットしそうなものを買い付けるのでしょうから、韓国での人気とは必ずしも一致しないかもしれません。

　現に、演技派でも、いわゆるイケメンでない俳優さんはちょっと敬遠されがち、なのではないでしょうか。じっくり作品を味わいたい向きにはちょっと残念な傾向という気がしますが・・。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

　ブログはここで終わっている。ブログの中断は、私が母の遠距離介護で時間がとりにくくなったことが一番の原因だ。

　母を見送って時間ができ､新たな作品を観始めたものの、ブログを再開するだけのエネルギーが持てずにきてしまった。読み返してみると、日本と韓国との違いと共通点とについて思いを巡らせることができたし、両国の関係の歴史にも思いをはせることができた。新たなブログを書くきっかけにできればと思う。

ノンフィクション　佳作

無題

宮川　れほ

　私は、先天性の心臓病で幼い頃からたくさん我慢をしてきました。毎日のように体調が悪く、心臓が苦しくなり、薬を飲んで安静に過ごす日々がずっと続くのだろうと思っていました。運動が大好きな私にとって、小、中学校生活はとても辛かったです。

　中学三年の時、私の人生を大きく変える出来事が起こりました。心臓の苦しさが日に日に増していき、限界を感じた私は主治医のもとへ。一度検査をしてみようと大きな病院へ回されました。そして、想像以上に心臓が大きくなっていて、手術をしなければならないと言われました。同時に、この手術を受ければ、運動制限も当初よりはずっと改善され、高校にも通えると告げられました。色々な思いが込みあげ、私は母と号泣したのを今でも覚えています。闘病生活は、毎日泣き崩れ、痛みに耐え、時々死を思うほどでした。

　今思えば、こうして乗り越えられたのは家族のおかげだと思っています。何も言わずに足をずっとさすってくれた父、文句一つ言わずに、ずっとそばにいてくれた母、本当に感謝しています。

　ようやく回復し、退院することができました。無事に高校に通うことができ、出会いに恵まれ、幸せな日々を過ごしています。

　あの手術から二年が経ち、これから先も心臓病という障がいは消えませんが、命の大切さ、あたりまえがあたりまえに出来ることではないということを学びました。そして、これからの未来も、高校で出会った友人たちも私の一生のタカラモノになるでしょう。そして、たくさんの人に感謝し、精一杯生きていきます。

ノンフィクション　佳作

『紀元前十一世紀の倭人国』考

高橋　剛治

1　『漢書』と『論衡』

日本の事が初めて中国史書文献に登場するのは西暦一世紀頃、後漢の班固らによって著された『漢書』（前漢書と呼ぶ場合もあり）の「地理志～燕地」の中での次の記載です。

「楽浪海中に倭人有り。
分れて百余国と為る。
歳時を以て来り、献見す、と云ふ」

この文章は、西暦紀元前後二世紀頃の漢代の日本の様子を述べている、と現行の中学、高校の歴史教科書等でも紹介されている有名な文で、四十年以上前に私も習いました。

解説を加え、要訳します。

「倭人と呼ばれた古代日本人は、朝鮮半島の楽浪（らくろう）の東の海上の地に居住し、分かれて百幾つかの国を形成している。定期的に中国に使者を送って来た、と伝えられている」

と、言う内容です。この倭に関する基本データは、この史書に続く『後漢書』の「東夷伝」、『三国志』の「魏志倭人伝」等、以降の中国史書にも認識は継承されて行きます。

次の通りです。

『後漢書』「東夷伝」
「倭は韓の東南、大海の中にあり。山島に居住する。」
『三国志』「魏志倭人伝」
「倭人は帯方の東南、大海の中にあり。山島に依り国邑を為す。」

独立した倭（倭人・倭国）伝を初めて中国正史に立てたのは、扱う歴史時代的には范曄の編纂した『後漢書』なのですが、書物の成立時期では後の時代を扱った陳寿編纂の『三国志』の方が先で、『後漢書』の百五十年前の成立なのです。その意味では最初に倭伝を立てたのは『三国志』と言う事になります。因みに『漢書』には、後述しますが独立した倭伝はありません。

さて、その『後漢書』には一、二世紀頃の倭の様子が記されていて、紀元五七年に委奴国の使者が洛陽に赴いて、後漢の初代皇帝である光武帝から印綬を授けられた、と言う重要な記事があります。それが江戸時代に志賀島から発見された「漢委奴國王」と刻まれた印章だとされています。更に『三

国志』では三世紀頃の倭の様子、卑弥呼の邪馬壱国の事が記されています。今日でも論争の多い部分ですが、ここではこれについての詳論はしません。この小論が主に取り上げるのは、『漢書』以前の時代の倭人と倭国について記載された文書とその私的考察です。

『漢書』の成立した同時代に、王充と言う人が書いた『論衡』（ろんこう）と言う歴史思想文書があります。純粋な歴史書ではありませんが、実はこの本に倭人の事が四ヶ所程出てきます。

次の通りです。

1、「周の時、天下太平にして、倭人来たりて暢草（ちょうそう）を献ず。」

（巻五異虚編）

2、「周の時天下太平、越裳白堆を献じ、倭人鬯艸（ちょうそう）を貢す。」

（巻八儒僧編）

3、「暢草倭より献ず」

（巻十三超奇編）

4、「成王の時、越裳（えっしょう）雉を献じ、倭人暢を貢す。」

（巻十九恢国編）

どれも同じ内容を伝えたものですが、成王とは周王朝の二代目の天子で、紀元前一一世紀頃の王です。つまり周王朝が殷（商）王朝を倒し、新しい国造りを完成した初期の頃、遙か遠方の倭人と越裳とがお祝いの品を持ってきた、と言う内容が書かれているのです。越裳とは今のベトナム辺りの国、だとされています。

ところがこの文章の存在自体は知られていましたが、歴史学界においては、その真偽は長く否定され、無視されてきました。それで今でも教科書等では取り上げられてはいません。その理由と言うのが、紀元前一一世紀の「未開」の縄文人にはそのような国家外交は無理だ、と言う偏見でした。私が学生だった三、四十年位前までは、縄文人は「未開」狩猟民とのイメージに囚われていました。現在でも、例えば岩波文庫『中国正史日本伝1』の解説欄において、

「これら〔王充の書いた『論衡』の倭人の記載〕を周代倭人にかんする知見とはかんがえられぬから」、後漢代の情報が混在したのだろう、と一蹴されています。

例外的にこの文書に、何らかの信憑性を認めた学者はいて、その中には『騎馬民族説』で有名な江上波夫氏がいましたが、暢草を鬱金（うっきん）草（＝ウコン）と解釈し、鬱金の名産地である中国鬱林郡の近く、江南辺りの倭人だろう、と推定されました。他に少数ですが同様の意見を述べた方がいますが、同じように、この文書に資料としての何らかの価値は認めながら、それを日本列島の倭人とは解釈せず、中国江南辺りにいた倭人だ、と述べています。当時、後の弥生時代にこの辺りから日本列島に稲作を持って渡来し、原（縄文）日

本人と融合、稲作を伴う弥生日本人を形成していった、と言う学説や、後に日本列島に進出する大陸各地に広がる原日本人の一団に対する中国側の倭人呼称の使用説（例えば、鳥越憲一郎氏等）が強く、現在でもそれらの説は残っています。

それは例えばウィキペディアで、『倭・倭人関連の中国文献』の項目を見ると、前出の『論衡』と、その文書の記載はありますが、解説として、

『『論衡』では、倭は中国の南の呉越地方（揚子江の下流域の南付近）と関連あると推定しているようである。」

と記述があります。（令和元年九月現在）

同様に『倭人』の項目でも、

『『論衡』に「倭」「倭人」についての記述がみられる。しかし、これらの記載と日本列島住民との関わりは不明である。」

と、岩波文庫や先の学界説に近い記述があります。（令和元年九月現在）

確かに、少し前までは日本列島の縄文倭人に対する抜きがたい後進イメージが定着していたのですが、現在は、考古学等の発達により、日本列島での稲作の開始時期が紀元前十世紀辺りまで早められ、その縄文水田や黒曜石の分布等から想像を超える広範囲の縄文交易が判明しています。それによる歴史学界の「弥生時代の年限の繰り上げ」が検討、実施されてきています（紀元前二世紀から紀元前五世紀への繰り上げ）。

けれどネット記事やウィキペディア等を見ると、今だに前記しましたように、『論衡』の記事自体は認識していても、高度な列島縄文文明の認識には届いていないようです。

この『論衡』記事を取り上げ、最初に歴史事実とされたのは古田武彦氏でした。一九七八年の著書の『邪馬一国への道標』の第一章「縄文人が周王朝に貢献した～『論衡』をめぐって」において、これを述べました。そこでは、この倭人が日本列島の倭人である事と「紀元前十一世紀における、倭人の周王朝貢献」を論証しました。お話の進行上、次の章でそれを取り上げます。

2　古田武彦氏の学説について

古田武彦氏は平成二十四年に亡くなった歴史学者ですが、俗に言う「邪馬台国」（氏は「邪馬壹国」と述べる）問題での画期的な解読と、従来の定説である日本古代史における近畿天皇家の一元史観ではない多元古代史観により、古田史学と呼ばれる多くの著作を発表されていますが、この小論では収まり切れませんので、詳細はしません。興味のある方はウィキペディア等の検索と同氏の著書をお読みください。

古田氏はその論証の中で、『論衡』の作者王充と『漢書』の中心著者である班固の関係が、後漢光武帝の主催する太学（官立大学）の先輩後輩であり、後漢の官僚群に連なる当時のアカデミーの中に存在した事、つまり漢代知識人共有の歴

史常識、認識を持っていた事を述べています。
そこから、従来この部分だけを抜き出して解釈されてきた『漢書』の文章、前記の「楽浪海中に倭人有り～」の、前の文書を含めた全体から、その解釈を展開させてゆきます。実はこの『漢書』の文は全体の末尾にあるのですが、この文の前に何が書かれているのか、次に引用します。

「貴（き）む可（べ）き哉、仁賢の化や。然して東夷の天性柔順、三方の外に異る。故に孔子、道の行われざるを悼（いた）み設（も）し、海に浮かばば、九夷に居らんと欲す。以有也夫（ゆえあるか）」

この後に「楽浪海中に倭人有り～」の文が続きます。解説を加え、要訳すると、

「このように貴い、仁賢の化により（これは、この文章の更に前文で、箕子が中国から朝鮮に行き、現地の民を教化したという内容を受けた文です）、東夷だけは天性従順で、三方（北狄・南蛮・西戎）と異なっていた。だから（箕子より後の春秋時代の）孔子が、中国で正しい道の行われないのを嘆き、海に筏を浮べ、九夷に住もう、と望んだエピソードには、このような経緯があるのです。」

これに続いて、その倭人と言うのは、との説明に、「楽浪海中に倭人有り～」の文が続くのです。補足しますと、前述の通り、この『漢書』の「地理志～燕地」は後に続く『後漢書』の「東夷伝」や『三国志』の「魏志倭人伝」とは違って、倭人を語る為の独立項目として、この文言を取り上げているのでは無く、燕地とある通り、中国北東部、朝鮮半島の北側にあった燕と言う地方及びそこに存在した国を記載した後、その関連付属記録として書かれ、そこに引用された文書なのです。

又、箕子について説明すると、紀元前千百年頃の人で、殷王朝最後の紂王の叔父です。殷滅亡後に、周の武王により、礼を持って楽浪に封ぜられ、周辺の東夷に礼儀や農事・養蚕・機織の技術を広め、また刑法を実施して民を教化した後、周の第二代天子成王と、その補佐役として政治を司っていた周公旦に拝謁した人物です。中国最初の歴史書『史記』に登場します。又、私の愛読する宮城谷昌光氏の殷周革命の時代を扱ったデビュー小説、『王家の風日』の主要登場人物です。

孔子が敬愛してやまなかった周公と成王の国、その周に初めて貢献した東夷が、箕子の（教化）を受けた倭人であったのです。

更に孔子について言えば、紀元前六世紀、春秋戦国時代の人ですが、前文で紹介したエピソードは、『論語』公冶長第五の、

「道行われずば、桴に乗じて海に浮かばん　我に従う者は、其れ由か」

という一節を受けています。孔子の言う、桴に乗って向かう九夷（東夷）とは、山東半島の対岸の朝鮮半島などではな

く、島に住む東夷の国という認識です。大陸の民にとっては、陸で行ける土地へ、わざわざ桴に乗って行くというのは特殊なことで、桴や舟でなければいけない土地と考えると、自然な解釈で海中の島に国を成す倭人なのです。

以上から古田武彦氏は、『漢書』「地理志～燕地」の「楽浪海中に倭人有り～歳時を以て来り、献見す、と云ふ」の解釈は、教科書に記載され、従来言われているような、前漢代の出来事を述べたものではなく、

「箕子が教化し、孔子が行ってみたい、と言っていた東の海にある百余りの倭人の国は、代々取次の国を介して周王朝に貢献して来たのだ、と伝えられている」

と言うのが、文意だとされました。つまり現行の通説は、この文の誤読なのです。文頭の「楽浪海中～」の語に、漢代に建てられた「楽浪郡」に引きずられ、漢代の出来事と錯覚しがちですが、文末の「～と云ふ」の表現からも、これが漢代の事であれば「献見す」で切られる、と述べ、以下の様に続けます。

「勿論「～と云ふ」と言う表現は、不確実な伝聞ではありません。大漢の「国史」ですから、旧記に照合し、吟味検討の結果、信用可能な旧聞を確信した記載なのです。孔子の話の裏づけになるだけの確実性と説得力をもたなければ、皇帝をはじめ支配層やインテリ階級に承認される事は無いからです。そして、孔子の話を出した上で述べる事で、孔子以前の歴史事実を記している事になります。」

ここで『漢書』と王充の『論衡』の文意はリンクします。つまり班固と五歳年長の王充は、後漢の歴史書『後漢書』に記載がある通り、紀元五七年の倭から来た使者の洛陽朝見と後漢初代皇帝である光武帝から印綬を授けられた時の、華々しいセレモニーの同時代目撃者でもあるのです。従って王充と班固が共通の読者（前出の皇帝と王朝知識層）に対して記す倭人とは、これと同一の倭人でなくてはおかしいのです。それが、江戸時代に志賀島から発見された「漢委奴國王」と刻まれた倭奴国王印で、これらは後漢と冊封関係にあった倭人の国が、九州北部を含む地域に存在したことを示しているのです。

「漢委奴國王」についての読みについては後で述べますが、以上が古田氏の説で、私はこれらが論理的で正しい説、だと思います。

3　鬯（暢）草とは何か

周が殷を滅ぼして新しい国づくりをやっと完成した成王の時（紀元前一一〇〇年頃）、遙かに遠い倭人と越常とがお祝いの品を持ってきた。この時、摂政として実質的政権を担当していた周公旦は喜んだ、と思います。

この時の倭人が献上した、鬯（または暢）草とは神酒に使

う香草、だと言われていますが、では具体的にはこれは何なのでしょう。

これを鬱金（うっきん）草、ウコンと解釈したのは、前出の江上波夫氏です。確かに鬯は、黒黍にウコンを混ぜて醸造した香酒とする漢字の語句説明がありますが、ウコン自体はインド原産で、中国に伝わったのは唐代とも言われています。又古代中国において神酒の香り付けに、これが使われたかどうかは定かには分からないのです。香草であればウコンでなく別の物でも良い、と言う説もあり、たとえばハーブの様な草だとも言われています。けれどやはりウコン同様これも、列島の倭人が持参するには無理があるかと思います。古田氏も祭祀用に神酒に混ぜ込む薬草だが、今後の課題とし、何かまでは言及していません。

暢の漢字語句説明として、長くのびる、よどみなく通る、の意味があり、長く伸びた草がイメージされます。そこからの連想でしょうか、「昆布」と言う説があります。出典は不明ですが、ネットの古代史の書き込みの中には散見されます。「長い草、伸びた草」のイメージに、確かに昆布の形状はピッタリします。代表的な昆布であるマコンブは2～7ｍ位、日本で最も生産量の多いナガコンブでは２０ｍにもなります。しかし昆布は、その生産地域が北の海にあり、九州～西日本の貢献物として、私には少し違和感があります。

又最近、有力な説として正木裕氏により、「桑」説が出されています。氏の久留米大学公開講座に於ける講演（二〇一三年）で述べられたものですが、理由としては桑の実が漢代の書物である『神農本草経』の中で、桑の葉や実が「神仙薬」として紹介されている事。『三国志』「魏志倭人伝」の邪馬壱国に記載された記事に、

「稲やカラムシを栽培し、養蚕する。紡いで目の細かいカラムシの布やカトリ絹、絹綿を生産している。」

と、言う養蚕の記述がある事。養蚕については紀元前十一世紀の箕子による養蚕の伝承が伝えられ、時代的に桑を植え、蚕を飼った事に対応する事、があげられています。

確かに現在でも、漢方薬に「桑根白皮」と言う桑を使用したものがある他、桑の健康茶もありますが、私が一点疑問なのは、桑は中国の方が特産で、倭人の特産品として献上して、珍しがられるだろうかと言う点です。

又正木氏は、この献上した倭人が、最も古い縄文水田である「板付や菜畑の遺跡」の発見された北九州の倭人国家だと推察されていますが、これにも、やや異議があります。

と、言うのは、私はこの時の倭人貢献のリーダー国は出雲だと考えるからです。そして鬯、暢草ではと考えているものが「藻」だからです。実際には藻の一種である「海苔」ではないかと考えています。昆布も海藻ですから、考えとしては近いのですが、前記の通り産地の点で除外されます。藻と海苔は後述しますが出雲の特産品です。

そこでまず『紀元前十一世紀の倭国』がどこであったのかが問題になるかと思います。紀元一、二世紀頃の倭の国が北九州の博多辺りにあった事は、前述した『後漢書』東夷伝にある後漢の光武帝からの印綬を授けられた、と言う記事からも推測されます。それは「漢委奴國王」と刻まれた印ですが、従来これを「漢の委の奴國王」と三段区切りで読ませ、北九州の奴國との解釈がありましたが、中国歴代王朝の金印の印文ルールからすれば、授与者（中国側）と非授与者（夷蕃国）の二者のみを記す二段国名として読むべきで、「漢の委奴國王」が正しい読み方だと思います。では「委奴國王」の「委奴」とは何か、これは漢王朝の宿敵である北の「匈奴」の対句国名だと思われます。「匈」は猛々しいを意味する文字で、「委」は従順を意味する文字です。夷（い）と言う発音が、古代倭人の名称で、それに「委」の字を当てたと思われます。後代、この「委＝い」音は、わ音に変化し、「倭＝わ」と呼ばれますが、意味は同じで、「委奴」は倭人の国を意味します。

それでは、この国が紀元前十一世紀から続く倭人の中心国であったかと言うと、中国文献からは分かりません。先に説明したようにこの時代を記載した『論衡』には、その中心地域の説明はありません。

実は『論衡』以前の文書で、倭人について書かれたのだろう、と思われる周代の文書が存在するのですが、やはり倭人の中心領域の記載はありません。参考まで記載します。

『礼記』（らいき）

「東方、夷と言う。被髪文身、火食せざる者有り。」

解説を入れ、要訳します。

「東に、夷と言う民族がいて。髪は結わずにざんばらで、（漁猟で海に潜る為）体に入墨をし、（魚等に）火を通さず、生（つまり、刺身）で食べている者がいる」

『尚書』（しょうしょ）

「島夷、被服す。」

「海隅、日を出だす。率俾せざるはなし」

解説を入れ、要訳します。

「島に住む夷の人々は、動物の皮を着ている。」

「日が出る所にいる海の隅の人々は、中国の天子に心服し、使いを送ってきている」

『山海経』（せんがいきょう）

「蓋国（がいこく）は鉅燕（きょえん）の南、倭の北にあり。倭は燕に属す。」

解説を入れ、要訳します。

「朝鮮半島にある蓋国は、大きな燕の国の南側で、倭の北にある。倭は燕国に属して周王朝に従っている。」

どの書物にもこのように列島の倭人らしき記載があります。因みに尚書の二つ目の文は周の周公旦の言葉です。『論衡』の内容に対応しています。又『山海経』の文は、倭が燕国を介して、周王朝に貢献している事を述べているようです。

以上から、この縄文倭人が、分れて百余国のどこからの使いなのか、判断できません。正木氏は「板付、菜畑遺跡」等、稲作の先進地域である北九州からの使節、と述べています。あるいは宗主国でなく、百余国の有力国からの使節、との解釈もでき、氏の説も否定できないのですが、倭の百余国の統合と言うものが、漢代とは違い、どの程度であったかが問題となります。

私は、紀元前十一世紀のこの時代、百余国の統合は、勿論中央主権国家ではなく、周王朝に近い緩い封建制で、強力な宗主国や中心国とは言えないまでも、リーダーとなる国はあったと考えています。その国が周王朝との貢献の相手であったのだと考えます。

私たちは紀元八世紀と言う、はるか後世の編纂された自分たちの史書『古事記』と『日本書紀』（以下『記紀』と記載します）の中に、その「出雲の王朝」を推測できます。

4　出雲王朝

出雲に古い王権があった事は、『記紀』における出雲神話を見れば明白なのですが、出雲に考古学的出土物が無かった事から、長い間これは歴史的事実ではなく、おとぎ話だと軽視されてきました。

前出の古田武彦氏が、一九七五年にその著書『盗まれた神話』の一章「最古王朝の政治地図」で、北九州に誕生した倭国（倭奴国）に先行する「出雲王朝」の存在を述べていますが、当時の学界からは、やはり出雲国の存在は否定的に見られていました。

私が学生の頃もそのような時で、門脇禎二氏『出雲の古代史』、梅原猛氏の『神々の流竄（るざん）』等、出雲は実態のともなわない神話の国と言うイメージが形成されていました。ところが一九八四年の夏に、島根県斐川町の荒神谷遺跡から三五八本もの多量の銅剣が出土し、翌年には銅鐸や銅矛も発見されました。当時、日本全国で出土した銅剣の総数が三百位でしたから、これは驚くべきものでした。後に梅原氏も先の説を否定した『葬られた王朝―古代出雲の謎を解く』で、古代出雲朝の実在を述べています。

これにより出雲の古代に何かしらの国があった事が証明され、古田氏がこれ以降の『古代は輝いていたⅠ』『古代史を疑う』『古代の霧の中から』等の著作で述べる出雲から北九州への権力の移行、いわゆる「国譲り」が歴史的事実の反映である、との説の強力な論証になった、と言えます。

この小論の本題からは少し外れますが、出雲の王朝がどの様なものであったのか明らかにする為、古田氏の「国譲り」「天孫降臨」についての解釈を記します。ご存じの様に、『記紀』に記載された神話で、出雲の大国主ら国津神に対する天津神による、主権の移譲要求の話です。戦前は全てが真実の歴史

として語られていましたが、戦後史学界はこれを机上で作られた物として全否定しました。古田氏は歴史事実に照らし、以下のように述べています。

1、神話は戦後史学が言ってきたように、大和朝廷の史官による創作ではなく、歴史上の事実を本質的に反映している。

2、「天孫降臨」は紀元前二～三世紀頃、壱岐、対馬等の朝鮮海峡を拠点とする海人（あま）と呼ばれる人々による筑紫への侵攻、青銅器の武器を携え、稲作が盛んな豊穣の地への侵攻の史実を核としている。

3、そして「国譲り」は、出雲王朝に筑紫侵攻を承認させようとした「武力脅迫」であった。出雲は筑紫の国々の緩いながらも盟主国でしたから、それに抵抗したようですが、神話にあるようにギリギリの所では倭国の統治権を移譲しました。

4、海人族は元々が出雲王朝の有力配下であったが、このクーデターによって権力の移譲を受け、筑紫の国々を征服した。その後、新しい倭国の王朝を開き、紀元五七年に後漢の光武帝から印綬を授けられた。

これらの論証は先にあげた著書に詳しいので、興味のある方はお読み下さい。

以上から私は、紀元前十一世紀の倭人の貢献は、出雲国が百余国の盟主国、リーダーとしておこなってきたと思います。そしてそこから周王朝に貢献された物は、出雲の名産で神聖な供物とされた「藻」である「海苔」であったと推測するのです。

「海苔」は『記紀』と同じ八世紀に編纂された『出雲国風土記』の中でも、出雲の「むらさきのり（紫菜、紫苔菜）」として、島根郡、秋鹿郡、楯縫郡、出雲郡の特産品として記載され、特に楯縫郡の物については、

「但し、紫菜は特に楯縫郡の物が最高」

と、特記されています。ここには奈良、平安時代から現代まで続く岩海苔の名産地「十六島（うっぷるいしま）」があります。冬の日本海の岩場で一枚一枚摘み取られた貴重な十六島海苔は、香りの良さが特徴で、繊維がしっかりとし、食感がシャキシャキして酒や水に浸すと、直にふんわりほぐれます。

更に乾燥した海苔は軽く、貢献に向いている品で、奈良、平安時代には朝廷へ、江戸時代は幕府に献上されてきました。

更に、いかに海苔（海藻）が出雲で貴重品であったかは、その国名の出雲が「厳藻」からきていると言う説からも補強されるように思います。従来出雲の呼称については、雲がわき出る様子から、付けられたとされるものが多く、出雲の枕詞である「八雲たつ」もその解釈の上にありましたが、けれど雲が湧き出る状況と言うのは、出雲に限らず一般的自然現象だと言え、定説のようですが、解釈に理がないように感じ

ます。これ以外で特に私が説得力があると思うのは、水野祐氏の「厳藻（いつも）＝神聖なる藻」説です。神聖視した特産の厳藻から国名が取られている、と言うものです。証明は難しいのですが、心に響くような意見です。

そこから私はこの厳藻こそ、十六島の天然岩海苔だ、と思うわけです。

5　縄文時代について

三十五年程前、バブル期の頃は海外への旅行が盛んで、私もピラミッドを見に、とあるツアーでエジプト観光に出たのですが、九割は、今の私よりやや年配の方々でした。エジプトの遺跡に感嘆された老夫婦が、

「凄いよね、エジプト文明。この頃の日本って何、ジョウモン？弥生時代？」

「ジョウモン。何か、冴えないわよね」

と、会話されていました。

石の文明と木の文明の違いで、後世への遺跡の保存の問題もあるのですが、縄文時代の凄さ、と言うものが、当時一般的には、まるで周知されていませんでした。「三内丸山遺跡」や「諏訪・阿久遺跡」のような縄文都市と呼びたくなるような発見により、縄文時代のイメージは上がってはいますが、あるいはこれは今もまだ払拭されてはいないのかもしれません。縄文時代が、エジプトや中国文明にも比肩する世界史上有数の文明であった事を、皆さんはご存じでしょうか。

縄文時代は、その開始は今から一万四千年前とされていますが、すでに土器はありました。その時、他の地域はどうかというと、中国は河姆渡遺跡の六千六百年前、仙人洞遺跡の八千年前、近年発掘された北京の近くの南荘洞が一万年位前です。しかし日本ではその二千年前からの物が多数存在し、神奈川県の大和市から発掘された最も古い縄文土器は更に四千年は前のものでした。実は土器に関しては中国はずっと後進文明の状態にあったのです。沿海州も今やっと一万二千年前が出てきましたが、それでも日本よりはずっと遅いわけです。以前は、メソポタミアから土器文明が東西に伝わったと言われ、私もそう教えられてきましたが、今はそれが全然ナンセンスな説だったわけです。西アジアの物は日本よりも数千年も遅いのです。

これらの測定はアメリカのリービー博士によって発見・発明された「放射能測定」によってもたらされました。同氏はこれによってノーベル賞を受賞しています。当初、この測定によってもたらされる日本の土器の数値があまりにも古い為、日本の古代史学界はパニックに近い状態で、

「測定装置の誤作動ではないのか」

とか、

「いずれ、もっと古い数値の土器が中国や西アジアから出土

する」

とか言われていました。

私の手元にあり、学生時代に読んでいた中央公論社の『日本の歴史1』〔井上光貞氏監修〜昭和四十年発行〕でも、

「この測定値は絶対のものであろうか、一抹の不安があり、将来の研究を待ちたい」

と、保留にしています。

しかしながら、今日にいたっても状況はかわらず、大陸からは若干古い物も出ていますが、日本の土器年代のレベルには及ばず、むしろ日本からは更に古いものも出ています。

世界的な考古学の認識では、日本列島の土器は世界でも抜群に早い時期のものだとされていますが、何故か日本の考古学者の中には、今も多数の懐疑的なものがあるそうです。

又黒曜石の流通は大陸と日本列島間に交流があった事を示しています。金属器の登場した三千年前からは文化の方向は、大陸から日本でしたが、土器その他に関しては日本から大陸への伝播もあったと考えられ、他にも伝播の方向が従来の説とは逆である、と思われるものもあります。

これについても些細なエピソードがあります。少し前にボランティアで、ある塾で中学生の歴史を教えていた時に、休憩時間の雑談で、学生に土器の日本から大陸への伝播、を話していると、そこの老人の塾長に、

「そんな話、私は聞いたことがない、変な事を教えられては困る」

と、苦情をだされ、それっきりになった事がありました。教育現場での神話授業のない事など、現行の歴史の学校教育には色々疑問もありますが、それは別の話ですので、ここで筆を置きます。

6　様々な焼酎を取寄せて

私は酒店で、次の三つの焼酎を注文しました。

一、『本格こんぶ焼酎　喜多里』
　　札幌酒精〔北海道〕

二、『海藻焼酎　いそっ子』
　　隠岐酒造〔島根県〕

三、『海苔焼酎　有明海』
　　清力酒造〔佐賀県〕

これらはどれも焼酎に海藻を混ぜたものですが、元になる焼酎は蒸留酒ですから、古代の、例えば黒黍で醸造したような鬯（暢）のような醸造酒とは違います。単に風味を感じる為に、参考の為に取り寄せ、飲んでみましたが、現在でも海藻や海苔や昆布の酒があると言う点に興味は魅かれます。無論現在は、桑の焼酎もありますし、ウコン入りの酒もあるわけです。古代に於て「口噛み酒」から始まった酒は、醸造酒が作られていましたが、果たして鬯（暢）草の神酒とはどの

ようなものだったのでしょう。現在の蒸留酒に比べればアルコール度数も薄い酒だと思われ、巫女の神がかりに使うのに用がたりただろうか、と思ってしまいます。大麻のような草の方が幻覚を呼ぶには良いように思えるからです。

そんなわけで紀元前十一世紀に倭人が献上した鬯（暢）草を思いながら、私はとりあえず海藻と海苔の焼酎を飲んでいます。

（了）

選評

竹中　征機

入選

「十万歳三最期の足跡を訪ねて（ある巡査の『書簡』から）」

木村　裕俊

歳三の若松町の仮墓前には花が絶えることがありません。若い女性によって時を越え、手向けられているわけです。

実際墓といっても終焉の地とも言われるわけですがそれもまた定かではありません。この作品はある巡査の資料を以て迫ります。

英雄というのは「義経」伝説のように後世に伝えられ尾鰭がつくもののようです。

これは謎として残ることによって実証するロマンが残ります。

木村さんの作品の良さは推察や引用のみの浅薄な私見でなく資料に基づく上での考察だけに大きな説得力を感じます。

今日であれば五稜郭に埋められていた三遺体を染色体の見地からたどれば明白になったに違いないがその推理に魅力があります。

遺体収容に尽力した柳川熊吉の官軍という新しい権力の台頭の最中、任侠道を貫きとおし、遺体収容の姿に心が打たれます。

「碧血」とは義に殉ずる者の血は何時か碧く変わるの意のようだが分かり易くまとめられたことに敬意を表します。

「基坂の老医師」

齊藤　満

ここで取り上げられた医師「木内幹」については一般にあまり知られていませんが、検尿の重要さを認識されていた事実に驚かされます。今でも、血液検査と検尿はほぼセットになり、その辺りに着目されたことに大きな意味があります。特に、作者は檜山管内の僻村に住み身に沁みてその不安をかんじてきたわけです。

作者は長いこと夢に描いていた元町の港の見える住居を借りる機会を得、木内先生の婦人科兼研究所に同居する妙なめぐり合わせとなった。そこで注目されるのは、「胎児男女診断」ことにふれる問題に重大性を感じていた医師のように理解した。

これから少子化、高齢者医療、無医村の拡大化等の中この作品は木内医師の偉業として貴重な資料になることだろう。

「僕と勘太朗」

菊地　政義

「姫川」に一度だけ行ったことがある。山間の奥に小さな流れがあり道立のサケマス孵化場があり、そこで生きたニジマスの親魚を買った。当時中学校の水産クラブで孵化の実験をするためだった。

子供たちの夢と付き合うことを信条としていたからだ。

この寓話的展開が筋に馴染みとても面白かった。

実は、カラスの幼鳥は本当にグロテスクでかわいいなんて恐らく誰も思わないだろう。まず、白い肌にまばらな産毛を散らし、とても飼う代物ではない。

家族に支えられての飼育だが、日々に生じる細かなことは直接子にかかり、そのことにより、子は成長する。これは単にカラスの飼育物語でなく、共に成長した懐かしい記憶体感知の温かな物語で胸を揺する。

佳作

「ブログより」

菱井　亜紀

昔のＰＣはとてもごつくて、私は、テレビ程の大きさのものを購入した記憶がある。

デスクトップ（卓上）型で今のようにノートパソコンは少なかったし、急速な電子機器が時代を改革する雰囲気があった。

作者は相当の韓国ドラマのファンであり、その中から文化的価値を見いだそうとする姿勢に好感を感じる。

今、韓国については、好きか嫌いかのマスコミ的話題性に埋没し、作者のいう儒教を根幹とする文化制度は語られない。

そんな今日ほど、膝を交えての交流が一層必要なことかも知れません。

「無題」

宮川　れほ

無題とした意味は、思いが有り過ぎて簡単に決められなかったのだろうと推察される。

好きな運動もとめられ、心臓という要の臓器に不具合を生じ年少にして大手術を余儀なくされたその心情に心を寄せる父母の姿、そこに体感知を思う。

「涙の数だけ強く、優しく」といったフレーズの歌がありましたが、作者は確実になれると思います。

フランスの哲学者の言葉に「病気は人の心を耕し人を優しくさせてくれる」いつも何事にもポジティブに生きて下さい。

何故なら、若さという光があるから―

『紀元前十一世紀の倭人国』考」

髙橋　剛治

この作品は「漢書」に登場する朝鮮半島の楽浪郡の古代日本国の論考でなかなか興味深く読ませて頂いた。

承知のように後漢書「東夷伝」や「魏志倭人伝」等である。

その後漢書には「奴国」の使者あり印綬を受けたとあり、その印も出土してそれが裏付けられた。特に面白かったのは、縄文時代や弥生時代の大陸との想像を越える交流の仮説も含め黒曜石の伝播等々夢を広げてくれる。

今でいう石川、福井は極めて朝鮮半島に近く朝貢と言われる暢草について大陸からみると海藻類というのが自然の帰結に思えるわけです。立派な作品でした。

また縄文人の大陸往来も可能と思える。

その外、推したい作品として佐藤健さんや小林ハルさんの作品が良かった。佐藤さんは文章は良かったが内容が絞れていなかった。小林さんはテーマが良かったが内容を伝えるための枚数が少なくテーマの重さにはいたらなかった。

詩

入選

廃校、

武田　友

ぼくは
一本の木だった

森から切り出されて
仲間たちと
小さな校舎になった

その居場所は
子どもの歓声と
たくさんの

日常があふれていた

けれども
すべてのものに
朽ちる日はやってくる

それでもまだ
一生の終わりは
いつなのだろうと考えている

校舎の廊下には
子ども達に
忘れられたビー玉が

西日をあびて
光っている

それは
森の中にさす光だ

夕暮れの風が
そっと
教えてくれた

いま
ぼくはここに
立っているのだと

詩

佳作

電話ボックス

玉掛　公恵

歩道橋の下に　佇む
　電話ボックス
申し訳なさそうに
　影の様に　佇んで居る

ビルに輝くネオンより
　控え目な灯で
人との触れ合いを
　待って居る

「流行遅れなの」と
　　呟く　電話ボックス

慰める様に
　木枯らしが吹き
落ち葉が一斉に
　舞い上がり
電話ボックスを　囲む様に
　踊って居る
「ワン・ツゥー・スリー」
「ワン・ツゥー・スリー」
「ワン・ツゥー・スリー」
「ワン・ツゥー・スリー」

僕は

不慣れなこの場所で

月明りより　君を見て

「ホッ」としたよ

君を見て居ると

なんだか心が　暖かいんだ

心に「明り」が　灯った様に――

大丈夫！

君は　長生きするよ！

僕より

長生きかも知れないネ！

詩

佳作

りんご

清水　牧子

毒りんご
蜜の味
時には嘘もつきたいし
わがままに過ごしてみたいな

何のりんご？
蜜の味
とりあえず
おいしく頂きました

真っ赤なりんご
蜜の味
ひんやり冷して
ひとくちふたくち

本当のりんご
どんな味？
食べてみたいな
蜜の味

詩

佳作

名もある花

梅村　美保

道に咲く花
名もある花なのに
誰にも守られもせず
良くぞここ迄咲いたね「あさがお」
『あさがお』
夏の匂いいっぱいに　目を楽しませてくれる
誰かが　手を添えて整然と咲いているはず…
なのに、じゃれあった夏草の上を這うように
咲いている・しょぼくれた「あさがお」
同じ名前で同じ運命のはずなのに

たった一人ぼっち

それでも陽に向かいて、懇願してる

そのはかなげな生命(いのち)に、私は涙した

涙で、一人ぼっちの“朝顔”が二つ三つと

重なり、仲間が増えた

ようにみえた

選評

鷲谷　峰雄

今回は応募が26作品でした。

現代詩には短歌や俳句のように、字数や季語がありません。自由な口語自由詩です。

だからこそ不自由さもあるのです。どこまで表現の自由さがあるのかということです。

それは自分で既定するしかないのです。文章にポエジーを挿入する難渋さもあるでしょう。でも、詩作品が完成したときの歓喜もあります。

作品のなかにどれだけの詩があるのかで、詩作品の水準が決まるのです。

入選　「廃校、」

武田友

構成力があります。文章の組み立てが知的です。

ぼくは木だったが、ある日、森から切り出されて校舎になった。そこに子供たちの歓声とたくさんの日常であふれていた。でもどれだけの年数がたったのか。始めがあれば終りもある。そうしてぼくの場所は廃校になった。

校舎の廊下には、子供たちに忘れられたビー玉が西日をあびていた。それはぼくが生れた森のなかの光だ。

ぼくは今ここに立っている。森のような、人気のない廃校に立っているが、あくまでもぼくは一本の木だ。

文章は明晰で詩的です。ぼくの存在は道理であり筋道がとおっています。形象力のある詩作品です。

佳作　「電話ボックス」

玉掛公恵

時代遅れになった電話ボックスは、目立たない歩道橋の下に申し訳なさそうに佇んでいます。まるで誰かの影のようです。

しかし、使う人もいるので設置しているのでしょう。視点がよいのです。

電話ボックスは、すでに希少価値になりました。その哀感も感じます。

木枯らしの日は、落ち葉が舞い上って、電話ボックスを囲んでいるのです。どんな季節がまわりをとりまいても、ただ佇んでいるのです。

この作品は前半がよいのです。孤独にたえて佇んでいる電話ボックスの沈黙の深みには、かなわないのです。

佳作　「りんご」

清水牧子

りんごは秘密の味でもあるのでしょう。それは蜜の味だったり、毒りんごだったりするのです。

でも、本当の蜜の味をさがしています。真っ赤なりんご、ひやりと冷して、ひとくち、ふたくちと食べてみたいりんご、そんな秘密の味ももとめています。

時には、嘘をつきたいし、わがままに過ごしてみたいとか、内面を表現しています。

やはり、当人にとっては味わいたいのは、蜜の味なんです。今は謎の味ですが、

あこがれはつづいています。
りんごへの集中力はよくでています。それは散文のなかからポエジーをもとめるかのようにです。りんごの存在感がよく出ています。

佳作　「名もある花」

梅村美保

あさがおが道に咲いていた。夏の匂いがいっぱいの花。
咲いている所が、夏草を這うように咲いたところだから、名のある花が咲く場所ではない。それでも陽に向って懇願しているあさがおの花。
それでも仲間が二つ三つと重なり増えたようにみえた。
みえたはそうなってほしいとの願望です。名のある花も生命力があるのです。
「夏の匂いいっぱい」は詩的な言葉です。こうした言葉をいたる所に挿入してください。そうすると豊饒な作品になります。

短歌

山縣庸美選

入選

住む星のなべての守護に冀(こひねが)ふ苦難の民に慈悲の恵みを　石岡　繁雄

馬鈴薯の畑に除草剤撒く父の一歩一歩は生きてる証　清水　法雄

ブランコの揺れ残りたる一瞬に少女羽化して笑みの羽伸ばす　水関　清

佳作

甲羅干しつらなる中に小亀見ゆ親の真似して大きな欠伸　石嵜　章枝

若者が身を折り曲げてぎこちなく人力車引く大三坂を　竹田　光彦

夏に会う孫の甚平縫う針をひとまず休め夕餉の支度　柴田　泰子

亡き母の裁縫箱を取り出してボタン繕ふ父の手硬し　伊藤　静子

雀の子砂浴びするを息ひそめ眺めていたり日曜の午後　中崎　裕美

選評

山縣　庸美

入選

住む星のなべての守護に冀（こひねが）ふ苦難の民に慈悲の恵みを

日本のみならず、世界的にも苦難の続く中にあって、この境地に達せられた願いが伝わって来る。若い世代には中々こうは詠めぬと思う。

ジャガイモの畑に除草剤撒く父の一歩一歩は生きてる証か

高齢者である父を見守る作者の気持が下の句に捉えられている。ジャガイモは「馬鈴薯」に、結句の「か」は言い切って削除したい。

ブランコの揺れ残りたる一瞬に少女羽化して笑みの羽伸ばす

下の句の擬人化が気にはなるが、そうかと言って「笑みをば返す」では平凡か。少女の笑みが思いがけなく大人っぽく作者は感じたのであろうから原作どおりで採りたい。蝉や蝶の脱皮の過程を思いながら。

佳作

甲羅干しつららく中に小亀見ゆ親の真似して大きな欠伸

ユニークな情景を詠まれていて心が和んでくる。第二句の「つららく」はリズムが悪いので素直に「つらなる」としたい。

ぎこちなき若者が身を折り曲げて人力車引く大三坂を

「若者が身を折り曲げてぎこちなく人力車引く大三坂を」観光シーズンに見かける情景。初句に「ぎこちなき」は落ち着かないので順序を替えた。

夏に会う孫の甚平縫う針を止めて合間の夕餉の支度

第三句の「止めて合間の」では歌の流れが途切れて仕舞うので「ひとまず休め」では如何。

亡き母の裁縫箱を取り出してボタン縫ふ父の手硬し

第四句「ボタン縫ふ」をつくろふと読むのであれば「繕ふ」にしなければ。

雀の子の砂浴びするを息をひそめ眺めたる日曜の午後

六、七、五、五、七音に気付かれましたか。「雀の子砂浴びするを息ひそめ眺めていたり日曜の午後」と添削。若い方のようなので今後に期待。

短歌はやはり抒情詩であり、何に感動したのか、その中心を見極め真実を調子をもって表現すべきであると思う。どうして採られなかったのかと悩む時、何日か後に読み直すと解ることがある。表現が過剰、常識的すぎる、などなど選評はさまざまであり、答えはない。面接歌会なのであれば、作者の意図をお聞きすることも出来るのだが。

選者詠

山縣庸美

ＮＨＫが資料提供を受けし「拝謁記」遺族は対処に心遣ひて

雪の下に頭もたげて福寿草黄色き小花あまた咲き出づ

莢豌豆の天麩羅は旨かりき日々掬ぎ取りて妻と食せり

吾が家の頭上を飛びゆく到着便海霧の中低き音にて

ゴーカート音たて走る交通公園火葬場跡とは子らは知らざり

俳句

熊澤 三太郎選

入選

合歓の花こくりこくりと薄暮かな　石嵜章枝

病む母に窓いっぱいの花火かな　竹田光彦

湯豆腐や言葉の要らぬ老いふたり　水関清

佳作

実家なく友なき故郷墓洗ふ　富樫進

稲架掛けの父の骨まで夕日射す　清水法雄

河骨の小首傾げて風の径　住吉紀美子

風見鶏矢の先にある残暑かな　齋藤ふじお

鉄風鈴レトロ電車の来て戻る　佐藤理

選評

熊澤　三太郎

入選

合歓の花こくりこくりと薄暮かな

いい句になりました。「合歓の花」は夏の季語。薄絹の扇にも似た花は晴天より曇天、とくに雨の日はひときわ美しい。この合歓の羽状の葉は、夜になるとたたんで就眠運動をするので「ねむ」の名が付けられたようです。それを作者は「こくりこくり」と表現したのです。「ねんねの木」とも云われているようですね。花は夕方に開きます。そこで作者は「こくりこくりと薄暮かな」と詠嘆しました。開いた花に葉が居眠りするように閉じようとしているので花もこくりこくりとしているように見えたのでしょう。「合歓の花」に「薄暮」の取り合わせがとてもいいと思いました。

病む母に窓いっぱいの花火かな

「花火」は江戸時代から秋の季題となっていると歳時記にあります。けれども今では夏の納涼行事になって、夏の季題にしている歳時記もあります。それはともかくとして「病む母」と「花火」のきわだっている対照に心動かされました。思い切った取り合わせです。加えて「窓いっぱいの」の表現に切ないものを覚えます。その窓に映えた花火を病の母はどのような思いで眺めたでしょうか。

湯豆腐や言葉の要らぬ老いふたり

何やら古めかしい誰でもことばにしているような句と思われがちですが、私もしばらく考えて、よし、これを頂こうと思いました。「言葉の要らぬ老いふたり」の表現へつなぐ季題に「湯豆腐」を選び取って詠嘆したのがいいと思ったのです。「湯豆腐」の季題は冬。歳時記の例題句に「湯豆腐や淡々として老の日々　内田柳影」がありました。この句と比べてみますと「老いふたり」の方が気配の濃い句ですね。さらにいまひとつ、この句をいただいた事由に、私も妻も八十路を過ぎていることでした。「老いふたり」元気です。

佳作

実家なく友なき故郷墓洗ふ

もう今や「実家なく」なったばかりか「友なき故郷」とのことですから幼友だちも他郷にあるか、亡くなってしまっているのでしょう。その生まれ故郷に「墓」のみが残っている。その墓参りをしたのです。歳時記では八月の季題になっています。墓参り、をはじめとして、墓掃除、掃苔、墓洗ふ、展墓、墓参（ぼさん）等あります。盂蘭盆にこの墓参りをすることを云いますね。（うらぼん）などとむつかしいことばですが陰暦の七月十三日～十五日を中心に行われる仏事ですね。何はともあれ、この句「墓洗ふ」の語が適しています。ただ、中七を「故郷」としたのでいささか固くなりました。

「実家なく友もなき里墓洗ふ」としては如何でしょうか。私もこの句と同じような境遇にあります。

稲架掛けの父の骨まで夕日射す

随分思い切った表現ですね。

季語は稲架（はざ）。秋ですね。「稲架掛けの」ですから、稲架そのものを組み立てているのか、それに稲束を掛け干しているのか。いづれにしても「父の骨まで夕日射す」と詠じました。おそらくシャツ一枚の肌着姿から作者は「父の骨まで」浮いて見えているのを発見したのでしょう。それに「夕日射す」と云い放つように表現しました。父の働く姿に思いを馳せたのです。

河骨の小首傾げて風の径

河骨（こうほね）は六月の季題になっています。六月から七月にかけて、大沼湖に睡蓮と一緒に咲きますね。川に咲くところからこの名がつけられたようです。黄色い花を開いて水上に可愛らしく印象的ですね。「小首傾げて」が如何にも河骨らしくいい表現になりました。あちら向くもの、こちら向くもの、様々です。花茎というのか、花を乗せた棒のようなのが五センチ程水面に突き出て花を開いています。その河骨に風が通って揺れているのを「風の径」としました。大沼には舟径があってその両側に河骨や睡蓮が咲いていますね。その舟径が「風の径」かも知れないと想ったりしました。

風見鶏矢の先にある残暑かな

季題「残暑」を「矢の先」に捉えて感覚的とでも云ったらいいでしょうか。そのように表現しました。「風見鶏」は鶏にかたどった風見ですね。それに矢が付いていて、風向きを指し示すようになっています。寺院の塔上などに装置されていますね。「残暑」がその「矢の先に」収斂（れん）されているような暑さで自分たちにも押し寄せていることを感覚的に表現しました。面白いですね。また風見鶏はいつも変わる風向きを捉えて動きまわっています。どこを向いても暑くて身の置き所がないのです。このように意識的に抽象的な事象を表現して句にすることもあります。

鉄風鈴レトロ電車の来て戻る

「風鈴」は夏。この「鉄風鈴」は南部風鈴ですね。いい音です。それが函館の「レトロ電車」に鳴っています。「レトロ」はフランス語であると辞書にありました。あらためてその意味を確かめると、復古調、懐古的と記されていました。函館の風物詩句として頂きましたが、そればかりでなく淡々として、趣きの句と思いました。やはり「鉄風鈴」がこの句の生命ですよね。それに「レトロ電車」に会うと、あっ！乗ってみたいなと思います。電車の窓を開け放って鉄風鈴を鳴らしながら走る夏のレトロ電車に今度こそ乗ろうと思います。古い南部風鈴なら今でも我家にあります。盛夏には今もいい音で鳴っています。

選者吟

熊澤　三太郎

吾が庵へ来る鴉には霰(あられ)餅

せせらぎといつも一緒の猫柳

散歩すると云ひ酒買ひにゆく残暑

机上また散らかしっぱなし文化の日

校庭の白樺凜と冬に入る

川柳

中村宵星選

入選

余生とはまだ言わせない夢が有る　白井靖孝

亡母に似る福耳ゆれて待つチャンス　岩本真穂

ゆっくりと鱈の身よそふ聞き上手　水関清

佳作

親子旅夫婦に見られ父元気　伊藤静子

臥牛山押させて下さい車椅子　水島悦子

人生の余白彩るにしん漬　加藤由美子

青い鳥無縁のわが家に子猫来る　石岡繁雄

断捨離に仕分け迷って日が暮れて　大山利子

選評

中村　宵星

入選

余生とはまだ言わせない夢が有る

白井　靖孝

寿命の有るかぎり、人生一日でも永く謳歌すべきである。

人生五十年と言われたのは、そう古い話ではない。

実に年金の組立は六十年を元に成され丼勘定ではないけど、五十五年退職して二・三年の受給で終りであった。

現在は九十近い所まで夢を描く事が可能と成った。有り難いことです。

亡母に似る福耳ゆれて待つチャンス

岩本　真穂

「チャンス」と日常茶飯事に使われているが、改めて立ち向うと、機会・絶好の時期・好機など、堅苦しくなる。

作者は、きっと裕福なファミリーに育てられ、耳だけでなく心も優しい清らかな慈悲の持ち主と思う。

母譲りの情け深い麗しさがよいチャンスを受ける事が出来ると思います。

ゆっくりと鱈の身よそふ聞き上手

水関　清

豊満な体に、海千山千を越えて来た秘め事を、ゆっくりと鱈の身を、ほぐさずに勝手気儘な話を整理して客の心を読み取り、又一つ新しい知識を得て湯気の向こうへ気を配る、など、覗かせて戴きました。

佳作

親子旅夫婦に見られ父元気

伊藤　静子

そう「良い日旅立ち」など、ＪＲの宣伝広告を思い浮べ、過ぎし日の淡い思い出の風情を醸し出し、映画の一場面を見ている様な気がする。

何時迄も元気なお父様で居られる事と思います。

臥牛山押させて下さい車椅子

水島　悦子

函館山が車椅子を押させて下さいと言っているのではなく、函館の風情の中にある一場面。様々な情景が浮び又沈み行き交う心の内にあるものが、車椅子を押したくなると思うのです。

人生の余白彩るにしん漬

加藤　由美子

昔、浜が白子で真白くなるくらい鰊が獲れたのは、幻だったのか、五六年物の大きな魚体が跳ねていた、それがばったり途絶え、見る影も無い。

それでも近年、山を養い河の自然を取りもどし、鰊の群来を微少ながらでも見られる様に成った。然し昔ほどではない、海温の上昇により、函館名物の烏賊も不漁に追い込まれている。

昔は昔で、鰊御殿などは観光の目玉として外来客を集めている。

想い出となる物と喋るのは楽しい。

青い鳥無縁のわが家に子猫来る

石岡　繁雄

チルチル・ミチルではないが、倖はすぐ其処にある。

愛くるしい仕種に癒される子猫が舞込み、福の神が来た様に思う。

円らな瞳、人を信じ懐に、時々悪さはするが、可愛い。人間の子供とは違うが可愛い。

これが一言でも喋ったら偉い事になると思う。子猫は何を考えているのかな。

断捨離に仕分け迷って日が暮れて

大山　利子

いざ捨てると成ると、勿体無い大切な想い出、どれもこれも喋り出しそう。捨てるなら何時でもと、日の暮れるのも忘れ、現実に帰れば足の踏み場もないくらい散らかり困ったと思う。

今直ぐ使う物と、使わないものと二つに仕分けて見よう。それから使う物の整理に仕分ければ先が見えて来ると思う。

選者吟

中村宵星

六法を杭に庶民の底力

健康で平和でたらぬものばかり

文字とは一字一字に神宿り

阿呆でいい仲間を繋ぐ蝶番（ちょうつがい）

人類のエゴに地球は山雷蠱（さんらいこ）

審査員紹介（＊本紙各部門受賞作品の掲載順）

随筆

函館文学学校講師　対馬俊明

小説・文芸評論

北海道教育大学名誉教授　安東璋二

ノンフィクション

函館文学学校講師
文芸誌『海光』代表　竹中征機

詩

日本現代詩人会会員
北海道詩人協会理事　鷲谷峰雄

短歌

新アララギ会員
道南歌人協会顧問　山縣庸美

俳句

函館俳句協会会長
『ホトトギス』同人　熊澤三太郎

川柳

函館川柳同好会顧問　中村宵星

あとがき

『市民文芸』第五十九集をお届けします。

今年の各部門の応募作品数は、

随筆十八編、小説十一編、文芸評論一編、ノンフィクション十一編、詩二十六編、短歌九十首、俳句一〇五句、川柳九十三句、計　三百五十五点となりました。

応募数は昨年度より微増いたしました。今年度は中学生や高校生の応募もあり、入賞された生徒もいます。常連の方々、初めて投稿される方、皆さまの応募に支えられて市民文芸は成り立っております。これからも作品数の増加はもとより、更に市民の皆様方に広く浸透するべく、取り組んでいきたいと思います。

今回中村宵星先生が、新たに川柳部門の審査員に加わってくださいました。これから、どうぞよろしくお願いいたします。最後になりますが、各審査員の先生方にはご多用中にもかかわらず、厳密なる選考とご講評、貴重なご意見を賜りましたことを心より厚くお礼申し上げます。

函館市民文芸　―第五十九集―
発行日　令和2年3月21日
編集・発行　函館市中央図書館指定管理者TRC函館グループ
（函館市五稜郭町26―1）TEL（〇一三八）三五―五五〇〇
題　字　木　下　順　一
表　紙　五稜郭公園の桜
印刷所　有限会社　日孔社

【 応 募 要 項 】

募集作品

１．随筆	400 字詰原稿用紙	５枚以内
２．小説	同　上	４５枚以内
３．文芸評論	同　上	４５枚以内
４．ノンフィクション	同　上	３５枚以内
５．詩	同　上	５編以内
６．短歌	同　上	５首以内
７．俳句	同　上	５句以内
８．川柳	同　上	５句以内

【 応 募 規 定 】

１．応募資格は函館市民であること（函館市内の学校に通学している児童、学生、生徒、また函館市内に通勤している者を含む）

２．原稿は未発表のものであること。

３．原稿には　**①応募部門**
②住所
③氏名（ふりがなを必ず付記のこと）
④年齢・性別
⑤職業（児童、学生、生徒は学校名・学年も必ず記載のこと）
⑥電話番号　を明記してください。

４．400 字詰め原稿用紙に手書き、またはワープロ・パソコン原稿によるもの。原稿用紙に手書きする場合、ボールペンもしくはインクで誤字脱字のないように、読みやすい字（楷書）で記載してください。
ワープロ・パソコン原稿の書式は、原稿用紙（400 字・20 字×20 行）設定で、規定枚数内であることをご確認のうえ、ご応募ください。
短歌・俳句・川柳は、すべての漢字にふりがな（読み方）を記入してください。
ふりがなについては、作品集掲載の際に表示を希望する箇所に（　　）をしてください。

５．応募原稿は返却いたしません。
また、入賞（入選・佳作）作品の著作権は、すべて函館市に帰属いたしますので、ご了承願います。

６．作品の中では個人情報保護に配慮し、個人・団体を誹謗・中傷するような内容の記載はご遠慮ください。